310.8
So634s
G

0003976001

0003976-001

310.8－So634s－G

孫文全集

外務省調査部・訳編

第一公論社

1939－1940

ABA

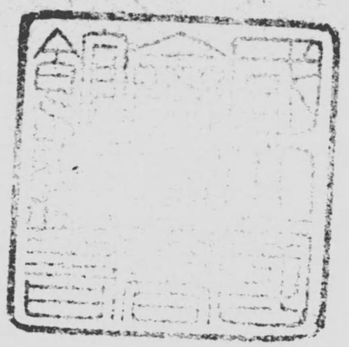
62102

外務省調査部譯編

孫文全集

（第一卷）

310.8
S0634A
G



533036

三民主義

目次

孫文自序……六
第一章 民族主義
第一講 總論……九
第二講 列强壓迫下に於ける中國……三三
第三講 民族主義の喪失とその原因……三八
第四講 民族自決論と世界主義……七八
第五講 民族主義恢復策如何……九八
第六講 民族地位恢覆策如何——結論……二六
第二章 民權主義

第一講　總論……一四〇
第二講　民權と自由……一七三
第三講　民權と平等……一九八
第四講　中國竝歐米に於ける民權發達の經過及現狀……二二六
第五講　民權問題解決策如何……二五七
第六講　完全なる民權政治機關は何か——結論……二九五

第三章　民生主義

第一講　總論……三三五
第二講　地權の平均と資本の節制……三七五
第三講　食糧問題……四〇八
第四講　衣服問題……四四一

後記

三民主義

孫文全集

三民主義

孫文自序

建國方略の心理建設物質建設社會建設の三書出版後、予は國家建設の起草を志し而して本書を完成せんとした。國家建設の一書は、之を前三書に比較し內容頗る尨大にして、民族主義民權主義民生主義五權憲法地方政府中央政府外交政策及國防計畫の八冊より成つてゐる。而して其の中民族主義の一冊は既に脫稿し、民權主義民生主義の二冊も亦その大部分を草就し、其の他各冊の思想の詮索研究の方針に就いても、亦大體規畫その緒に就き、餘暇を見て執筆一氣柯成に書き上ぐる許りの運びに至り、方に全書の完成を俟て出版の上世に問はんとしつつありし處、測らずも十一年六月十六日陳炯明謀叛し、觀音山を砲擊したるに依り、竟に數年の心血を注ぎて成りし各種草稿並に參考洋書數百種を悉く灰燼に歸したるは、殊に痛恨に堪えない。玆に國民黨の改組に

際し、同志に於て決心事に從ひ心を用ひて奮鬪するには、速に三民主義の奥義及び五權憲法の要旨を需めて宣傳資料とすることが最も必要である。故に毎週一回宛之が講演を爲し、黄昌穀君に於て之を筆記し鄒魯君に於て之が讀校を爲さしめた。今民族主義は已に講義を終りたるを以て、特に先づ單行本に印刷して同志に餉る。惟ふに此度の講演は、これが準備の暇なかりしと參考書のなかりしとに依り、登壇後隨意發言したるため、之を前稿に較べて遺忘せる點が頗る多い。勿論これが上梓に先立ち、訂正增補は爲したものの、本題の情義敍論の條理及び引證の事實に至ては、總て遠く前稿に及ばざるが如く思はれる。尙ほ望むらくは同志諸君に於て、本書を基礎として類推敷衍し、之が闕遺を匡補し、條理を更生し一つの完全なる書たらしめ、以て宣傳の課本たらしむるならば、我民族我國家の幸量り知る可ちざるものがあるであらう。

民國十三年三月二十日孫文序於廣州大本營

第一章　民族主義

第一講　總論

諸君、本日は諸君と共に三民主義に就いて語りたいと思ふ。抑々三民主義とは如何なるものであらうか。之を最も簡單に定義すれば三民主義卽ち救國主義である。然らば主義とは如何なるものであるか。主義とは卽ち一種の思想であり一種の信仰であり又一種の力である。凡そ人類が一事に對しその中の道理を研究せんとするに當つては、先づ思想生じ、思想貫通したる後信仰起り、信仰あつて初めて力を生み出すものである。故に主義とは思想に發して信仰に至り、信仰に依て力を生み出し、然る後完全に成立するものなりと云ふことが出來る。何を以て三民主義卽ち救國主義と云ふや。三民主義は中國の國際地位の平等、政治地位の平等、經濟地位の平等を促進し、中國をして永遠に世界に適存せしめんとするものなるが故に、三民主義卽ち救國主義なりと言ふのである。三民主義にして旣に救國主義なりとすれば、試みに問はんに、我等今日の中國は救濟を要すべきものなりや否や。若し果して救濟を要すべきものとするならば、卽ち當に三民主義を

信仰すべきである。三民主義を信仰すれば、即ち其處によく極大なる勢力を生み出すことが出來此の極大なる勢力こそはよく中國を救ふことが出來るであらう。

本日は先づ民族主義に就いて語りたい。今次國民黨の改組に當つては、救國方法として宣傳に重きを置いた。國人に對する普遍的の宣傳に最も必要なるは主義の演明である。中國に於ては最近十數年來、多少にても思想を有するものならば、誰しも三民主義に就ては聽き慣らされて居るに違ひない。けれども之を徹底的に了解して居るものは恐らく極めて少ないであらう。依て本日は先づ民族主義に就いて詳細講義したいと思ふ。では民族主義とは如何なるものであるか。之を中國の歷史上社會の習慣等の諸情形に按じ、一言以て之を蔽へば、民族主義は即ち國族主義である。元來中國人の最も崇拜するところのものは家族主義と宗族主義である。從て中國に於てはただ家族主義、宗族主義あるのみにして國族主義がない。だから外國の傍觀者達は、中國人は一片の散沙（民族主義參照）であると言ふ。その理由とするところは何處にあるであらうか。即ち一般人民にだけ家族主義と宗族主義とのみあつて國族主義がないからである。中國人は家族及び宗族の團結力は非常に强大であつて、往々宗族を保護する目的の爲には一身一家を犧牲にする。かの廣東兩姓の爭鬪に於て、兩族間には幾多の生命財產の犧牲も顧みられず飽く迄鬪を休めやうと

せざるが如きはその一例であつて、之はすべて彼等の宗族觀念の深きに緣因する。そして此の主義が深く人人の心に喰入つて居るがため、犧牲をも敢て辭せないのであらう。然しながら其の國家に對するや、未だ曾て一度たりとも此の極大の精神を以て犧牲を敢てしたものはない。だから中國人の團結力は宗族に止まり、未だ國族に迄擴張せられて居ないと言ふのだ。

余は民族主義は即ち國族主義なりと說いた。之は中國にはよく當てはまる。けれども外國には當てはまらない。外國人は民族と國家とを區別して說いてゐる。英國では民族と言ふことを「ネーション」と言ふ。「ネーション」には二樣の解釋があり、一つは民族他は國家と譯する。斯樣に一字に二つの意味はあるが、彼等の解釋は非常に明瞭であつて決して混同する樣なことはない。又中國の文字の中にも一個の字で兩樣の解釋あるものが頗る多く、例へば社會と言ふ二字の如きも、二つの用法があつて一は一般人の群を指して言ひ、他は一種の組織ある團體を意味する。元來民族と國家とは相互的關係の甚だ多いもので、之を別々に考へることは出來ないが、其の中にも自ら一定の限界はある。國家とは如何なるものなりや、民族とは如何なるものなりや、我等は必ず之を區別して置かねばならぬ。余は民族は即ち國族なりと說いたが、それが何うして中國にのみ當てはまり、外國には當てはまらないと言ふのであらうか。中國は秦漢以後すべて一民族が一

國家を造成して來たが、外國では一民族で幾つもの國家を造成するものあり、一國家内に幾つもの民族を包含するものがあるからである。卽ち英國の如きは現在世界最强の國家であるが、其の國内の民族は白人を本位とし、之に銅色人、黑人等の諸民族が結合して始めて、大「ブリテン」帝國を形成して居るのであつて、從てこの場合英國にあつては民族卽ち國族なりとの一語は如何にも不適當である。又香港の如きは英國の領土ではあるが、其の中の民族には幾十萬人の中國の漢人があるのであるから、若しも之を香港の英國國族卽ち民族と言ふならば、甚だ可怪しなものではないか。更に又印度の如き現にやはり英國の領土であるが、英國國族と言へば、其の中には三億五千萬の印度人も當然含まるべきで、而して之を印度の英國國族卽ち民族と言へば、之れ亦頗る變なものではなからうか。誰しも知つて居る通り、英國の基本民族は「アングロ・サクソン」人で、此の「アングロ・サクソン」人は英國のみに存在する許りでなく米國にも亦多數存在して居る。斯した譯で外國では民族卽ち國族なりと言ふことは出來ないのである。中國でこそ民族卽ち國族で通用はするものの、元來民族と國家とにはもともと一定の限界があるものである。之を明瞭に區別せんが爲には、我等は如何なる方法に依るべきであらうか。それが爲には民族と國家とが根本上如何なる力に依て造成せられたものであるかを究むるのが、最も適當な方法であら

う。此の方法に隨つて簡單に區別すれば、民族は天然力に依り造成せられ、國家は武力を用ひて造成せられたものなりと云へやう。中國の政治歷史を以て之を證明すれば、中國人は王道は自然に順ふものなりと說く。これを換言すれば自然力卽ち王道であるが、此の王道を以て造成せられた團體が民族であり、次に武力は卽ち覇道であるが、此の覇道を以て造成せられた團體が國家である。かの香港が造成せられた原因は、決して幾十萬の香港人が英國人を歡迎して出來上つたものではなく、曾て英國と戰つて敗れた中國が香港の人民及び土地を擧げて英國に割讓し、英國人之に割據し、久しくして纔に現在の香港を造成したのである。又英國が今日の印度を造り上げたのも、其の經過情形を辿つて見れば、亦香港同樣で、之等は共に覇道に由つて出來上つたのである。現在英國の領土は全世界に擴張せられて居る。そして英國人の俗語に「英帝國に落日なし」と云ふ一句がある。換言すれば、日日晝夜太陽の照すところすべて英國の領土ありとでも言ふべきところであらう。例へて見れば、若し我等東半球上にある人が、日出と共に「スタート」するとき、太陽は先づ「ニュージランド」、「オーストラリア」、香港、新嘉坡を照し、次いで西の方「セイロン」、印度を斜照し再び西して「アデン」、「マルタ」更に西して本國を照し、そして再び廻轉して西半球に至り「カナダ」を照して香港、新嘉坡へと再び循環するであらう。これ一日二

十四時間の間太陽の照すところ、必ず英國領土ありと云はれる所以である。斯の如き英國の廣大なる領土は一つと雖も覇道を用ひずして造成せられなかつたものはなく、これは單に英國許りではない。古往今來如何なる國家でも亦、之を造成するが爲には覇道を用ひないものはなかつたのである。併しながら民族の造成に至つては、卽ち相同じからず、完全に自然に依り、毫も無理を加ふることは出來ないのである。香港幾十萬の中國人の如きは、自然裡に團結し一個の民族となつたもので、如何に英國が覇道を用ゆればとて改變することは不可能である。だから一つの團體にして王道に依り自然力に依つて結合して成りしものが民族であり覇道に依り人爲力に依つて結合せられて成りしものが國家であつて、これ卽ち國家と民族との區別である。

次に民族の起源に就いて語りたい。世界の人類はもと一種の動物であつて、ただ普通の飛禽走獸と異なる點は、人間が萬物の靈長たるところにある。人類の分別法としては、第一は人種別で白色、黑色、赤色、黃色、銅色の五種に分つ。更に之を種によつて細分すれば幾多の族があり、例へば「アジア」民族の如き、その著名なものに蒙古族、馬來族、日本族、滿族、漢族がある。此の種々なる民族を造成した原因は、概括的に言へば自然力である。自然力を分析すれば甚だ複雜であるが、その中最も大なる力と云へば血統であらう。中國人が黃色なる原因は、黃色の血統

に根源して成りしものなるに因る。祖先の血統は如何なるものでも永遠にその一族に遺傳する。これ血統の力が最も大なる所以である。次に大なる力は生活である。生活方法の同じからざる場合、その結成せる民族も亦相同じからず。蒙古人の如く水草を逐ふて居住し遊牧を以て生活をなすものは、水草のあるところ遊牧に便なるところならば、何處へなりとも居を移す。この種遷居の習慣は又一箇の民族を結成し得るものである。蒙古が忽然として强盛を來し得たのは、卽ちこれに基く。蒙古族はその最も强盛を極めし時代、元朝の兵を以て西の方中央亞細亞「あらびや」及び歐洲の一部分を征服し、東、中國を統一し日本をも征服せんとし殆ど歐亞を統一した。之をその他の最も强盛なりし民族に就いて見るに、漢族のその武力最も大なりし唐の時代に於てすら、纔に西、裏海に至りしに過ぎず、又羅馬民族の如きも、その最大の武力を傲りし時代でさへも、東部纔に黑海に達したに過ぎなかつた有樣で、未だ曾て蒙古族の如く一民族が武力を以て歐亞兩洲を征したものとてはなく、ただ元朝を樹てた蒙古民族のみが斯くも强盛を極めたのである。而して蒙古民族が斯くも强盛を極めた原因こそは、彼等人民の生活が遊牧にあり、日頃の習慣上如何なる遠路をも恐れざるの長所があつたからのことである。第三に大なる力は言語である。若しも外來の民族が我等の言語を會得するものと假定すれば、それ等の民族は容易に我等に感化せ

られ、久しい間には遂に同化されて一民族となつて了ふであらう。又之に反し、若しも我等が外國の言語を知るものと假定するならば、我等も亦容易に外國人に同化せられることとなるであらう。單に言語ばかりでもその通りであるから、更にその上言語と共に人民の血統迄同じきものとしたならば、同化の效力は更に一層容易なるものがあるであらう。これ言語も亦世界に於ける民族造成に大なる力ありと言ふ所以である。第四の力は宗教である。凡そ人類は相同じき神を奉拜し或は相同じき祖宗を信仰することに依つて、又結合して一箇の民族を成し得る。宗教は民族を造成する力の中に在つて、又甚だ雄大なるものである。かの「アラビア」猶太兩國の如き、國亡びて既に久しきにも拘らず、「アラビア」人と猶太人とは、今に至る迄依然存在して居るのであるが、彼等の如く國家亡びて民族のよく存在し得る所以は、實に彼等は各自分達の宗教を持つて居るからである。誰しも知つて居る通り、現在猶太人の各國に散在するもの極めて多く、世界に於て極めて有名な學者、例へば「マルクス」の如き「アインシュタイン」の如きは、何れも猶太人である。更に現今英米各國の資本勢力の如きも亦猶太人に操縱せらるるところである。獨太民族は、天質頗る聰明にして加ふるに宗教的信仰がある。故に流離して各國に遷徒すと雖、猶よくその民族を長久に維持することが出來たのである。「アラビア」人のよく存在し得る所以も、やは

り彼等に「モハメッド」なる宗教あるがために他ならない。その他佛教を信奉すること極めて深き民族、例へば印度の如きは、國家は滅びて英國の手に歸しては居るけれども、其の種族はやはり永遠に消滅せしむることが出來ないのである。第五の力は風俗習慣である。若しも人類中に一種特別の相同じき風俗習慣を有するものありと假定せば、久しい間には、又自ら結合して一箇の民族と成ることが出來るであらう。我等は幾多の相同じからざる人種が、そのよく結合して種々の相同じき民族となる所以の道理を研究して、自然之を血統、生活、言語、宗教及び風俗習慣の五種の力に歸した。この五種の力は、天然に進化して成るものであつて、武力征服に依つて得られるものではない。故にこの種の力と武力とを比較することに依つても亦民族と國家とを區別することが出來る。

我等古今の民族生存の道理に鑑みるに、中國を救ひ、中國民族をして永遠に存在せしめんがためには、必ず民族主義を提唱しなければならぬ。民族主義を提唱せんが爲には、必ず先づこの主義を完全に了解することが必要である。然る後初めてよく之を發揮し擴大して國家を救ふことが出來るであらう。中國民族としては數百萬の蒙古人百餘萬の滿洲人數百萬の西藏人百數十萬の回教の突厥人あるに過ぎず、之が總數一千萬に過ぎないから、大體に

於て、四億の中國人は完全に漢人にして、同一血統同一言語同一文字宗教及び同一の習慣を有する完全なる一個の民族なりと言ふことが出來ると思ふ。

我等の此の民族は、現在世界に於て如何なる地位にあるであらうか。之を世界各民族の人數より比較すれば、我等は人數に於て最も多く民族としても亦最大である。四千餘年の文明教化も亦まさに歐米に比して勝れりとも劣るところはない。ただ中國人には家族及び宗教の團體のみがあつて民族的精神がない。從て四億人が結合して一つの中國を形造つては居るものの、實際は一片の散沙であつて、今日世界に於て最も貧弱なる國家となり、國際的には最も低い地位にある。人は刀であり俎であり我は之に料理せらるべき魚であり肉である。我等の地位今日より危險なるはない。若し果して心を留めて民族主義を提唱し、四億人を結合して一個の堅固なる民族と爲すにあらざれば、中國は亡國滅種の憂があるであらう。我等はこの危亡を挽救するため、民族主義を提唱し、民族精神を以て國家を救はねばならぬ。

民族主義を提唱し中國の危亡を挽救せんがため、我等は先ず我民族の危險が奈邊にありやを知らねばならぬ。又その危險の情形をも知らねばならぬ。これが爲には中國人と列强人民とを比較するのが最もいい方法である。比較することに依つて、危險は更に明かになるであらう。歐洲大

戰前世界で列强と稱せられたものは、最大の英國、最强の獨國、墺國、露國、最富の米國、新興の日本及び伊太利の七八ヶ國であつたが、戰後獨墺露の三國は倒れ、現在のところ一等强國として殘るは英、米、佛、日及び伊の五國である。英、佛、露、米の各國は何れも民族を以て國を立てて居る。英國の發達に貢獻した、基本的民族と云へば「アングロ、サクソン」人、基本的土地は「イングランド」及び「ウエールス」であり、その人口僅に三千八百萬に過ぎず、之を純粹の英國民族と言ふことが出來る。この民族は現在世界に於ける最も强盛なる民族であつて、その造成するところの國家は世界最强盛の國家である。その百年前の人口は凡そ一千二百萬位であつたものが、現在では三千八百萬となり、百年間に三倍に增加した。

我等の東方に、東方に於ける英國とも言ふべき島國がある。この國家こそ日本である。日本も亦一民族を以て造成せられたもので、その民族を大和民族と呼ぶ。建國以來今日迄未だ曾て外國の併合を受けたことなく、元の强盛を以てしても彼等を征服することが出來なかつた。彼等現在の人口は朝鮮、臺灣を除いて五千六百萬である。その百年前に於ける人口の確數は知り難きも、之を近來の人口增加率に依り比較計算して見れば、三倍の增加に當る。故に百年前の日本の人口は約二千萬を上下して居たものと見て差支へない。この大和民族の精神は、今に至るも尙ほ喪失せ

ず、故に歐化の東漸に乘じ、歐風米雨の中に在つて、科學の新法を利用し國家を發展せしめ、維新後五十年、よく現在の如き亞細亞最强盛の國家を成し、歐米とその勢を競ひ、歐米人も敢て之を輕視せざるに至つた。

然るに我中國の人口は、如何なる一國に比しても大なるに拘らず、今日に至る迄外人に輕視せらるる原因は何處にあるであらうか。即ち一つは民族主義を有し、一つは民族主義なきに因る。維新前に於ける日本は國勢の衰微甚しく、その領土も四川一省の大さに過ぎず、その人口も四川一省の多きに及ばず、又弱小國の例に洩れず外國の壓迫的恥辱を受けて來たものである。然しながら、彼等には民族主義的精神があつて、大いに發奮し、五十年を出でずして遂に世界列强の班に列し衰微せる國家を變じて强盛なる國家たらしめた。我等中國の强盛を欲するものにとつて、日本は一つの模範であらねばならぬ。

亞細亞人を歐洲人に比べて見るに、從前世界で聰明にして才智あるものと言へば、白人に限らるるものの如く考へられ、萬事白人に壟斷せられて居たものである。從て我等亞細亞人は彼等白人の長所を會得することが出來ても、一時如何樣にも國家を富强にする方法がなかつたのである。だから國家を富强にしやうと云ふ意思は、單に中國人許りでなく、一般に亞細亞各民族から

失はれて居た。ところが近來に至り、日本が忽然興起し、世界一流の富强國となつた。日本がよく富强たり得たため、亞細亞諸國にも無窮の希望が生れた。思ふに日本從前の國勢は、現在の安南緬甸同樣であつたが、現在では現在の安南緬甸等迚も日本と比べものにならない。これ詮ずるところ日本がよく歐洲を學んだがために、維新後の短期間に於て、歐洲に追付くことが出來たのである。歐洲大戰休戰後、列强は「ベルサイユ」に於て世界の平和を議したものであるが、その際日本の國際的地位は五大强國の一に列し、列强は事の亞細亞に關する限り、すべて日本の主持するところに聽從したものであつた。惟ふに日本のこの事に就いて見るも、白人のすること位は日本人にも結構出來、世界の人種は顏色の相違こそあれ、その聰明才智に至つては何等區別し得るものでないと言ふことが分かる。かくて今日亞細亞は强盛なる日本を有するがために、世界の白色人種は、敢て日本人を輕視せざるのみならず亞細亞人をも輕視しない。故に日本が强盛となつてからは、大和民族一等民族の尊榮を享くることが出來たのみならず、その他一般の亞細亞人も亦その國際的地位を擡高することが出來たのである。曾ては歐洲人に出來ることも我等には出來ないと考へられて居たものであるが、現在では日本人が歐洲を學び得るとすれば、我等も亦日本を學び得、學んで日本の如きに至り得るとせば、又將來學んで歐洲の如きに至り得るものなる

ことを知ることが出來るのである。

「ロシア」は歐洲大戰中革命が起り、帝制を打破して、從來と全くその趣きを異にする社會主義的な一新國家を打建てた。彼等の民族を「スラブ」と云ふ。百年以前四千萬なりし人口は現在では一億六千萬となり、百年の間に四倍に增加し、國力も亦四倍に增大して、最近百年の間「ロシア」は實に世界最强の國家であつた。日本や中國が彼の侵入を恐れた許りでなく、歐洲の英國獨國も亦彼の侵入を恐れたものである。彼等は帝政時代、專ら侵異政策を以て領土の擴張に再念し、今や露國の疆土は、歐洲及亞細亞に一半宛を占め、領土は歐亞兩洲に跨つて居る。斯の如き彼等の大領土は、すべて之を歐亞の兩洲より侵略したものだ。かの日露戰役に當り、各國人は齊しく露國が中國の領土を侵略せんことを恐れたが、彼等が露國の中國侵略を恐れた理由は別にあつて、即ち中國が露國に侵占せられた曉、又再び世界各國の侵略を始め、諸國皆之に侵占せらるることを恐れたが故に他ならない。露國人はもと世界併呑の志を抱いて居た。それがため世界各國はそれぞれ何等かの對抗方法を講じて來たもので、日英同盟の如き、即ちこの併呑政策の對抗策として出來たものである。だが結局、日露戰爭に依り日本は露國を朝鮮南滿地方より驅逐して、遂に露國の世界侵略政策を覆し、東亞の領土を保持して世界に一大變化を與へた。降つて歐洲大戰後露

國人は自ら帝國主義を推翻し、帝國主義的國家を變じて新しき社會主義的國家たらしめ、世界に更に大なる變化を齎らしたのである。この種變化は成功後僅に六年に過ぎないが、彼等はこの六年間に內部の組織を改め、從前の武力的舊政策を棄てゝ平和新政策に改めた。この政策は、各國を侵略する野心なきのみか、進んで强きを抑へて弱きを扶け公道を主持するものであつて、玆に於て世界各國は又しても露國を恐るゝに至り、現在では各國の恐露心理は從前に比し更に激しいものがある。何故ならば、この平和新政策たるものは、露國自身の帝國主義を打破する許りでなく、同時に世界の帝國主義を打破せんとするものであり、世界の帝國主義の打破のみならず更に進んで、現在各國の政權が表面上政府を主とするに拘はらず事實資本家の手に依つて支持せられつゝあるの故を以て、世界の資本主義をも打破せんとするにあるからである。露國の新政策はかく資本主義を打破せんとするものなるが故に、世界の資本家の間に大恐慌を來し、世界が之がため一個の極めて大なる變動を生じ、この大變動に因り、その後の世界の大勢も隨つて改變せられた。

歐洲戰爭の歷史に就いて言へば、從前絕えず發生しつゝあつた國際戰爭の最近のものである歐洲戰爭は、獨墺土「ブ」の諸同盟國と英、佛、露、日、伊、米の諸協商國と相爭つたもので、四ケ年

に亙る大戰を經過し、筋疲れ力盡きて始めて停戰を見た次第であつた。この大戰後、世界の先知先覺者達は、將來歐洲はその焦點となることはなきも、更に別種の國際戰爭を引起すべきは免がれ難きところなりとなし、或るものは又一場の、例へば黃、白兩人種の戰の如き人種戰爭を豫想した。然しながら露國のこの新しき變動を發生した今日、余（孫文）が個人として既往の大勢を觀察し將來の潮流を豫測するに、國際間の大戰は所詮免るべからざるものではあるが、その戰爭は異なれる種族間に起らずして同種族の間に起り、白種と白種と相分れて戰ひ、黃種と黃種と相分れて戰ふに至るべく、それ等の戰爭は階級戰爭であり、被壓迫者と橫暴者との戰爭であり、公理と强權の戰爭であらねばならぬ。

露國革命後「スラブ」民族は如何なる思想を生み出したであらうか。彼等は强きを抑へ弱きを扶け富めるを壓し貧しきを濟はんことを主張したのである。これ專ら世界に公道を伸張して不公平を打たんとするに他ならない。この思想の歐洲に宣傳せらるゝや、各種弱小民族は擧つて之を歡迎した。そして現在の處、最も之を歡迎するものに土耳古がある。土耳古は、歐洲戰前最貧最弱の國家で國勢萎微して振はず、歐洲人は彼を呼んで近東の病夫となし、早晩滅亡すべきものと考へてゐた。歐洲大戰には獨國側に加入したが、協商國のために打破られ、各國が更に之を分割

せんとするに至つたので、土耳古の國勢岌々として危く殆ど自存することも覺束ないやうになつた。その後露國出でゝ不公平を打ち、彼を助けて希臘を敗り、一切の不平等條約を改修した。そして現在では、假令世界の一等國と言ふことは出來ないにしても、既に歐洲二三等國の班に列することが出來たのである。然らば之は如何なる力に依りしものであらうか。これ全く露國人の援助に依るものである。敍上を以て推論すれば、將來の趨勢は必ずや、何れの民族も如何なる國家も、壓迫を受けて居るもの又は屈辱を受けて居るものは、すべて必ず一致聯合して强權に抵抗せねばならなくなるであらう。然らば如何なる國家が被壓迫國家であらうか。歐洲戰前英佛兩國は獨逸の帝國主義を打破せんとし、そして露國も亦彼等の一方に加入した。その後露國は無數の生命財產を犧牲にしたが、遂に中途に師を回して革命を宣布した。之は抑も何が故であらうか。之は露國人の受くるところの壓迫が甚しかつた爲である。故に去つて革命を起し、彼等の社會主義を實行し强權に反抗したのである。當時歐洲列强は、擧つてこの主義に反對し、共同出兵をして彼を打たんとした。幸に「スラブ」民族の精神を有する露國は、終によく列强を打破するを得た。そして今に至る迄列强は露國に對し武力を以て反對し得ず、僅に彼の國家の不承認てふ消極的抵抗を以てするに止まつて居る（現在では英國は既に正式に露國を承認して居る）。何が故に歐洲各國は

露の新主義に反對するのか。それは歐洲の各國人は侵略を主張し、强權があつて公理がない。然るに露國の新主義は公理を以て强權を撲滅せんことを主張するからだ。この主張の爲に列强と相反目し、そして列强は今に至る迄、彼を消滅せしめんとの意志を捨てないのである。露國も革命前迄は矢張り强權あつて公理なきを主張する一個の甚だ頑固なる國家であつたものだ。ところが現在ではこの主張に反對する。各國は露國がこの主張に反對するが爲に一齊に出兵して露國を打つたのである。以上は世界現下の大勢であつて、この大勢に鑑み、余は今後の戰爭は强權と公理との戰爭なりと說かんとするものである。今日の獨國は歐洲に於ける被壓迫國家であり、又亞細亞に於ては、日本以外の凡ゆる弱小民族は、すべて强暴な壓制を被り種々の痛苦を受けて居る。同病相憐れむ彼等は將來必ずや聯合して强暴なる國家に抵抗せんとするであらう。多數の被壓迫的國家は必ずや彼等强暴なる國家と身命を賭して一戰せんとするであらう。之を全世界に推し廣めて考ふれば、將來公理を主張する黃人とは必ず聯合し、强權を主張する白人と强權を主張する黃人とも亦必ず聯合し、この二つの聯合のあるところ、一場の大戰は免るべくもないであらう。これ卽ち世界の將來に於ける戰爭の趨勢であらねばならぬ。

獨國は百年前人口二千四百萬を有し、歐洲大戰の爲め多大の減少を見たと言ふものゝ、現在ま

だ六千萬はあるであらう。して見ればこの百年間に二倍半を增加したことゝなる。その人民は「チユートン」民族と呼ばれ、英國人に似て至つて聰明である。故に彼等の國家は强盛を極めたものである。だが歐洲戰に武力に失敗して、後は自然公理を主張するの必要に迫られ、强權を主張することが出來なくなつた。

米國の人口は百年前九百萬に過ぎなかつたものが、現在では一億以上に達してその增加率極めて大なるものがあり、こゝ百年間に十倍に增加した。彼等の斯くの如き多數の增加人口は、大半歐洲より移民して來たもので、本國に生育せしものではない。これ等歐洲各國人民は、何れも最近數十年來歐洲の人口過剩に累せられ、本國に居ては生活の途なきために米國に渡來して生活を謀りしものに他ならない。米國の人口は、これ等の移民に依つて頗る急速に增加したのである。卽ち各國の人口增加は大部分生育に依るけれども、米國の場合は大部分移民の收容に依つたのである。故に米國人の種類なるものは、何れの國に比較してもより複雜で、各洲各國の移民が含まれて居る。けれども一度其の米國に至るや、そこに鎔化作用が起り所謂「合一爐而冶之」で、自ら一種の民族となつて了ふ。そしてこの民族は、もはや在來の英國人、佛國人、獨國人でもなければ又伊太利人でもなく、その他南歐人でもなくなつて、こゝに別個の一新民族となる。之を「アメ

リカ」民族と呼ぶことが出來る。斯樣に米國には獨立の民族がある。そしてこの民族あるがために
よく世界の獨立國家となつたのである。

佛國人は「ラテン」民族である。「ラテン」民族は歐洲諸國に散在し西班牙、葡萄牙、伊太利に
あり又「アメリカ」に大陸諸國に移住して墨西哥、「ペルー」、「チリ」、「コロンビア」、「アルゼンチン」
「ブラジル」その他中央「アメリカ」の諸小國に居住する。かく南「アメリカ」大陸諸國の民族が
すべて「ラテン」人であるところから、米國人は彼等を「ラテン、アメリカ」と呼んでゐる。佛
國の人口增加は頗る緩漫で、百年前に千三萬なりしものが、尙ほ三千九百萬で、百年間に僅かに
四分の一の增加に過ぎない。

今世界の人口增加率を比較するに、最近百年の裡、米は十倍、英國は三倍、日本も亦三倍、露
國が四倍、獨國が二倍半、佛國は四分の一の增加である。この百年間に於ける人口の增加顯著なり
し理由は、科學の進步、醫學の發達、衞生設備の完成とに依り、死亡減少し生育を增加したるに基
因する。然るに顧みて中國は如何。各國の人口增加と中國の人口のそれとを比較して來るとき、
余は眞に竦然たらざるを得ない。例へば米國人口の如きは百年前九百萬に過ぎざりしもの今や一
億となり、更に一百年の後にも、依然舊來の增加率に止まるとしても、尙十億の多きに至るべき

であらう。中國人は常に自ら誇らげに、我人口は多數にして容易に他に消滅せらるべきものでな
い、例へば、元朝は中國に主となつたが、彼等蒙古民族は中國人を消滅し能はざりしのみならず
却て中國を征服し二百六十餘年間これを統治してゐたが、やはり中國人を消滅することなく、却て漢
族と同化するところとなり、漢人に變成した。現に滿洲人がすべて漢姓を有するが如きも之が事實
を裏書するものに他ならないと說いて居る。斯うした理由から多くの學者達は、假令日本人又は
白人が中國人を征服するやうなことがあつても中國人は日本人又は白人種を吸收するだけの話で
あるから、安心して可なりと考へてゐる。さうした彼等は、百年後米國の人口が十億となり、我
人口に二倍半すると言ふ事實に就いては、一向氣が付かないで居る。實際、從前滿洲人が中國民
族を征服することが出來なかつたのは、彼等が僅か一百數十萬の人口を有せしに過ぎず、中國の
人口に比して、その數が餘りにも少なかつたがため中國人に吸收せられたのであるが、若しも假
りに米國人が來つて中國を征服するとしたならば、かの百年の後には米國人の十の中四の中國人
が參雜するに過ぎなくなり、恐らく中國人は米國人の同化するところとなつて了ふに違ひない。
諸君は中國の人口四億なりとは、何時頃の調査か御存知であるか。それは滿淸乾隆時代の調査に

かゝり、その後調査せられたものはない。乾隆より現在に至るまさに二百年に及んで居るが、依然四億、百年前に四億で現在も四億とすれば、この割でゆくとすれば、百年後も當然亦四億と推定されなければならない。佛國は人口過少のため出産育兒を奬勵し、一人にて三子を生むものは奬せられ、四五人のものは更に重く奬せられ、雙子を生めば特別の奬あり、男子にして三十歳に至るも娶らず、女子にして二十歳に至るも嫁せざるものに對しては罰ありとのことである。これ佛國の奬勵する出産育兒の方法である。かくも生育を奬勵する佛國ではあるが、その人口は決して減少する譯ではなく、單にその增加率が他國より大きくないと言ふだけで、然も且つ佛國は農業を以て國を立て、國富み民豊かにして、日々皆快樂に耽ると言つた結構な國柄である。百年前「マルサス」なる英國の學者は、世界の人口過剩と物産の供給に限りあることを憂え、人口の減少を主張し一種の學說を創立して謂ふ「人口は幾何級數的に增加し、物産は算術級數的に增加する」と。この學說は快樂を追究して止まない佛國人の痛く共鳴するところとなり、非常な歡迎を受けた。そして男子は一家を扶養するの義務を負はず、女子は子を生み子を育つる必要なしと主張し、彼等は人口減少の方法として、單に種々な自然的方法を用ふる許りでなく、又幾多の人爲的方法を用ふるに至つた。そして百年前何れの國に比しても多數であつた佛國の人口は、「マルサヌ」學

說を宣傳し大歡迎して一般に人口の減少を實行したゝめ、今日の如く人口過少の痛苦を受けねばならなくなつたのである。これすべて「マルサス」學說の中毒に因るものに他ならない。現今中國の新青年の中にも亦「マルサス」學說に染り人口の減少を主張するものあるは、佛國が既に減少の苦痛を知り、新政策を施行し、人口の增加、民族の保存を提唱し、佛國民族をして世界民族と共に永久に存在せしめんと努力しつゝあるを知らないからである。

我人口は今日果して何の位あるであらうか。人口の增加率は、假令英國日本には及ばないとしても、乾隆時代より算へ來れば、少くとも五億はある筈である。ところが曾て米國公使「ロックヒル」が中國各地に就き調査したるところに依れば、中國の人口は多くも三億に過ぎずと說かれて居る。では我等の人口は結局何れ程であるであらうか。乾隆のとき既に四億あつたのであるから米國公使の調査に據るとすれば、已に四分の一の減少である。そこで現在四億はあるとしても、之を類推すれば、百年後に於ても恐らく依然四億に止るであらう。

日本の人口は現在のところ六千萬であるが、百年後には二億四千萬となるべき筈である。現に彼等は既に人口過剩であつて本國だけでは、とても生活し切れないところから、彼等は各國に向つて訴へて言ふ。島國の人口過多にして海外に向つて發展せざるを得ずと。事實日本は東、米國

に於ては「カリフオルニヤ」州は門を閉して納れず、南、濠洲も、英國人は、濠洲は白色人の濠洲なりと說いて別色人種の侵入を許容しないと言ふ有樣で、日本は到るところ拒絕せられ、八方塞がりの態にある。だから彼等は又、各國に向つて事情を打明けその諒解を求めて言ふ、日本人は他に行くところがないから滿洲や朝鮮を經營せざるを得ないと。之に對し、各國人も亦明かに日本人の意思を諒とし、彼等の要求を容れて以爲らく、日本が中國に殖民したつて自分等本國には何等關係のないことだと。

一百年後全世界の人口は必ず幾倍にも增加するであらう。獨國佛國の如き今次の大戰に於て多大の死亡者を出したが、やはり必ずや戰前の狀態を恢復して出產育兒を奬勵し二三倍の增加を示すであらうと思はるゝ。百年後の問題はさて措き、單に現在の全世界の土地と人口とを比較して見ただけでも、既に人口過剩の患がある。だから今次の歐洲の大戰の如きも、或る人は之を「打太陽」の地位なりと說いてゐる。と言ふのは、歐洲列强の多くが半ば寒帶に近く、戰爭の原因は、互に赤道及溫帶地方の土地を爭つた點にあり、太陽の光を爭つたものと言ふべきであるからだ。中國は全世界中氣候最も溫和にして物產最も豊富な地方に位する。この中國を各國が一時に併合することの出來なかつた原因は、彼等の人口が中國のそれに比較して遙かに少なかつたが爲に他

ならない。けれども百年後に至つて、依然我等の人口が增加せず、彼等の人口のみが大なる增加を遂げたとしたならば、彼等の多數を以て少數を征服することゝなり、必らずや中國は彼等のため併合せらるゝに至るであらう。そのときに至らば、中國は啻に主權を失ふのみか、國も亡びるであらう。そして中國人も同時に彼等の民族に消化せられて、種族の滅亡を招來するであらう。從前蒙古滿洲が中國を征服したるが如きは、少數が多數を征服し多數の中國人を利用し彼等の奴隷たらしめんとしたに過ぎなかつたのであるが、若し將來果して列强が中國を征服せんとするやうなことがあれば、多數を以て少數を征服することゝなり、彼等は我等を奴隷とする必要さへもないのである。我等中國人は、そのときに至つては奴隷にさへもなり得ないであらう。

第二講　列强壓迫下に於ける中國

古より民族興亡の原因は、人口の增減に由るものが甚だ多い。これ天然の淘汰である。人類は天然の淘汰力に遇へば抵抗することが出來ない。故に古より幾多の民族あり、幾多の有名なる民族があつたけれども、現在の人類中には悉くその跡を絕つて居る。我中國民族も亦甚だ古い民族で、記錄の存する限りの歷史に就いて見るに、既に四千餘年を經て居る。故にこの點から推究す

れば、我民族は發生以來少くとも五六千年は經たものと必せられる。その間幾多の天然力の影響を受け來り、遺傳して今日に至つたが、毫も我等の消滅を來たさざるのみか、却て我等を繁盛せしめ四億人に生長せしめた。之を世界の民族と比較すれば、我等は依然最多にして最大なる民族である。これ我等民族の受くるところの天惠が他の民族に比較して獨り厚きに他ならず。故に天時人事共に幾變遷を經過せるにも拘はらず、有史以來四千年、たゞ文明の進歩を見て民族の衰微を見ず、代々相傳へて今日に至り、依然として世界最優秀の民族たるを失はないのである。故に一般の樂觀主義者は以爲らく、中國民族は之迄災害を經過すること幾許なるやを知らざるに、今に至る迄滅亡せず、從つて今後とても如何なる災害を經過するとも決して滅亡には至らざるべしと。この種論調は、この種希望は、余の見解に從へば間違ひである。何故ならば、單に天然の淘汰力のみより云へば、或は我民族は生存し得るであらう。けれども世界の進化力は、天然力許りではなく天然力と人爲力とが湊合して成るものであり、然もこの人爲の力量たるやよく天工を巧奪することの出來る位偉大なる力のあるもので、所謂人事天に勝つである。この人爲力の中最大のものが二つある。卽ち一つは政治力にして他は經濟力である。この二つの力の民族の興亡に及ぼす關係は、天然力に比し、遙に大なるものがある。今日我民族は、世界の潮流の中にあつ

て、この二つの力の壓迫を受くるのみならず、深くこの二つの力の禍害に中毒して居るのである。

中國は幾千年來政治力の壓迫を受け二度も完全に滅亡して居る。卽ち一回は元朝に依り、他は淸朝に依つてである。去り乍ら、この兩次の亡國はすべて少數民族に依つて亡ぼされたのであつて、多數民族により亡ぼされたものではない。從つてそれ等少數民族は總じて我等多數民族の同化するところとなつた。故に中國は政權上では二度迄も亡びては居るが、事實民族そのものは何等大損失を蒙むつて居なかつたのである。列强の民族の現狀に至つては從前と大いに相同じからざるものがある。一百年以來列國の人口增加は甚だ多かつた。既に比較して置いた通り、英露兩國の人口の如きは三四倍に增加し、米國は十倍に增加した。この過去一百年間の增加率に照して今後一百年の增加を推測すれば、我民族は一百年後に於ては、如何に天惠が深厚であらうとも、到底列强民族と世界に並存することは困難であらう。例へば百年前九百萬に過ぎざりし米國の人口が、現在では一億以上となり、更に百年後には十億以上となるべく、英獨露日の人口もすべて幾倍加せんとするのである。だから之に由つて推測すれば、百年後には我等の人口は少數と變じ列强の人口が多數となるであらう。そのときに至らば中國民族は、敢て政治力や經濟力の壓迫が

なくとも、單に天然の進化力のみを以て推論するも、中國の人口はもはや滅亡の他はない。況や百年後に於ては、我等は天然力の淘汰を受くるのみならず、同時に政治力經濟力の壓迫を受けねばならぬ。然もこの二つの力は、之を天然力に比較して、更に速かにして且つ激烈である。

天然力は極めて緩漫なものではあるが、やはり大民族を消滅せしめ得る。卽ち今から百年前の一先例を引用して之を證明して見やう。かの南北「アメリカ」大陸の紅蕃の如きはその一例であらう。「アメリカ」大陸は二三百年前に在つては完全に紅蕃の土地であつて、彼等の人口は非常に多く到る處に生存して居たものであつたが、白人の「アメリカ」大陸に移住するに伴ひ、その人口は漸次減少し始め、現在に至つて殆ど消滅した。之に由ても天然の淘汰力も亦大民族を消滅し得るものなることが判かるであらう。

政治力と經濟力とは、天然の淘汰力に比して、更に速かに更に容易に大民族をも消滅せしむる。今後中國民族が若し果して單に天然力の淘汰のみを受くるものとせば、猶一百年を支持し得るであらう。けれどもその上に政治力と經濟力との壓迫を同時に受けたならば、恐らく十年を保つことも難しからう。故に今後十年間は中國民族は生死關頭に在りとも云ふべく、何等かの適切なる方法を講ずることに依つて、此處十年以內に政治力經濟力の壓迫から解脫し得たならば、我民族

は今後とも列强民族と併存することが出來るであらうが、若し然らずして、我等に之等政治力經濟力の壓迫を解脫するの方法がなかつたならば、我民族は列强民族の爲に滅ぼされなければならないであらう。假令之が爲め直に全部滅亡することはないにしても、又天然力のために徐々に淘汰せらるゝに至るであらう。故に今後中國民族は、同時に天然力、政治力及び經濟力の三種の壓迫を受くることゝなる。卽ち中國民族生存の危險の大なるを見るを得べきである。

中國の歐米の政治力經濟力の壓迫を受くる、まさに百年に及ぶ。百年前に於ては滿人が我國家に據り尙强盛を極めて居つた。當時英國は印度を滅したが、敢て來つて中國を滅ぼさんとせず、却て中國の印度に干涉するを恐れて居たものである。けれどもこの百年以來は何うであらうか、中國は幾多の領土を失つたのである。之を最近より過去に遡つて見るに、最近失つたものに威海衞、旅順、大連、青島、九龍及廣州灣がある。歐洲戰後列强は最近の領土を還附せんとするに至り、青島は先づ還附せられ、威海衞も亦近く還附せられんとして居る。併し乍ら、之等は中國の一小地方に過ぎない。從前列國は、中國は永遠に振ふ能はず、自らの力を以てしては再び自己を管理することは出來ないものと考へて居たので、先づ中國の沿海地方の大連、威海衞、九龍等の如きを占領して一個の根據地とし、以て中國を爪分せんとしたのである。その後中國に革命起り、

列強は中國の尙爲すべきあるを知つて、遂に中國分割を斷念した。列強が中國分割を企圖しつゝあつた頃、一般の中國の反革命の人々は革命が却て分割を招來すべきを說き、その後革命の結果列強の分割を招來せざるのみか、却つて列強の中國分割の野心を打消すことにならうなどとは考へ及ばなかつたものである。之より少し以前に失つた土地としては朝鮮、臺灣、澎湖島がある。これ等の地方は日淸戰爭の結果日本に割讓したもので、これがため列國の中國分割論を引起した。更にその少し前に緬甸及安南を失つて居る。安南を失つた頃、中國は未だ多少の抵抗力を有し、鎭南關の一戰には戰捷を得たものであつたが、その後佛國に恐嚇せられて、之と講和し、喜んで安南の地を割讓した。けれども實際に於ては、講和の數日前中國の軍隊は、立派に鎭南關に於て大捷し、佛國の全軍殆ど覆滅と言ふ狀態であつたのだ。斯樣に戰爭に勝ち乍らも後になつて中國から和を求めたものだから、佛國人も頗る奇怪に感じたものらしい。で嘗て一佛國人が中國人に對して斯う云つたことがある。中國人のやるところは全く不思議で堪らない、各國の慣例では戰勝國が必ず戰勝の尊榮を表示して戰敗國に向つて土地の分割及賠償金を要することになつて居る、然るに中國は戰勝の日却て地を割いて和を求め安南を佛國に送り、又種々なる苛虐な條件を定めた、これ眞に歷史上戰勝國から和を求めた先例であると。中國が斯樣な先例を開いた原因は、滿

淸政府の甚しく無智なりしに因る。安南緬甸はもともと皆中國の領土であつたが、安南を割讓して後、中國の足許をみすかした英國は緬甸を占據したけれども、中國は一向これを責めやうともしなかつたものである。又少しく遡つて失はれた土地に就いて言へば、黑龍江、烏蘇里の地がありこれを問はんとはしなかつ更にその以前には、先頃迄露國極東政府の所在地であつた、伊犂流域、霍罕（Khokand）と黑龍江以北の諸地方とがある。之等も亦中國は手を拱いて外人に送り敢てこれを問はんとはしなかつたものだ。この外琉球、暹羅、「ボルネオ」、「スマトラ」、「ジャワ」、「セイロン」、「ネパール」、「ブータン」等の諸小國も、曾ては皆中國に朝貢して居たものである。斯樣な次第で、中國の最强盛時代には、その領土は頗る廣大で、北は黑龍江以北に、南は「ヒマラヤ」山以南に至り、東は東海以東、西は葱嶺以西に至り、すべてこれ中國の領土であつた。「ネパール」の如きは民國元年に至るも、尙四川省に進貢して居たが、元年以後西藏の道路が不通となつたため、遂に再び來なくなつた。斯くの如く中國の最强盛時代には政治力亦四隣に威を振ひ、亞細亞大陸の西南各國は一として藩と稱し朝貢するを榮となさざるものなき有樣であつた。その頃歐洲の帝國主義は未だ亞細亞に侵入して居らず、當時の亞細亞に於ては帝國主義とも云ふべきものは中國の他になく、故に諸弱小國は何れも中國を恐れ、中國の政治力を以て壓迫せらるることを恐れて居たもので、そ

の餘勢の存するところ、今尙「アジア」各弱小民族は中國に對し餘り安心して居らないらしい。現に蒙古の如きは今回我國民黨が廣州に大會を開くや代表を派遣したが、これは我等南方政府の對外主張が依然舊來の帝國主義を踏襲するものなりや否やを見んとするにあつたらしい。けれども彼等代表は到着後案に相違して、我等大會所定の政綱が弱小民族の扶持にあり、毫も帝國主義的意思なきを見たので大いに安心し、極力贊成の意を表し、互に聯絡して一東方の大國を建設せんことを主張したことである。斯の如く我等の主張に贊成するものは、單に蒙古のみではない。その他弱小民族は悉く同樣である。それは兎に角として、歐洲列强は、その帝國主義と經濟力を以て中國を壓迫し、中國の領土は逐次漸く縮少し本部十八省內さへも幾多の地を失つたと言ふのが今日の狀態である。

中國革命後、列强は政治力を以ては中國を分割することの極めて容易ならざるを覺つた。從前滿淸は中國を征服したけれども、我等中國人は革命を知つて居た。だから若し果して列强が依然としてその政治力に依つて中國を征服せむとしたならば、我等中國が將來必ずこれに反抗するに至るべく、斯くては列强にとつては頗る不利であると言ふところの考へが變つて行つた。從つて彼等は現在では幾分その政治力を以て我等を征服するの手を緩めて、改めて經濟力を以て我等を

壓迫せんとし始めた。そして彼等は政治力さへ用ひずして中國を分割すれば各國間の衝突を免れ得るであらうと考へたものである。けれども彼等は中國に於ける衝突は或は免れ得るとするも、歐洲に於ける衝突は遂に免るべきもないであらう。何故なれば、「バルカン」問題は歐洲大戰を生んだではないか。そして彼等はこの戰爭に於て自ら巨多の損失を受け、又幾多の例へば獨墺の如き强國は皆倒壞したにも拘らず、彼等の帝國主義は今尙依然として改革せられて居ない。英、佛、伊の如き依然舊帝國主義を以て繼續進行しつつあり。米國すらも亦「モンロー」主義を棄てて列强に參加し一致的行動を執るに至つたではないか。歐洲大戰經過後彼等の中には一時歐羅巴に於てこそ帝國主義的行動を中止したものもあるが、中國に對しては、數日前各國が二十餘隻の軍艦を廣州に派遣して示威を試みたやうに、相變らず帝國主義の力を以てその經濟力を發展せしめんとしつつある。經濟力の壓迫は政治力の壓迫よりも一層その力は猛烈である。政治力の壓迫は看破され易い。例へば、恰度今次列强が二十數隻の兵船を以て示威した際の如きは、廣州の人民は立どころに痛痒を感じ民衆の公憤を生み出し、惹いては全國人民の公憤を起すことも出來た。これ政治力の壓迫は容易にその痛痒を感じ得ると言ふ譯である。けれどもそれが經濟力の壓迫となると仲々普通のものには容易に感ぜられない。宛も中國が、既に幾十年來列强の經濟力の壓迫を受け

つゝあるにも拘はらず、一般にさして痛痒を覺えず、結局中國各地は擧げて列强の完全なる殖民地と化して了つて居るにも抱はらず、全國人は今尙列强の半殖民地となつたことを知つて居る許りであるやうに。この半殖民地の名詞は自慰的のもので、その實中國は列强の經濟力の壓迫を受けて、啻に半殖民地ならざるのみか、本當の殖民地に比し、更に不利なる立場に置かれてある。例へば、、、、、の殖民地、安南は佛國の殖民地であつて、、、、、、、、、となり、安南人は佛國人の奴隷であるが、之に對し我等は、動もすれば亡國奴の三字を以て、、、及び安南人を譏つてゐるが、それは我等が單に彼等の地位のみを知つて、實際に於て我等自身の地位が、、、安南人にも劣つてゐることを知らないからのことである。今概括的に中國は半殖民地なりと說いた。然らば中國は果して如何なる國の殖民地であるか。これは旣に條約を締結せる各國の殖民地であるのだ。凡そ中國と條約ある國家は皆中國の主人である。從て中國は、一國の殖民地でなくして各國の殖民地であり、一國の奴隷ではなくして各國の奴隷なのである。單に一國限りの奴隷と各國共通の奴隷とを比較すれば何れがいいであらうか。一國限りの奴隷であれば、水旱等の天災の際には、主人格たる國家は早速救濟金を支出して之を救助する。そして彼等は金を送つて救濟することこそは、主人たるべきものの義務にして分に應じて當然なすべきものと考へて居り、又奴隷

となつた人民も主人は當然救濟すべきものと考へてゐる。然し乍ら、列國共同の殖民地たる中國が前年北支一帶が天災を受けたとき、各國は義損金を送つて之を救濟することをその當然の義務とは思はなかつた。ただ中國內地に居住する各國人が義損金を募つて災民を救濟せんことを主張したに止まる。そして中國人に於ても之を看て各國の大なる慈善であつて彼等の義務ではない、主人格たる國家が奴隷たる人民に對するとは非常な相異であると說いた。斯樣な譯で、其實中國は安南などよりも不利な地位に置かれてゐる。故に一國の奴隷たるものは、各國共通の奴隷たるものよりも、その地位遙かに高くその利益亦遙かに多しと言はなければならぬ。從て中國を半殖民地と言ふのは適當ではない。余は之を名付けて「次殖民地」と呼ぶのが至當だらうと思ふ。この次と言ふ字は化學の名詞から得たもので、例へば次亞燐は藥品中燐に屬するものであるが、燐よりその質一等低きものを亞燐と名付け、それよりも更に一等低いものを次亞燐と稱する如く、又各部官制に於て、總長の一級下のものを次長と呼ぶのと同樣である。中國人は從來唯その半殖民地たるを知つて非常な恥辱と心得て居たものであるが、その實際的地位は、安南の如き眞の殖民地よりも一段低いのである。故に我等は之を半殖民地と言ふことは出來ない。次殖民地と呼ばなければならぬ。

此度廣東と外國とは關餘を爭つてゐるが、この關稅餘款なるものはもともと我等のものなるに何故爭ふのであらうか。中國の海關が各國に橫領されてゐるからである。從前我等は海關のあることなどは知らず、關を閉じて自ら守つて來たものであつた。その後、英國が來つて關を叩いて通商を求めた。當時中國は關を閉して之を拒絕したものであるが、英國はその帝國主義と經濟力とを以て中國の關を打開し、中國の門戶を無理矢理に開放させたのである。當時英國の軍隊は旣に廣州を占領し、後廣州の足場に適せざるを見て、之を棄てて香港に去り同時に又賠償金を要求したものである。そのとき中國には賠償金とする程多額な現金がなかつたので、海關を抵當とし英國をして收稅を取扱はしめた。當時滿淸政府の計算では、償金の金額支拂のためには長年月を要する見込みであつた處、豈料らんや、英國人が海關をその手に收め自ら收稅を開始するや、數年ならずして、要求額の賠償金は「キレイ」に手に入れることが出來たのであつた。元來海關は淸朝の皇帝が、淸朝官吏の腐敗甚しく從前關稅の經理徵收に中飽の大惡癖のあることを知つてゐたがため、全國海關を擧げて英國の管理に歸せしめ稅務司亦英國人を派して之に當てることとしたものである。その後各國も皆それぞれ商務關係を有するに至つたので、英國人との間に海關管理權を爭ふに至り、英國之に讓步して各國商務の大小に比例して各國人を用ふることとなり、斯く

て今日に至る迄全國海關はすべて外人の手にあるやうな狀勢を誘致した。中國は外國と條約を締結する每に損失を重ね、條約中の權利は總じて不平等である。從て海關の稅則の如きも悉く外國の定むるところであつて、中國の自由に更改することが出來ず、中國の關稅は中國人自ら收め自ら用ふることも出來ないのである。これ我等が爭はなければならない所以である。

今各國の外來經濟力の壓迫に對し、我等は如何に之に對峙すべきであらうか。平時各國に於ては外國經濟力の侵入に對しては、恰も海口に外來軍隊の侵入を防止するため砲臺を築くと同樣、彼等は海關を以て武器となし、本國の經濟的發展を保護して居る。故に保護稅法なるものは、卽ち關稅を以て外貨を抵制するものであつて、本國の工業は之に依り初めて發達し得るものである。米國の如きも紅蕃を滅して後、歐洲諸國と通商してゐたが、當時米國は農業國で歐洲諸國は工業國であつたがため、農業國を以て工業國と通商すれば、工業國の勝利となるは必定、そこで米國では保護稅法を創設して本國の商工業を保護したのである。保護稅法とは他國の輸入貨物に對し特別重稅を課するものであつて、例へば輸入貨物一百元のものに對し海關稅は各國の通例で五六十元のものとすれば、それ以上の一百元乃至八十元の高稅を課するにある。斯樣な重稅を課する結果は他國の貨物の價格を騰貴せしむることを得、本國にては到底販賣することが出來なくなり、一方

本國の貨物は無税なるため價格低廉となり、從て賣行を良好ならしむることが出來るのである。然らば我中國の現狀は如何に。中國は外國と通商開始前に於ては、人民の所用貨物は一切自ら手工を以て製造してゐたもので、古人の所謂男耕女織とて農業と紡織工業とは中國固有のものであつた。その後外國貨物の輸入せらるるに及び、海關税の輕い結果外來の洋布の價格低廉にして本地產の土布の價格高きため、一般人民は好んで洋布を買ひ土布を用ひず、結局土布工業は洋布のために壓倒せられて了つた。本國の手工工業も亦之に隨つて失敗し、人民は働くべくも職業なく多數の游民と變じた。之れ外國經濟力壓迫の情形である。今中國には依然手工織布はあるが、原料にはやはり洋紗を用ひてゐる。近來追々本國の棉花を用ひ外國製の機械で糸を紡ぎ布を織るやうになつた。即ち上海の數ある大紡績工場大紡織工場の如き之である。本來なれば、これ等紡績紡織工場は漸次外國品を抵制し得べき筈であるが、何分海關が未だ外國人の手中にあり、我等の土布は重税を課せられ、然も單に海關が重税を課する許りか、內地各處でも亦釐金を課せられて居り、中國は獨り保護税法なきのみか、事實に於て却つて土貨に重税を課することに依つて洋貨を保護するの結果となつて居るのである。歐洲戰爭當時、各國はその製品を中國に輸入することが出來なかつたため、一時上海の紡績紡織工場は異常な發達を示し、所得利益も亦極めて多額に上り、

利益分配に與つた資本家が非常に多かつたが、歐洲戰後、再び各國の貨物が中國に輸入せられ中國品を壓倒したため、曾ては非常な利益を上げて居た上海の各紡績紡織工場は、何れも損失續きの憂目を見るに至つた。斯くの如く土貨が洋貨に打敗られても中國の税關は特に自らを保護しない許りでなく、恰も自ら掘つた戰壕を敵に與へて自らを打たしむると同樣、却て外人を保護しつつあるのである。故に政治力の壓迫は有形であるから如何に愚蠢なるものでも容易に看破し得、應急の對策を講ずることも出來るのであるが、經濟力の壓迫に至つては、無形にして一般に之を發見することは仲々容易なことではなく、却て自分の力で自分を壓迫する結果となる。斯樣な有樣であるから、中國の通商開始以來の輸出入貨物を比較するに、實に江河日に下るの勢にあり、十年前の調査では、中國の輸出入貨物の差は二億元に過ぎざりしものが、最近の檢査にかかる海關報告表に據れば、一九二一年度輸入貨物は輸出貨物に超過すること五億元、十年前に比較して既に二倍半の增加を示し、この分にて行けば十年後にも亦二倍半を增加することとなるべく、その輸入超過はまさに十二萬五千萬元に達すべきであらう。換言すれば即ち十年後には中國は、單に貿易關係のみに於て每年外國に對し十二億五千萬元づつ進貢することとなる譯である。諸君何んと大きな損失ではあるまいか。

經濟力の壓迫には、海關の外にまだ外國銀行と云ふものがある。現在中國人は本國人の銀行を信用せず、外國銀行を馬鹿に信用したがる心理がある。恰度この頃我廣東に於て中國銀行は毫も信用なく、外國銀行が非常に信用があるのと同樣な譯だ。從前我廣東省立銀行は紙幣を發行し相當流通してゐたが、この頃では「サッパリ」通用せず、我等は現に現銀のみを用ひてゐると言つた有樣である。從前中國紙幣の信用は外國紙幣に及ばなかつたものであるが、最近では中國の現銀すらも外國紙幣に及ばないこととなつた。現に廣東に流通する外國紙幣の總數は幾千萬に達すべく、一般人民は一途に外國銀行紙幣の收藏を願ひ、中國の現銀の收藏を望まず、上海、天津、漢口の各貿易港に於ても、おしなべて皆同樣である。この原因を推究すれば、外國の經濟的壓迫に中毒し居るがために他ならない。我等は日頃から、外國人だと言へば、皆金持だと思つてゐるがそれは實際のところ、彼等が紙を持つて來て我等の貨物と交換して行くことを知らないからだ。元來彼等は大して金を持つて居る譯ではなく、多くは我等が彼等に貢いでやつてゐるのと同じやうなものだ。外國人が現在使用してゐる金は、印刷せられた幾千萬枚の紙に過ぎず、我等が彼等を信用するため彼等が幾千萬の金を持つことになるのである。あの外國銀行の紙幣一元の印刷費と言へば、ただの幾文に過ぎないであらうに、印刷されて出來上つた紙の價値は一元と稱し

十元と稱し又百元とも稱するのである。斯樣に外國人は、最少の價値を以て幾千萬元の紙を印刷し、その幾千萬元の紙を用ひて我等の幾千萬元の貨物と交換に來るのである。諸君試みに思へ、この損失は何んと大きいものではないか。然らば彼等のみ斯くも多くの紙を印刷し得るに拘はらず、我等には之が出來ぬとは、又如何うした譯であらうか。これ實に普通人がすべて外國の經濟的壓迫に中毒して、ただ外國を信用して自己を信用せず、我等の印刷した紙を通用させることが出來ないからである。

外國紙幣の外に尙爲替の取組がある。我等中國人は各貿易港に在て爲替を取組むにも亦外國銀行を信用し、中國の金を悉く外國銀行に持つて行つて爲替の取組をなし、外國銀行は中國人に代つて爲替を取組む。この外國銀行の爲替取組たるや、その取組に當つて先づ千分の五の爲替手數料を取り、外に無理矢理に兩地の錢價の莢を取る。又その支拂に當つては、その銀元と銀兩との割引で儲ける。かくの如き錢價の莢及元と兩との割引による損失は、送金及支拂の兩方を合算すれば、必ず百分の二三以上に上るであらう。ここに例へば、廣東の外國銀行から一萬元を上海に爲替で送金するとすれば、外國銀行は、先ず五十元の爲替手數料の外毫銀を上海の規元銀の錢價に計算する。そして彼等は必ず廣東の毫銀の價格を低く計算し上海の規元銀の價格を高く見積り

彼等の自由計算に依つて最少必ず一二百元は儲ける、而して上海に至つて金を支拂ふとき規元銀は渡さないで大洋を渡す、彼等は規元銀を以て大洋を割引し必ず銀兩の市價を無理に低からしめ大洋の市價を釣上げて少くとも亦一二百元を儲けるであらう。かくて上海廣州の兩地間に一萬元を爲替に取組むものとすれば、毎次少くも二三百元の損失となる。從つて一萬元の金も、上海廣州兩地間を往復して爲替を取組む場合は、最大三十回位で完全に烏有に化して終ふであらう。人民のかくも大なる損失を受くる原因はと言へば、やはり外國の經濟的壓迫に中毒した結果に外ならぬ。

外國銀行の中國に於ける勢力は、紙幣の發行爲替の取組の外、尙預金に在る。中國人は金さへあれば兎角銀行へ預けたがるが、その際彼等は中國の銀行の資本の大小利息の多少などを問はずして、一途に中國人經營の銀行と言へば、不完全なるを恐れて敢て預金しやうとしない。之に反し、外國銀行に對しては、その信用の有無利息の多寡を問題とせず、唯外國人が經營し、外國の看板を揭げて居さへすれば、定心丸を喫したるが如く安心し切つて了ふ。そして金さへあれば之を持つて行き、利息は極めて少くとも非常に滿足して居る。ここに最も奇怪なるは、辛亥の起義以後滿淸の皇室や一般滿淸の官僚達は、革命黨が彼等の財產を沒收せんことを恐れ、凡ゆる金銀

財寶を學げて各處の外國銀行へ無利息で預け、外國人がそれを受取つて預かつて置いて呉れさへすれば心から滿足して居たもので、甚しきに至つては、淸兵が革命軍と武昌に戰つて敗れたあの數日と言ふものは、北京東交民巷の外國銀行に滿人の預けた金銀財寶はそれこそ夥しい額に上り、その數も分らない程で、遂には北京の凡ゆる外國銀行は何れも滿錢の患あり、再び預け入るるの餘地ないと云つた狀態に至り、ここに於てその後の預金には、外國銀行は預金に對して利息を支拂はざるのみか、却て預金者から保管料を取ることとなつたが、何分預金者は外國銀行が預かつて呉れればいゝと云つた有樣であつたので、この保管料の如きも外國銀行の言ひなり法題であつたとのことだ。當時の調査に據れば、外國銀行が中國人の預金を受け入れた額は總計十億乃至二十億に達したとのことである。その後中國人は多少これを引出したであらうけれども、この十數年來馮國璋、王占元、李純、曹錕の如き一般軍閥官僚が到る處でかき集め橫領して蓄財したもの各人幾千萬元に及び、彼等はその莫大な橫領した財產を子子孫孫萬世の用に供せんが爲め、やはり之を外國銀行に預け入れて居るから、今でも外國銀行の中國人の預金受入總額は、辛亥の年と比べて大した增減はない筈である。外國銀行の有するこの十億乃至二十億の預金は、年年預金者に與ふる利息は極めて少なく最高四五厘に過ぎず、而も之を外國銀行は、中國の小商人に轉貸し

て年年最低七八厘甚しきは一分以上の利息を借款人より收めてゐるのである。斯樣に外國銀行は、たゞ經營の勞に任ずるのみにて、專ら中國人の資本金を用ひて、中國人から年年數千萬元の利息を儲けて居る。これ中國人が外國銀行に預金するがために受くる無形の損失である。かく一般のものの外國銀行に預金する心理は、中國銀行の不安全にして、外國銀行の頗る安全なるを思ふからのことであつて、彼等はその休業したりつぶれたりすることに對しては頓と無頓着だ。ところが事實は何うであるか試みに問ひたい。現に中法銀行は營業を停止し中國人の預金は拂戻しせられないのであるが、中法銀行は外國銀行ではなかつたか。これでも外國銀行の預金は安全であると言へるか何うか。外國銀行にして既に不安全なりとせば、何故に我中國人は、尙も甘んじて中國の金を外國銀行に預金するを願ひ、年年かくも莫大なる利息を損失しつつあるのであるか。この原因を推研するに、やはり外國の經濟的壓迫の中毒による。實に外國銀行の一つのみにても中國に在て獲得する利益は、紙幣爲替取組及び預金の三種に依り、まさに一億元前後にも上るであらう。

外國銀行の外に尙ほ運賃がある。中國の貨物を外國に運送するは固より外國船に依る。又漢口、長沙、廣東の各內地に運送するにも外國船に依る場合が多い。日本の航業は近來非常に發達したが、最初の頃は一日本郵船會社があつた許りだ。その後段々と東洋汽船會社、大阪商船會社、日

清汽船會社が出來、中國內地を航行して全世界に航行するやうになつた。日本の航業が斯の如く發達した所以は、彼等の政府が補助金を支出し、又政治力を以て特別に保護したがために他ならない。これを中國に就いて見れば、國家が商船に補助することが何れ丈けの利益があるであらうか。恐らく何等利益はないであらう。日本は各國の經濟勢力と競爭せんとして、水上の交通方面にあつても、亦各國と條約を締結し、運賃に就いても之を協定し每噸の價格を定めてゐる。例へば歐洲より亞細亞に貨物を運送する場合、先づ上海に至り更に長崎、橫濱に至ることになつてゐるが、歐洲、上海間は、歐洲、長崎橫濱間の路程に比較すれば、大分近いのである。けれども歐洲長崎橫濱間の每噸運賃は、各汽船會社で協定せられ非常に低廉であるが、歐洲、上海間のそれは、中國の航業が未だ彼等と對抗する迄に至つて居ないために、各汽船會社の規定では非常に高い。從つて歐洲から長崎、橫濱迄の運賃は、歐洲上海間のそれよりも、每噸幾らか安いことになつてゐる。斯うした譯で、歐洲の貨物が日本の市場で販賣せらるる價格は、上海に比べてやはり低廉である。之と反對に、中國の貨物を上海から歐洲に運ぶ場合も亦、長崎、橫濱よりの運賃に比べて幾何か高くなる。だから若し中國から一億元に相當する貨物を歐洲に運送するときは、中國は運賃のため一千萬元だけ餘計に要する譯である。斯樣は計算すれば、一億元で一千萬元の損失とな

り、中國の輸出入貨物は毎年十億元以上に達するから、この十億元中の損失も亦一億を下らないであらう。

此の外更に租界及割讓地に於ける賦課地租地價の三項がある。この數も亦實に少くなくない。例へば香港、臺灣、上海、大連、漢口の如き幾多の租界及割讓地内の中國人が、毎年外國人に納めてゐる賦税は少くも二億元以上に上るであらう。例へば臺灣の如きは、從前日本に納めて居た税は毎年二千萬に及び、現在では一億に增加して居り、香港の從前英國人に納めた税は、毎年數百萬に達し、現在では三千萬に增加してゐる。そして今後もこの割合で增加するであらう。

その中地租の一項は、中國人の收むるものあり外國人の收むるものもあつて各々幾何を得て居るか、未だ正確な調査がないから知ることが出來ないが、總じて外國人の收むるところの多きは問ふを待たないところであらう。この地租の數は之を地税に比ぶるときは十倍に達してゐる。地價も亦年々增加の趨勢にある。そして外國人は既に經濟上の權を握つてゐることとて、自然その財力も豐富となり商賣も圓滑に行くやうになり、租界の土地を廉く買つては之を高く賣る。故にこの賦税地租地價の三項だけでも、中國人の受くるところの損失は年々五億元を下らないであらう。

又中國の内地に於て、外人の團體及個人の營業が、その條約上の特權を振廻し、我等の利權を侵奪するものに至つては、更に計算し難いものがある。單に南滿鐵道の一會社のみに就いて言ふも、年々の純利は五千餘萬に達し、その他各國人の種々なる營業利益を併せ推算すれば、その數將に一億以上にも上るであらう。

更に一損失がある。卽ち投機事業である。租界の外人は常に中國人の貪婪なる弱點を利用し、日日小投機を行ひ、數年に一度の大投機を行つて中國人の賭博心を激發し熱狂せしむる。「ゴム」の投機「マルク」の投機の如き卽ち之れで、その結果損をするのは何時も中國人で、その額は最少數千萬元に達する。而して日々の小投機事業は少を積んで多きを成し。その額の幾何なるかを知らない。斯樣な損失も亦數千萬元以上に上るであらう。戰敗の賠償金に至つては、日淸戰爭の結果日本に送つた賠償金二億五千萬兩、庚子義和團事變の賠償金は九億兩の巨額に達するが、之は政治上武力壓迫の範圍に屬し經濟壓迫に依るものと同日に論ずることは出來ず、而も之は一時的のもので永久的のものではないから尙小事に屬する。その他藩屬の損失出稼移民の損失に至つてはその幾許なるやを知らないのである。

見來れば、これ等經濟的壓迫は眞に激しいものである。

總てこれを合算すれば、その一、洋貨の侵入に依つて年々奪はるる利權五億元、その二、外國銀行紙幣の我が市場侵入爲替取組に依る割引及び預金の轉借等に依り奪はるる利權一億元見當、その三、輸出入貨物の運賃の割高に依り奪はるゝ我利權約數千萬乃至一億元、その四、租界及割讓地の賦稅地租地價の三項目に依り奪はるる利權總計四五億元、その五、特權營業に依るもの一億元、その六、投機事業及びその他により剝奪せらるるもの數千萬元、以上六項の經濟壓迫に依つて受くる我等の損失總計は十二億元を下らない。この年々十二億の大損失にして救ふべき法なしとせば、今後は年々增加する許りで、これが自然的減小は斷じて期待し得られないのである。故に中國は今日既に民窮財盡の地位にあり、若し速に之を救ふに非らずんば、必ずや經濟的壓迫を受けて國家種族共に滅亡の外なきに至るであらう。

中國の强盛なりし時代に於ては、列邦より年々進貢し歲々來朝したものである。そして每年の貢は値大約百數十萬元に過ぎなかつたが、我等はそれを非常な光榮としたものであつた。宋朝に至り中國は衰へ、却て金人に向つて進貢せねばならなくなつた。そしてその金人に納めた貢物も亦每年大約百數十萬元に過ぎなかつたが、我等はこれを以て非常な恥辱と考へてゐたものである。ところが現に我等は、外國に對して每年十二億元の貢物を送りつつある。一年十二億とすれ

ば、十年に百二十億である。この種經濟力の壓迫、かかる大なる進貢は實に我等の夢想だにし得ざるところであつて、之を看破するのは仲々容易なことではない。從て一般人は未だに之を大恥辱と考へないのである。若しも我等がかくも莫大なる貢物を送らなくてもよく、每年十二億の我等の自由に處分なし得る大金があつたと假定したならば、我等には爲すべき事業が何れ程あることか。そして我等の社會は如何に進步することか。この經濟力の壓迫がある許りに年々かくも大なる損失を受けつつあり、故に中國の社會事業は發達する能はず、普通人民の產業も亦興らないのである。實にこの種壓迫のみに就いて言ふも、幾百萬の兵を以て我等を殺すよりもその害更に甚しいものがある。況んや外國は、背後に更に帝國主義を把持して彼等の經濟的壓迫を實行しつつあるに於てをやだ。かくて中國人民の暮しは自ら日に蹙まり游民自ら日に多く國勢自ら日に衰ふることとなる。

中國は最近一百年來既に人口問題の壓迫を受け、中國の人口は餘り增加せず寧ろ減少して居るのに外國の人口は日々增加しつつある。加之今や又、政治力經濟力に壓迫せられ、我等は同時に三種の力の壓迫を受けて居る。若し果して更に適當なる辨法に依り之が對策を講じ得なかつたならば、中國の領土如何に大なりとは云へ、人口如何に多しとは言へ、百年後には必ずや亡國滅

種、我等四億人の地位を永く萬古に存することは出來ないであらう。試みに看よ、曾て「アメリカ」大陸到るところに存在せし紅蕃は、今や全く滅亡せんとしつつあるではないか。故に我等は政治的壓迫の激しきを覺ゆると同時に、經濟的壓迫の更に激甚なるを曉らねばならぬ。幾千年來中國は未だ曾てこの三つの力から一齊に壓迫せられた經驗はないのであるから、我等に四億人あり容易に人に滅ぼさるるとはなかるべし等と高を括つて居る譯には行かないのである。故に中國民族の前途の爲めに工夫を凝し、將に適當なる方法を案出してこの三種の力を打消さなければならぬ。

第三講　民族主義の喪失とその原因

民族主義なるものは國家の發達を圖り種族の生存を圖るための寶物である、中國は今日己にこの寶物を失つてゐる。何が故にこの寶物を失つたのであるか。余が本日語らんとする大意は、即ち中國は何が故に民族主義を失つたか、その原因を推究し、同時に我等中國の民族主義が果して眞に失はれてゐるか何うかを研究せんとするに在る。余の觀察に依れば、中國の民族主義は明かに數百年前既に失はれてゐると思ふ。試みに看よ、我革命以前凡ゆる革命反對の激しい言論は、

悉くこれ民族主義に反對ではなかつたか。再び數百年前を回想する。當時既に中國の民族思想は完全に無かつたのである。ここ數百年間に於ける中國の書物の中には、全然民族主義を見出すことを見るのみにして、從て敢て滿清とは何ものであるかと說いたものはなかつたのである。近年と能はず、ただ滿清の功を歌ひその德を頌し、如何に深仁厚澤なりしか如何に生活が豊なりしか革命思想の發生後も、中國の學者文人を以て自任する人々は依然日々滿清に代つてこれを辯護したものである。例へば余が以前東京に於ける民報經營時代、我等は民族主義を提唱したが、その頃我民族主義を駁する人々は、滿洲種族中華に入るも我等は亡國とは思はない、何故ならば滿洲は明朝の龍虎將軍の封號を受けてゐるから滿洲が明朝を亡ぼしたところで、歷代朝廷相傳の接替に過ぎず、朝を易ふと言ふべきで亡國ではないと說いたものであつた。果して然らば曾て中國の總稅務司となつた英人「ロバートハート」は、彼も亦曾て中國の戶部の尙書の銜を受けたことがあるが、若し「ハート」が來つて中國を滅ぼし中國の皇帝となるが如きことがありとするも、我等は中國は亡國に非らずと言ひ得るであらうか何うか。斯樣に人々は口先き丈で滿清を擁護する許りでなく、尙その上に保皇黨なる一結社迄も組織し、專ら大清皇帝を保護し漢人の民族思想を消滅した。彼等保皇黨のものが滿洲人とすれば何の不思議もないが、それが悉く漢人であつた

のだ。そして保皇黨を歡迎するものは海外の華僑の間に殊に多かつた。その後革命思想の盛に行はるるときになつて、之等華僑も漸次宗旨を變更して革命に贊成するやうになつた。華僑は海外に在て多數の會黨を組織してゐたもので、洪門三合會卽ち致公堂はその一つである。彼等の本來の目的は、淸朝に反對して明朝を復興せしめんとするにあり、種族主義を抱懷してゐたものであるが、保皇主義が海外に流行してから後は、彼等もすつかり保皇黨に歸化して專ら大淸皇室の安全を保護することとなり、種族主義の會黨も却て滿洲皇帝保護に變じて了つた。此の一事を見ても中國の民族主義が完全に亡びてゐることを證明することが出來やう。

余は今會黨に言及したが、會黨の起源については知つて置く必要がある。會黨は滿淸康熙帝のときが最も盛んであつた。順次帝が明朝を滅して入つて中國の主となるや、明朝の忠臣義士は各處に起つて抵抗し康熙初年に至つても尙抵抗をやめなかつた。だからその頃はまだ中國は完全に征服せられてゐなかつたと言へる譯だ。康熙帝の末年以後、明朝の遺民も漸次滅びて行つたが、その中の民族思想を豊富にもつてゐた一派の人々は、大事既に去り再び滿洲に抵抗すべき能力なきを覺つて、卽ち社會狀態を觀察しここに一方法を案出して會黨をん結だのである。彼等の眼光は極めて遠大で思想は甚だ透徹して居り、社會の情形を觀察するや、又頗る明瞭を極めたもので

あつた。彼等が結合して種々な會黨を組織してゐた頃と時を同じうして、康熙帝は博學鴻詞科を開いて明朝の知識學問ある人を殆ど滿淸政府の下に網羅して居つたものである。だがそれ等民族思想を有する人々は、專ら文人に依て民族主義を維持することの不可能なるを知つて、去つて下流社會及江湖の歸へるべき家なき人々を糾合して團體を結成し、民族主義をその團體の中に生長せしめ存續せしめんとした。この種團體の分子は社會上最下位にある人々で、彼等の行動は甚しく鄙陋でありしため一般に閑却され勝であり、又文人の語らざる言葉を以て彼等の間に宣傳したがため、餘り注意も惹かなかつたものであつた。そこに想到したこれ等明朝の遺老なるものは實に眞知灼見ありしと言はなければならぬ。彼等が斯樣にして民族主義を保有せむとした手段は恰も太平時代には金持などはその寶物を非常に貴重な鐵箱の中に藏してゐるが、一旦强盜などに襲はるるや、置き場所を換ふる必要を感じ、之を鐵箱の中より取出して人の注意せざるところへ藏せんとするに至るべく、もし危急の極まるが如き場合には、如何にもしてその安全を計らんがため、これを或は汚穢の中にでも投ずるに至るであらう例にも比し得べきである。故に當時民族主義の存亡の危機に際し彼等明朝の遺老も中國の寶物を保存せんがために、之を甚だ鄙陋なる下流社會の中に藏せざるを得なかつたのであらう。故に滿淸二百餘年の專制下に於て、中國の民族

主義は、これ等會黨の間に口頭を以て傳へられ尙よく保存することが出來たのである。當時洪門會は清朝を顚覆して明朝に復せんとしたが、何が故に彼等の主義を智識階級の中に保存せんとしなかつたのであらうか。何が故に文章を作つて傳ふること太史公の所謂「之を名山に藏し之を其人に傳ふ」が如くしなかつたのであらうか。何故なれば當時明朝の遺老は、滿淸の博學鴻詞料が開かれ一時智識あり學問ある人は殆どすべて網羅せられたるを見、それ等の智識階級なるものが當てにならず、之を名山に藏し之を其人に傳ふると言つたやうな譯にゆかないことを知つてゐたからだ。だから彼等は之を下流社會の中に藏せんとして多數の會黨を結合したのである。會黨の中にあつては彼等の聯絡は非常に便利であつた。彼等の結合に依て滿淸の專制下によく民族主義を保持することは出來たが、それは文學に依つた譯でなく口頭を以て傳へたのである。だから余が今話した會黨の起原に就いても、何分ただ彼等の口頭に依て傳えられた故事に依る外なかつたので、講義に甚だしく困難を覺えた次第である。勿論當時は文字で傳へられたものにはあつたが。乾隆時代に至つて御多分に洩れず消滅せられて了つた。

康熙雍正の頃は明朝遺民の排滿が尙仲々熾烈であつた爲めに、大義覺迷錄等の如く多少の書物も出版せられて漢人は滿洲人の皇帝たることに反對すべきではないと說いた。そしてこの理由

とするところは、舜も東夷の人文王も西夷の人であるから、假令滿洲人が夷狄であるとは言へ、やはり中國人の皇帝たり得る筈だと言ふにある。之に由ても康熙雍正の如きは自ら認めて滿洲人となし多少忠厚な點もあつたらしい。その後乾隆時代に至り、滿漢といふ二字は口にすることさへも許されず、史書は皆改められ凡そ宋元及び明淸の歷史關係のものは一切刪除せられ、凡ゆる滿洲匈奴韃靼關係の記事ある書物は一律に禁書に定められ全部消滅し、之を藏することも看ることも許されなくなつた。當時違禁の書のため幾回となく文字獄が起り、中國の民族思想にして文字の中に保存せられたるものは完全に滅ぼされて了つた。淸朝の中葉後會黨中に於ても民族思想を持つて居たものは、只洪門會黨のみで、洪秀全の起義に當り之を相呼應して起ち、こゝに民族主義の復興を見たのである。こゝに注意すべきは洪門の名であるが、洪秀全の洪を取つて付けたのではなく、一般に朱洪武又は朱洪祝（康熙のとき人あり朱洪祝を奉じて義を起す）から得てゐると謂はれてゐる。がこれも亦當てにはならない。洪秀全に依て恢復せられた民族主義は、その失敗後更に流れて軍隊に傳はり游民に傳つた。當時の軍隊は、湘軍（湖安軍）淮軍（安徽軍）の如きも多くは會黨に屬して居たもので、卽ち今日の靑幇紅幫等の如き名目も亦軍隊から傳つて來たものである。

明朝の遺老は民族主義を下流社會に宣傳したが、何分にも下流社會は、知識極めて幼稚にして自らこの主義を利用することを知らず、却つて人から利用されたものである。例へば洪秀全時代反清復明の思想は軍隊の中に傳はつたが、洪門の子弟は彼等軍隊を利用することが出來ず、從て彼等軍隊は依然清兵であつた。之に就いては更に一つの故事を引例して證明して見やう。當時左宗棠は兵を率ひて新疆遠征の道すがら、漢口より西安に赴かんとし多數の湘軍准軍を率ひて長江を過ぎたることがある。その時代、會黨の珠江流域に散在せるものを三合會と言ひ、長江に散在せるものを哥老會と云つて居た。哥老會の頭目を大龍頭と呼んで居た。恰度その頃、一人の大龍頭が長江下流に於て法を犯し漢口へ逃れて居た。清朝の驛站の消息は固より非常に早かつたが哥老會の馬頭の通ずる消息は更に速かつた。左宗棠は途上一日彼の軍隊が自ら移動集中し始め十數里に亙る長列を作つたのを見て、頗る奇異の感じを抱いたものゝ頓と何事か判からなかつた。間もなく「一著名な匪首が漢口から西安に逃れてから捕縛の上處分せられたい」との兩江總督の文書を受取つた。左宗棠は當時別段之を捕へて處分すべき方法とてもなかつたので普通文書同樣の考へで本件はその儘放つて置かれた。その後、彼の軍隊の移動が一層激しくなり隊の排列が更に長くなつて、兵士達は皆口々に大龍頭を歡迎するのだと言ふてゐたが、彼等にはそれでもまだ

事情が判明しなかつたものである。後になつてその兵士達の歡迎した大龍頭こそは、兩江總督が彼に依頼して捕縛處分せんとした匪首であつたことを知り、彼はすつかり狼狽して、彼の幕僚某に哥老會とは何であるが、哥老會の大龍頭とこの匪首とは如何なる關係ありやと尋ねた處その幕僚の曰く、我軍中の兵士から將軍に至る迄悉く哥老會員である、而してあの大龍頭は我等哥老會の首領であると云ふ譯であつたので、左宗棠は、果して然らば我等の軍隊は如何にして維持し得べきやと再問した。之に對し幕僚は若しこの多數の軍隊を維持しやうとすれば大帥も亦大龍頭となつたらいゝ、大帥が若し大龍頭となることに不承知ならば我等も新疆へ行く譯にはゆかないと語つた。そこで左宗棠はこの話を聞いて卽座に別段いゝ方法も想ひ付かなかつたし、その上その多數軍隊を利用してやらうと云ふ下心もあつたので、その幕僚の言ふなりに開山堂に赴き大龍頭となり、その多數の會黨を悉く收めてその部下として了つた。斯樣な譯であるから、その後左宗棠がよく新疆を平定し得たのも清朝の威風を利用したのではなく、寧ろ實際上明朝の遺老の主義を利用したものであると言つた方が至當だと思はれる。中國の民族主義は清初以來久しく保存せられて來たが、左宗棠が大龍頭となりその詳細なる內情を知るに及んで、馬頭は破壞せられ會黨の各機關も悉く滅ぼされて了つた。故に我等が革命に際しては利用すべき機關もなかつたので

ある。斯の如くこの洪門會黨の人の利用すところとなつたがため、中國の民族主義は夙に滅びて了つたのである。

中國の民族主義は既に亡びた。本日はその滅亡の原因に就て語りたいと思ふ。この原因は甚だ多いが其の最大の原因と言へば、異民族の征服であらう。凡そ一民族が他民族を征服した場合、他民族が獨立思想あるを許さないのは自然である。恰度朝鮮を征服した日本が、朝鮮人の思想を改變せんとして、凡ゆる朝鮮の學校の教科書から、民族思想に關するものを一切削除して終つたが如きはその一例で、斯くして三十年後には、朝鮮の兒童は朝鮮の存在してゐたこと自分達が朝鮮人であることも知らなくなるであらう。從前滿清が我等に對して採つた政策も亦同樣であつた。故に民族主義滅亡の第一原因は卽ち我等の異民族に征服せられたからと言ふ譯だ。征服民族は被征服民族の凡ゆる寶物を悉く消滅せんとするが常であるが、滿洲人はよく這間の道理を心得てゐて非常に巧妙な手段を執つて來たものである。康熙帝のとき文字獄は興しはしたが乾隆帝程は狡猾ではなかつた。彼は漢人の民族主義を完全に消滅せんがために、自ら天來の中國皇帝と稱し、人に勸めて天に逆ふを不可とし、謂はゞ天を藉りて人民を諭したものである。乾隆に至つては、更に狡猾であつて滿漢の限界を完全に消滅して了つた。故に乾隆以後は、智識階級の人も過半は

民族思想あるを知らずしてたゞ下流社會のみに傳はつた。がその下流社會なるものは鞋子を殺すべくその當然なるを知つてはゐたが、何故が然るかを知らなかつたものである。だから中國の民族思想は數百年前に滅びたのである。かく滅びて了つたのも滿洲人の方策宜しきを得た結果であらねばならぬ。

中國の民族主義の滅びた原因は元來國が亡びたからである。外國人に征服せられたからである。併し乍ら、世界の民族中他から征服せられたものは、敢て中國許りに限つたものでもない。猶太人も亦亡國の民である。猶太人は耶蘇生誕前既に他國に征服せられて居たが、耶蘇の傳敎時代に及び彼の門徒等は彼こそは革命家であるとして耶蘇を革命の首領に推戴したものである。だから當時彼を猶太人の王と稱してゐた。耶蘇門徒の父母は曾て耶蘇に對し「我王成功せば我長男は主の左邊に二男は主の右邊に生せしめん」と語り、嚴然として中國の所謂左右の丞相に擬してゐたものである。こんなやうな風に猶太人は國亡びて後も耶蘇の門徒は耶蘇は革命家であると信じてゐたものだ。當時耶蘇の傳敎は或は多少政治革命的色彩を帶びてゐたかも知れず、そんな關係から彼の十二人の門徒中の一人が耶蘇の政治革命は既に失敗に歸したものとして彼の老師たる耶蘇を賣ることゝなつたのであるが、彼は耶蘇の革命なるものは、その國が天國と稱せられてゐるのでも

判かる通り、實は宗教革命であつたことを知らなかつたのだ。宗教革命であつたが故に耶蘇が殺されてから後猶太の國は滅亡したが猶太民族は今尙存在して居るのである。又印度の如きも亦亡國であるが、彼等の民族思想は、中國のそれの如く、一度び外國の武力に壓服せらるゝや、忽ち滅びて了つたことは大分その趣を異にしてゐる。次は波蘭であるが、これ亦百餘年國は亡びて居たが、その民族思想が永く存在してゐたゝめ、歐洲戰後彼等は舊國家を恢復し今では歐洲二三等國の班に列した。斯くの如く中國と猶太、印度、波蘭とを比較すれば何れも一樣に亡國である。然るに外國に於ては國亡びて民族主義の猶よく存在するものあるに拘はらず、中國は兩度の亡國を經過して民族思想が滅びた原因は何處にあるか。誠に奇怪千萬な話である。その間の道理を研究することは、頗る興味深き問題であらねばならない。中國は亡國以前に於ては非常に文明な民族であり極めて强盛な國家であつて、常に自ら大國と稱し文物の邦と聲明しその他の國はすべて蠻夷であつた。中國は世界の中央に居るを以て自ら呼んで中國となし自ら大一統と稱した。所謂「天無二日、民無二王」又所謂「萬國衣冠拜冕旒」とて、すべてこれ中國の亡國前に於ける狀態であつて、當時既に、中國は漸く民族主義より世界主義へと進みつゝあつたのである。故に歷代は總じて帝國主義を以て、恰も漢朝の張博望、班定遠が三十餘國を滅し、又英國印度會社の「クライブ」が印度幾十國を收服したやうに別種民族を征服したものであるが、大體に於て中國幾千年來、平天下主義を實行し亞細亞大陸各小國を完全に征服したものであつた。けれども中國の他國を征服する場合は、現在の歐洲人のやうな野蠻なる手段に依らず多くは和平手段を以て感化した。所謂王道である。常に王道を用ひて諸弱小民族を收服して來たのである。之に由つて推尋すれば、我等民族思想滅亡の道理を發見することが出來る。然らば、他の民族例へば猶太の如きは國亡びて二千年、然も彼等の民族は依然として存在せるにも拘はらず、我中國は國亡びて僅か三百餘年に過ぎずして完全にその民族主義が亡びて了つた理由は何處から知ることが出來るか。この原因を考察することは恰も病人に就いて考察すると同樣であつて、如何なる病氣でも先天的なものはなく病氣に罹る以前に於て既に何等か身體に不健康の原因が起てゐたのである。中國の民族思想の消滅に就いても之と同じことが言ひ得る。即ち中國も亡國以前に病氣になるだけの根源があつたのでゝだから他から征服せらるゝや否や民族思想は忽ちにして滅びて了つたのである。この病源は即ち中國が幾千年來帝國主義的國家たりし點にある。現在の英國及び革命以前の露國の如きはすべて世界の最强盛の國家である。そして英國の帝國主義は今尙ほ益々發達しつゝある。ところが我中國の從前の帝國主義なるものは、之をしも凌駕してゐたかも知れない程であつた

のだ。

英露兩國に於ては有識の學者の間に民族主義反對の一個の新思想が提唱せられた。この思想に依れば民族主義は偏狹であつて寛大ではないと言ふにある。卽ち端的に云へば、世界主義である現在の英國、革命以前の露國、獨國現在及び中國の新文化を提唱しつゝある新青年は皆この主義に贊成し民族主義に反對してゐる。余は日頃多數新青年が、國民黨の三民主義は現在の世界の新潮流には適應しない、今世界で最新であり且最良の主義は世界主義であると說くのを聽く。果して世界主義は是か非か。若し果してこの主義にして是ならば、中國は一度び國亡びて忽ちその民族主義が消滅したのは何故であるか。世界主義は卽ち二千年前中國に於て唱へられた天下主義である。我等は今この主義が果して是であるか非であるかを研究して見やう。理論上から云へば、勿論惡いと言ふことは出來ぬ。從前中國の知識階級の人々は世界主義的思想を抱懷してるたものである。故に滿淸の入關するや全國は忽ち滅びたのである。康熙帝も亦世界主義を說いた人で、彼は舜は東夷の人なり文王は西夷の人なり東西の夷狄の人もすべて中國に皇帝たり得ると說いて居る。卽ち中國と夷狄華夏とを分たない。夷狄華夏を區別せなければ卽ち世界主義ではないか。凡そ思想は、我等の用に適するか否かを見なければその是非善惡を斷ずることは出來ない。若し

我等の用に合すれば善である。合せざれば惡である。全世界の用途に合すれば是であり、合せざれば卽ち非である。世界の各國家は帝國主義を以て他を征服し、その特殊地位を保全し全世界の主人翁たらんがために世界主義を提唱し全世界を服從せしめんとしたのである。從前中國が世界主義を主張したのも亦全世界の主人翁となり萬國の上に立たんことを願つたがために他ならない。けれども普通社會にこの主義があつたがため、滿淸の入關に際しては一人の之に抵抗するものもなく國が亡びたのである。滿淸の入關せるとき、その人數は極めて少數で總數十萬に過ぎなかつた。この僅か十萬人を以て何うしてよく數億の漢人を征服することが出來たのであるか。これ當時大多數の漢人は盛に世界主義を說かず、何人が中國皇帝たるを論ぜず均しく之を歡迎したがために他ならない。故に史可法が滿人に反對せんとしても彼に贊成するもの極めて少なく、結局何等の抵抗を試みる迄もなく、滿人は全國人の歡迎裡に安穩に中國皇帝となり得たのである。その頃漢人は滿人を歡迎する許りでなく、その上その旗下に投じて滿人に歸化せんとした。これ所謂漢軍旗である所以である。

現在世界最强盛の國家は英米二國である。世界には一强國のみならず所謂列强と稱し幾つもの强國がある。けれども列强の思想なり性質なりは今以て何等改變せらるることがない。將來英國

なり米國なりが或は列强を打破して獨强となるかも知れない。そのときになれば中國も或は英國に征服せられ中國民族も英國民族と變つて了ふであらう。それでも我々はいいのであるか。若し中國人にして英國籍なり米國籍なりに入つて、英國又は米國を助けて中國を打破せんとし、我等は世界主義に服從するものなりと說かんとするものあらば、我等は自己の良心に果して安んじ得らるるや否やを問ふて見たいのである。若し果して我等の良心が安からざるものあらば、それは我等に民族主義的感情があるからのことだ。民族主義はよく我等良心をして不安ならしむるに足る。これ卽ち民族主義が人類生存上の寶物たる所以でなければならない。例へば讀書人は何によつて生計を謀るのであるか。卽ち手中の筆を以て生計を謀るのである。筆は讀書人の生計を謀る道具なのである。民族主義は卽ち人類生存の道具なのである。若し果して民族主義を存在せしむることが出來なかつたならば、世界主義が發達の曉は我等は生存する能はず、人のため淘汰せられて了ふであらう。古來曰ふ「三苗を三危に竄す」と。漢人は彼等を雲南貴州の邊境に驅逐しその種族は現に殆んど絶滅せんとし生存の危機に瀕してゐる。三苗と言へば、やはり中國固有の土民であつた。我等中國民族の將來も亦三苗と同じやうになるのではなからうか。

中國民族の起源に就いては、西方より來り嶺々を越え天山に到り新疆を經て黃河流域に達した

百姓民族なりと說くものがある。中國文化の發祥地說に照してこの議論は相當理由があるやうに思はれる。若し中國の文化が外來のものでなく、本國に發生したものとすれば、卽ち天然の原則に照して云へば、中國の文化は當然黃河流域ではなくて珠江流域に發源したものでなくてはならぬ。何故なれば、珠江流域は氣候溫和物產豐富にして、人民の生活に適し文明の發生にもつて來いの土地であるからである。然し乍ら歷史を考究するに、堯舜禹湯文武の時代は、何れも珠江流域に生れたものはなく、悉く西北に生れた。而して珠江流域は漢朝になつても依然蠻夷の地であつた。斯樣に考へて來ると、中國の文化は西北方から來たものであり、外國から來たものであると言ふ說は、大體に於て正しいもののやうに思はれる。そして中國人が人民のことを百姓と言ふが、これ等も外國人が、西方に古時一つの百姓民族あり其後中國に移住して中國固有の苗族を滅し又は之を同化して中國今日の民族を造つたと言ふ說を裏書するものではあるまいか。

進化論の自然の法則に依れば、適者は生存し不適者は滅亡する、優者は勝ち劣者は敗るとある。我民族は果して優者であるか或は劣者であるか。又適者であるか又は不適者であるか。諸君は我民族の滅亡を願はないのは自然であらう。そして只管本民族の生存と勝利を望むであらう。これ人類天然の思想である。今我民族は非常な困難な地位にあるから將來必ず滅亡するであらう。そ

の原因は外國の人口增加とその政治及び經濟力の三つの壓迫を同時に受けるからである。我等が現に受けつつある政治及び經濟力の壓迫は、已に極點に達してゐるが、ただ我民族は現在のところまだ大であり、外國の人口增加の壓迫をまだまだ痛切に感じてゐる譯ではなく百年後になつて始めて感ずる程度のものであるから、此の點やや安心は出來る。ところが我等は現に斯樣な大民族を持つてはゐるが、殘念乍ら民族思想を失つて了つてゐる。だから外國の政治力經濟力だけでも我等を打破することが出來るのだ。これが若し民族思想さへ失はれてゐなかつたならば、外國の經濟力政治力も必ず我等を打破することは出來なかつた筈だ。だが我等は何う言ふ譯で民族主義を失つて了つたのであらうか、この點を攻究して見たい。蓋し之は甚だ難しい問題である。余は一場の故事を藉りて比喩へて見やう。勿論この比喩は不倫不類にして我等が語るところの道理とは毫も關係のないことで單に例として借りて來るに過ぎないものであるが、又この間の原因を說明することが出來るかと思はれる。この故事は余が香港で親しく目擊したところのものである。曾て一人の苦力があつて、日々船着波止場で一本の天秤棒と二筋の繩とを持つて旅客に代つて荷物を擔ぎ、每日荷物を擔ぐことに依て暮しを立てて居た。その後彼は十數弗の貯金をした。當時「ルソン」彩票が盛んに賣出されてゐたが、彼もその貯金を以て一枚買つたものである。もとも

とその苦力は歸るべき家とてもなく、何物に限らず藏つて置くべきところもなく、從てその買つた彩票も亦藏ふところもなかつたのである。彼の商賣道具としては一本の竹の天秤棒に二筋の繩許りその二つは彼の行くところへ何處へでもお伴してゐたから、彼はその買つた彩票を竹の天秤棒の中へ藏ひ込んで終つては、臨時取り出して見るといふ譯には行かなかつたので、彼はその彩票の番號を死にもの狂ひで暗記し、絕えず棒の中に入れて置くことにした。ところが彩票を竹の天秤棒の中へ藏ひ込んで終つては、臨時取ずそれを口づさんで居たものである。さて抽籤日になつて彼は彩票店に赴き當籤番號表を見たところ、思ひがけなく自分が一等に當籤して居り、十萬元儲かつてゐるのを知つて、彼は氣も狂はん許りに喜び、竹の天秤棒や繩を以て苦力をする必要もなくなり、永久に大金持たることが出來ると思ひ、歡喜の極、手中にある竹の天秤棒と繩とを一齊に海中に投げ込んで終つたのであつた。

以上の比喩に從へば、差當り「ルソン」彩票は恰も世界主義に比すべく、これで大儲けが出來たのである。竹の天秤棒は恰度民族主義であつて唯一の生活の道具である。又この一等に當籤したときは、恰も中國の帝國主義が極盛時代から進んで世界主義の時代に至り、我等の祖先が中國は世界の最强にして所謂「天無二日、民無二王、萬國衣冠拜冕旒、世界從此長太平矣」と有頂天

となり、以後はただ世界主義を說きさへすればいい、全世界のものは中國人は進貢せねばならぬ、今後民族主義は不必要だと考へ、苦力が天秤棒を海中に投ぜんとせしと同樣民族主義を拋擲せんとしたに比すべく、その後滿淸のために滅さるるに至つて、世界の大主人翁となることが出來なかつた許りか、自己の小さな家產すら安心して保守することが出來ず、人民の民族思想も一齊に消滅して了つたことは、恰も竹の天秤棒を海中に投げ込んだのと同樣である。

故に滿淸兵を率ひて入關するや、吳三桂これが嚮導となり、史可法が民族主義を提唱し福王を推戴して、南京に於て恢復を圖らんとしたのに對し、滿洲の多爾兗は史可法に對し云ふ、我等の江山は之を大明に得たものではなく、闖賊から得たものであると。彼のこの意味は、明朝の江山は明朝自身の手で失くなつたものであると言ふのであつて、これ恰も苦力が自分で竹の天秤棒を失くしたのと同樣である。近來新文化を語る學生も亦、世界主義を提唱し民族主義は世界の潮流に合はないと言ふ。若しこの議論が英國米國或は我等の祖先あたりから發せられたるものなれば頗る適はしいであらう。けれどもこれが現在の中國人から發せらるると言ふのであるから、まことに不釣合である。獨逸は從前壓迫を受けなかつたから民族主義を說かずして唯世界主義のみを說いたのである。だが今の獨逸は余の見るところでは、恐らく世界主義を說かずして民族主義のみを說

くであらう。我等の祖宗にして若しあの天秤棒を失くしなかつたならば、我等は尙ほその一等の彩票を取り戻すことも出來たであらうに、彼等の天秤棒を失くするのは餘りに早かつた。知らず、その幸運なる彩票は尙ほその中に藏せられて居るであらうか。故に既に外國人の政治力及經濟力の壓迫を受けつつある我等は今後更に又天然の淘汰に遭ふやうなことでもあれば、亡國滅種の憂があるであらう。

今後我等中國人に果して適當なる方法が發見せられ、民族主義を恢復し一本の竹の天秤棒を探し出すことが出來たならば、外國の政治力經濟力の壓迫が假令如何に激しくても、我等は千萬年の後迄も決して滅亡することはないであらう。天然の淘汰に至つては、天既に我等四億人を生み今日に保存して來た以上、從前天は中國を亡ぼさうとは考へて居なかつたに相違ない。天意の存するところ、我等民族は長へに存在することが出來得ると信じたい。若し果して將來中國が滅亡するやうなことがあつたならば、罪は我等自身にある。卽ち我等は將來世界の罪人とならねばならぬであらう。天は既に重任を中國人に付托してゐる。若し中國人にして自愛せずんば、これ天に逆ふものと云はなければならない。故に中國が今日の地位に至つたことに付ても我等に負ふべき責任がある。今天既に我等を淘汰せず、これ天が世界の進化の發展を欲するからである。若し

果して將來中國が亡びるやうなことでもあれば、それは必ずや列强が亡ぼすのであつて、これ卽ち列强が世界の進化を阻止せんとするものに他ならない。（以下十行削除）

第四講　民族自決論と世界主義

現在世界の人口は十五億前後である。この十五億の中中國はその四分の一を占め、卽ち四人每

に一人の中國人がゐる譯である。歐洲に於ける白種民族の合計はやはり四億である。目下世界に於て最も發達せる民族は白人で、白人の中に四種の民族がある。歐洲中北部にあるのが「チユートン」民族で、この民族は數個の國家を建立してゐるが、その最大のものが獨國、之に次ぐものは墺國、瑞典、諾威、和蘭、丁抹である。東部には「スラブ」民族があり、又數個の國家を建立してゐるが、その最大のものは露國にして、歐洲戰後新しく發生したものに「チエック、スロバキア」と「ユーゴスラビア」の二國がある。歐洲の西部には「サクソン」民族があり、「アングロサクソン」と呼び英米の二大國を建立してゐる。南部には「ラテン」民族あり數個の國家を建設し、その最大のものは佛國にして、その他は伊太利、西班牙、葡萄牙である。「ラテン」民族は又南「アメリカ」大陸に移住して數個家の國を建立し、「アングロサクソン」民族も亦北「アメリカ」大陸に移住して「カナダ」と米國とを建てた。四億に過ぎない歐洲の白色民族が四大民族に分かれ、この四大民族がかくも幾多の國家を建設した原因は、彼等白人の非常に發達した民族主義にある。白人の民族主義が非常に發達したため、彼等の民族は歐洲に充滿し擴充して、西半球南北「アメリカ」大陸に至り、又東半球の東南方「アフリカ」大陸、濠州に至つたのである。現在世界民族中地球上の最大の領土を有するものは「サクソン」民族である。この民族は是初歐洲に發源し、

その歐洲に於て占むる領土は、「イングランド」、「スコットランド」及び「アイルランド」の大「ブリテン」三島に過ぎなかつたものである。この三島の大西洋に於ける位置は、恰度日本の太平洋に於けると同樣である。その後「サクソン」人の擴張した領土は、西は北「アメリカ」大陸、東は濠洲「ニュージーランド」、南は「アフリカ」大陸に及んだ。だから世界で最大の領土を有するものは「サクソン」民族であり、世界最富最强の人種も亦「サクソン」人である。歐洲戰前世界に於ける最も强盛なりし民族は「チュートン」と「スラブ」の兩民族であり、就中「チュートン」民族はその聯明才力最も優れてゐた。故に獨國は二十幾個の小邦を聯合して大獨逸聯邦を建設することが出來たのである。その成立當初は本來農業國であつたが、後工業國となり、工業の發達に伴ひ、陸海軍亦之に隨て强盛に赴いた。

歐洲戰前歐洲民族は、すべて帝國主義の害毒を受けざるはなかつた。帝國主義とは如何なるものであるか。卽ち政治力を用ひて他國を侵略する主義で中國の所謂勤遠略である。この種侵略政策を現在名付けて帝國主義と云ふ。歐洲に於ける各民族は、何れもこの主義に染つてゐたがため、戰爭は絕間なく發生し、殆ど必ず十年に一度の小戰、百年に一度の大戰ありと言つた有樣であつた。その中最も大なるものは卽ち數年前の歐洲大戰である。今次の戰爭は世界的大戰爭と言ふこ

とが出來る。何故ならば、戰爭の擴大するところ、全世界に影響し各國人皆その渦中に捲き込まれたからである。今次の大戰構成の原因は、第一に「サクソン」民族と「チュートン」民族との海上覇權の爭奪である。卽ち獨國近來の强盛は漸次その海軍を擴張し世界第二の海權の强國となつた。ところが一方、英國は自己の海軍を以て獨り全世界に覇たらんとの野心に燃えてゐたのであるから、第二の海軍國たる獨逸と兩立せず、之を打破せんとした。英、獨兩國の海上覇權の爭奪こそ戰爭の第一原因であらねばならぬ。次に第二は各國の領土爭奪である。卽ち東歐の一弱小國土耳古(卽ち突厥)は百年來近東の病夫と稱せられてゐた。內政は紊亂し皇帝は專制にして、その國勢衰弱の極に達し、從來歐洲各國はこれが分割を策し、百餘年來未解決の儘懸案として殘されてゐたものである。歐洲各國はこの問題を解決せんとして戰爭を引き起したのである。故に歐洲大戰の原因は、第一は白色人種の優越爭ひであり、第二は世界問題の解決にあつた。歐洲大戰にして若し果して獨國の勝利となり世界の海上權を擧げて獨國の手に歸してゐたならば、恐らく英國の大領土も完全に喪失して、必ずや羅馬の二の舞を演じ四分五裂して滅亡して了つたであらう。けれどもその結果は獨國の戰敗に歸し、その帝國主義の目的も達するに由なかつた。此の歐洲大戰は實に世界有史以來の最も劇烈なりしもので、參加軍隊四五千萬、年を閱する四年の久しきに及び、

戰爭最後のときに至つても尙勝敗を分つことが出來なかつたのである。戰爭の兩當事者の一方を協商國他方を同盟國と言ふ。同盟國側は最初獨墺二國だけであつたが、後土耳古「ブルガリア」が之に加入した。協商國側は始めは「セルビア」、佛、英及び日本で、その後伊太利及び米國が加入した。米國參加の原因は全く民族問題にある。戰爭當初一二年、獨、墺は連りに勝利を獲、佛の巴里及び英國海峽は殆ど兩國の軍隊に攻め入られ、「チユートン」民族は英國必ず亡ぶべしとなし、英國人自身も亦頗る之を憂慮し、米國の民族が彼等と相同じきを見「サクソン」民族の關係から米國を煽動したものである。米國は自己と同民族の英國が特に異民族たる獨國に滅ぼされんとするを見、物その類を傷むは蓋し免れざるところ、遂に戰爭に加入して英國を助け「サクソン」人の生存を維持し、同時に自己の力のみを以てしては力の足らざるを慮り、全力を竭して全世界の中立民族を煽動し、これ等と共同して參加し獨國を打ち敗つたのである。戰爭當時最も世人の歡迎を受けた一大言論がある。米國「ウイルソン」の民族自決の主張卽ちこれである。獨國は武力を以て歐洲協商國民族を壓迫したため、「ウイルソン」は獨國の强權を打滅し世界各弱少民族をして以後自主の機會を與へんことを主張したのである。ここに於て此の主張は全世界到る處に歡迎せらるることとなつた。故に印度は英國のために滅ぼされ、一般人民は英國に反對して居たにも拘

らず、多くの小民族は「ウイルソン」が今回の戰爭は弱小民族自由のための戰なりと說くを聽いて、彼等は喜んで英國を助けて戰つた。又安南は、佛國に滅ぼされ、日頃人民は佛國の專制を痛恨してゐたが、歐洲戰爭に當つては、尙佛國を助けて戰つた。之れ亦「ウイルソン」の主張の正しきを認めたが故に他ならない。かの歐洲弱小民族たる波蘭、「チエツコスロバキア」、「ルーマニア」が協商國側に參加し同盟國と戰つた原因の如きも亦「ウイルソン」の民族主義的主張を聞きしがためであつた。我中國も亦米國に煽動せられ、戰爭に參加し出兵こそしなかつたが、幾十萬の勞働者を戰線に送つて戰壕を堀り、後方勤務に從事したものである。協商國側がこの好題目を創出したゝめ、歐亞の區別なく一切の被壓迫民族は一致聯合して彼等を助けて同盟國を打破したのである。當時「ウイルソン」は世界平和を維持せんことを主張し十四ケ條を提出したが、その中最も重要なものが民族自決であつた。之に對し、戰爭の勝敗逆賭し難きときには、英、佛共に大贊成であつたものゝ、一旦戰後講和會議の開かるゝや、英、佛は勿論伊太利も、「ウイルソン」の民族解放の主義が帝國主義の利益と衝突することの極めて大なるを覺り、講和會議に當つて種々なる手段を弄して「ウイルソン」の主義を欺瞞し去つた。結局講和會議に於て定められた條件は最も不公平なものとなり、世界弱小民族は自決することも出來ず自由を得ることも出來なかつ

た許りか、更にその後受くるところの壓迫は從前に比して一段と激しくなつた。これに依ても、強盛なる國家と、有力なる民族とは既に全世界を雄占し、如何なる國家如何なる民族の利益もすべて彼等に壟斷せられつゝあるを見るべきであらう。彼等はこの壟斷の地位を永遠に維持し。再び弱小民族の復興を許さざらんとして、日々世界主義を鼓吹し、民族主義は範圍餘りに狹隘であると言ふのである。何んぞ知らん、彼等がかく主義するところの世界主義こそは、帝國主義及侵略主義の變形に過ぎないのである。然し乍ら「ウイルソン」の主張が一旦提出せられた以上之を撤回することは出來ない。各弱小民族が協商國を帮助して同盟國を打倒したのは、戰勝後の自由を希望してゐたからであつたが、その後講和會議に於て得た結果は、彼等を非常に失望せしめた。だから安南、緬甸、「ジャワ」印度、南洋群島及び土耳古、波斯、「アフガニスタン」、埃及等歐亞幾十の弱小民族は何れも大いに覺醒するところあり、列强の當日主張せしところの民族自決なるものは、全然彼等を騙つたものに他ならないことを知つた。故に彼等は約せずして同一態度に出で自ら民族自決を實行したものである。

數年に亘る歐洲大戰の結果も、やはり帝國主義を消滅せしむることは出來なかつた。何故なれば當時の戰爭は、一國の帝國主義と他國の帝國主義と相衝突せしものにして、野蠻と文明との戰

爭にあらず、强權と公理との戰爭にもあらず、從てその戰爭の結果は、依然として一帝國主義が他帝國主義を打倒せしに止まり、殘るは矢張り帝國主義であつたからである。然し乍ら此の戰爭の結果、本來露國は歐洲戰前一九〇五年既に革命が起つたが成功しなかつた。そして歐洲戰に至り始めて大成功を告げたのである。歐洲戰に至り、再び革命を發生した原因としては、彼等が今次の歐洲戰を經過して大いに覺醒するところのあつた點を擧げねばならない。露國はもと協商國の一として協商國側が獨逸を打つに當つては、約一千萬の大兵を出して多大の力を提供したものである。協商國にして若し露國に參加を得ることが出來なかつたならば、當時歐洲西方の戰線は夙に獨國のために衝破せられてゐたであらう。それを露國が東方を牽制したがため、協商國は獨國に對し兩三年を持ち耐えることが出來、敗を轉じて勝とすることが出來たのである。露國は戰ひつゝも自ら思索した結果、協商國を帮助して獨國を打つことは、數個の强權を帮助して一個の强權を打つことゝなり、將來必ず好結果を齎さざるべきに想到し、一般の兵士及人民は飜然として協商國から脫離して、獨國と單獨講和を行つたのである。況や國家的地位より言へば、露、獨兩國人民の利害は毫も衝突するところ無く、唯帝國主義的地位に立ち、彼此侵略を思ふとき初めて自然に

戰爭が起る譯で、而も且獨國の侵略が甚しい場合にのみ、自衞のため英佛各國と一致の行動をとらねばならぬと云ふだけのことであつて見れば、猶更のことである。其後露國人民は更に帝國主義の正しからざるを覺つた。故に本國に對して革命を起し、先づ本國の帝國主義を傾覆し、同時に又獨國と講和して外患を壓迫を免れたのである。久しからずして協商國も亦獨國と講和し、共同出兵して露國を打つた。何が故に協商國は出兵して露國を打つたか。これ露國人に新覺悟が發生せるがために他ならず、卽ち日頃受くるところの苦痛が、すべて帝國主義に基くものにして、今この痛苦を解除せんがためには、帝國主義を除去せざるべからざるを知り、民族自決を主張したが爲である。各國はこの主張に反對して共同出兵して露國を討伐したのである。露國の主張と「ウイルソン」の主張とは偶然にも一致して、共に世界弱小民族の自決自由を主張した。露國の主義の傳はるや、世界の弱小民族は何れも大いに贊成し、共同して自決を求めた。歐洲は、今次の大戰の災害を經過して帝國主義の一方面より云へば、もとより何等大なる利益はなかつたが、此の、、、、、、　、、、、、、、、、、、、、、、、。

世界十五億の人口中最も强盛なる歐洲及び米大陸の四億の白色人種である。白人種はこれを以て本位となし、別色人種を併合し滅亡せしめた。「アメリカ」大陸の紅色人種の如きは已に消滅し、

「アフリカ」大陸の黑人も久しからずして滅びんとし、印度の銅色人種も亦まさに滅亡に瀕してゐる。「アジア」大陸の黃色人は、、、、、、、、、、、、、、久しからずして或は消滅するかも知れない。けれども露國革命成功して、彼等一億五千萬人は白色人種中より離脫して白人の侵略行爲に贊成せず、現在に於ては「アジア」の弱小民族の仲間入りして强暴なる民族を反抗せんとするに至つた。その結果强暴なる民族も剩すは、たゞ二億五千萬であるが、これ等は依然野蠻手段を用ひ、武力を以て十二億五千萬人を征服してゐる。故に今後世界の人類は一は十二億五千萬他は二億五千萬の二つに分れて決鬪せねばならぬ。後者は人數こそ甚だ少なけれ、彼等は世界最强盛の地位を占め、その政治力經濟力は極めて大なるを以て、總じてこの二種の力を用ひて弱小民族を侵略すべく、若し政治的陸海軍力にして及ばざれば卽ち經濟力を以て壓迫すべく、經濟力にして時あつて窮まるときは、卽ち政治的陸海軍を用ひて侵略すべく、彼等の政治力が經濟力を幇助するは、恰も左手を以て右手を幇助するに同じく、多數の十二億五千萬の人民を激しく壓迫して已まないであらう。然し乍ら天は人の願に從はず、忽然として「スラブ民族」一億五千萬人を生み、帝國主義及び資本主義に反對し、世界人類の爲めに不平等を打たしめた。故に前述の如く一露國人は、世界の列强が「レニン」を詆毀する原因を指摘して、彼が敢て世界に於ける多數民族たる

十二億五千萬人は少數民族たる二億五千萬人のために壓迫せられて居ると語つたが爲めであると云つたのだ。「レニン」はこの種の說をなせしのみか、且被壓迫民族の自決を提唱し、世界の被壓迫人のために不公平を攻擊した。列强が「レニン」を攻擊するのは、彼等自らの安全を求めんがために、人類の先知先覺を消滅せんとするものにあらずして何ぞやだ。然し乍ら今や人類はすべて覺醒し、列强の造る謠言は悉く佯であることを知つてゐるから、再び彼等は欺瞞せられないであらう。これ卽ち世界民族の政治思想が進步して光明ある地位に迄至つた爲である。

我等は今失はれたる中國の民族主義を取戻し、これ四億の力を以て世界人類の爲に不公平を打つことを、我等四億人の天職としなければならない。列强は我等にこの思想あるを恐れて、一つの似て非なる道理を生み出して、世界主義を主張し我等を煽惑せんとし、世界の文化は進步し人類の眼光は遠大ならざるべからず、民族主義は狹隘に過ぎ餘りに適當ならず、故に世界主義を提唱すべきであると說く。最近中國の新靑年も新文化を主張し民族主義に反對するものあるは、卽ちこの種理窟に誘惑せられたからのことである。けれどもこの道理は被壓迫民族の語るべきものではなく、我等被壓迫民族としては、何よりも我民族の自由平等の地位を恢復すると言ふことが必須的先決問題であつて、世界主義を語るのはそれからのことである。余の前述せし、苦力の

彩票を買ひし比喩は、已に發揮せられて甚だ明かである。彩票は世界主義、竹の天秤棒は民族主義、苦力が一等に當籤して商買道具の竹の天秤棒を失つたのは、宛も我等が世界主義に誘惑せられて民族主義を失はんとするに比すべきである。民族主義は何處から發生したものであるか、我等はその民族主義より發生したものなることを知る。故に我等にして世界主義を發達せしめんとせば、先づ民族主義を鞏固にせねばならぬ。若し果して民族主義にして鞏固なる能はざれば、世界主義も亦發達することが出來ないであらう。これに依ても世界主義なるものは、丁度苦力の彩票が天秤棒の內に藏せられたと同樣、實は民族主義の中に藏せらるるものなることを知ることが出來よう。若し民族主義を棄てて世界主義を說かば、之も恰も苦力が彩票を藏したる竹の天秤棒を海中に投ぜしにも比すべく、眞に本末を顚倒した事ではないか。余は先日我等の地位は安南人にも及ばずと說いた。安南人は亡國の民にして他國人の奴隷である。然も我等はこれにさへ及ばずとせば、我等の地位は奴隷にさへ及ばないと云ふことになる。かかる地位にあり乍ら、猶も世界主義を說いて民族主義を說くを要せずと云ふならば、余は諸君の頭腦を疑はざるを得ない。歷史に就いて言へば、我等四億の漢族は何づれの路を步いて來たか。やはり帝國主義の一路を步いて來たのではなかつたか。我等の祖宗は、從前常に政治力を以て弱小民族を侵略して來た

のではなかつた。ただ當時經濟力未だ大ならざりしため、我等は未だ經濟力を以て他民族を壓迫したことがないと云ふだけのことである。更に文化に就いて言へば、歐洲に比し早きこと幾千年である。歐洲文化の最盛時代は希臘羅馬であつて、羅馬に至つて最も隆盛を極めた。羅馬は中國の漢朝と同時代に過ぎない。當時中國の政治思想は頗る高遠にして且つ深淵であつた。一般の大言論家は、何れも極力帝國主義に反對し、帝國主義反對の文學が多く見受けられたもので、その中最も著名なるものに「棄珠崖議」がある。この文章は、即ち中國の領土擴張に反對せしものにて、南方の蠻夷と地を爭ふのを不可としたものであつた。斯樣に中國は漢朝の頃には外人との戰爭を主張しなかつたものだ。

中國の平和思想はかくて漢朝に至つて既にその頂點に達して居た。宋期に至つては、中國人は外人を侵略せざるのみか、却て外人の侵略するところとなり、故に宋朝は蒙古の爲に滅ぼされて了つた。宋の滅亡後明朝に至り纔に國を恢復したが明朝の復國後も矢張り外國を侵略しなかつた。當時南洋の諸小國が中國に進貢せんとしたのは、彼等が中國の文化を仰慕し自ら歸順を願つたもので、決して中國が武力を以て彼等を壓迫した譯ではない。巫來由及び南洋群島の諸小國の如き、我中國が彼等をその版圖に編入し進貢を許したのを以て非常な光榮としたもので、若し彼

等に進貢を許さなかつたならば、彼等は非常な恥辱と考へたに違ひない。斯の如き尊い榮譽は、今の世界の最强盛の國家でも迚も到り得ないところであらう。米國の「フイリツピン」を待つや、「ヒ」人自ら議會を組織せしめ、その自治を許し、華盛頓國會に對しても亦菲人議員の選出派遣を許し、然も米國は毎年「フイリツピン」の進貢を求めない許りか、却て「フイリツピン」に對し多額の補助金を支出し、道路を修築し教育を興辦して居る。仁慈寛厚斯の如く、優待至れり盡せりと云ふべきである。然も「フイリツピン」人は、今尙ほ米國に歸化するを以て榮とせず、日日獨立を要求すると言つた狀態にある。又印度の「ネパール」國の如き、「ネパール」民族は「廓爾額」と呼んで居るが、この民族は頗る勇敢にして戰をよくする。英國は印度を征服したけれども、今尙廓爾額人を恐れて居る。で之を非常に優待し、恰度宋朝が金人を恐れて常に金を送つて居たのと同樣年年彼に金を送つて居る。ただその間、宋朝が金人に送つた金は進貢と云ひ、英國の廓爾額に送る金は或は補助金と云ふ相違があるに過ぎない。然し乍ら、この廓爾額人も亦中國に對しては民國元年に至る迄尙ほ進貢して來たもので、之に因ても中國四隣の小民族が今尙中國を羨慕つつあることが判からうと云ふものだ。十餘年前、余は暹羅外交部に於て外交次長と東亞問題に就いて談話したことがあるが、かの外交次長は、若しも將來中國がよく革命を成就し富國强民と變

じたならば、我暹羅も亦中國に復歸し中國の一行省となり度きものと語つた。余の彼との談話の地が暹羅政府の公署であり、彼亦その外交次長である以上、彼のこの話は、單に彼の個人的意見と言ふ許りではなく、暹羅國人全體の意見を代表するものと見て差支ない。之に依ても暹羅が、その頃尙ほ如何に中國を尊重して居たかが判かるであらう。その後十數年來、暹羅は亞細亞の獨立國となり、各國間の苛酷なる條約はすべて修正せられ、國家的地位も亦高まつて來たので、今後は恐らく再び中國に復歸することを望まないであらうけれども。更に一段と興味ある故事も諸君にお話しすることが出來る。歐洲戰爭の最も劇烈なりし頃、余は廣東に護法政府を設立して居た當時の話であるが、或日一英國領事が大元帥府に至り余に面會して余と南方政府の協商國加入及びその對歐洲出兵問題に就き商量したことがあつたが、余は英國領事に向ひ何が爲に出兵するのであるかと理由を反問したところ、彼は貴國に請ふて獨國を打たんがためである、中國の領土を侵略して青島を占領した獨國を打つて領土を回收すべきためであると答へたので、余は、青島は廣州を去ること甚だ遠く廣州に最も近きところには香港があり、稍遠きに緬甸「ブータン」、「ネパール」があるが、これ等諸地方は曾て何處の國の領土であつたらうか、現に貴國はその上西藏をも取らんとしつつあるではないか。我中國は刻下のところ、領土を恢復する力がないから如何

とも致方ないが、若し力さへあらば、恐らく先づ英國の占領せる領土を回收するであらう。緬甸に至つては青島よりも大、西藏は青島に比して更に大である。我等にしてもし領土を回收せんとするならば、まさに先づ大なる地方から始めるであらうと、說いたものである。彼は余の反駁を受け怒りを抑へることが出來ないで云ふには、自分のこの地に來りしは公事を語らんがためにあらざりしやと。そこで余も直に答へて、余も亦公事を談ずるにあらずやと。兩々相對して下らず。暫くあつて余は再び彼に向つて、我等の文明は貴國などに比すれば進步すること二千餘年、我等は現に貴國などの前にあつて、あなた方の追從して來るのを待つてゐるのである。我等は後へ退くことも出來ず、亦貴方をして我々を引卸させる譯にもゆかぬ。我等は二千餘年前既に帝國主義を棄て平和を主張したため、今や中國人の思想は完全にこの目的に到達してゐる。あなた方が現に標榜する戰爭の目的なるものも亦、平和を主張するものであつて、我等の固より双手を擧げて贊成するところである。併し乍ら、實際上あなた方はまだ戰ひを說いて和を說かない。專ら强權を說いて公理を語らない。余はあなた方の專ら强權を說く行爲は誠に野蠻極まるものと思ふ。故に戰ふことは之を諸君に讓つて我等は參加せず、諸君が戰ひ厭きるを待つて、將來或は眞に平和を講ずるの日に至らば、我等は初めて諸君の一方に參加して共に世界の平和を求むるために協力を惜

まないであらう。且つ余が中國の出兵參加に反對するには一つの最大の理由があるのである。それは我等が、中國も亦諸君のやうに、强權を說き公理を說かざる强國となることを願はないからである。若し果して貴下の主張に隨つて、中國が協商國側に加入したならば、諸君は、中國に軍人を派し、兵を練り、諸君の經驗に富む軍官と精銳なる武器とを補充することに依て、六ヶ月內に必ず三十萬乃至五十萬の精兵を得ることが出來、之を歐洲に送つて戰場に立たしめ獨國を打敗ることが出來るであらう、その結果は必ずやよくないからだと。すると英國領事は、何故よくないかと質問したから余は、諸君は今日迄幾千萬の兵を用ひ數年の時を費しても獨國を打敗つてゐない、そこへただ數十萬の中國兵が加入したと云ふのみで獨國を打敗ることが出來たならば、更に之に依て中國の尙武の精神を振起することが出來、この幾十萬の兵を根本として之を幾百萬の精兵に擴張することが出來ることとなり、その曉には諸君にとつて非常に不利となるであらう、現に日本は諸君側に參加し旣に世界列强の一となり、彼等の武力は亞細亞に覇を稱し、彼等の帝國主義は列强と同樣で諸君の非常に恐るるところである。而も日本の人口及び富源に至つては遙かに中國に及ばず、若し果して餘の本日說きし方法に依り、往中國が諸君の一方に參加したならば、中國は十年ならずして日本のやうになることが出來るであらう。中國のこの多數人口と領土とを

以てせば少くとも十個の日本となることが出來るであらう。そのときになつては、諸君全世界の强盛を以てするも、恐らく中國人を打倒するに足りないであらう。我等は旣に諸君よりも二千餘年も進步してゐるがために、戰を語るが如き野蠻な風習を離脫して現在に至り、纔かに眞の平和思想を構成した。余は中國が永久に和平の道德を保守せんことを希望する。故に今次大戰に參加するを願はないのであると說いた。その英國領事はつい半時間前まで盛に我に武を用ひんことを求めたるに拘はらず、この話を聽いてすつかり感服し、若しも自分が中國人であつたならば必ず貴下の思想と相同じかるべしと語つたことである。

諸君は革命なるものは、元來流血の悲慘事であることを知つてゐるであらう。湯武革命の如きは、一般に皆彼等が天に順ひ人に應じたと說くけれども、當時用兵の情況を說けば、矢張り彼等も曾て血流漂杵の悲慘事を經過したのである。滿淸を覆滅した我等の辛亥革命は何れ程の血を流したであらうか。流血の多からざりし原因は、卽ち中國人が平和を愛する、平和を愛すると言ふことが中國人の一大道德であつたからだ。中國人こそ、世界で最も平和を愛する人間である。余は從前常に世界の人々に我中國に見習ふべきことを勸說して來たものである。今露國の「スラブ」民族も亦平和を主張するやうになつたが、これ卽ち「スラブ」人が我中國人に見習つたのである。

故に露國一億五千萬人は、今日では我等と合作せんとしつゝある。我等中國四億の民は單に大なる平和民族である許りか、又實に大なる文明の民族である。近來歐洲に盛んに行はれつゝある新文化及び說かるる無政府主義及び共產主義は、何れも我中國幾千年以前の舊物である。例へば黃老の政治學說の如きは卽ち無政府主義である。又列子說くところの「華胥氏之國其人無君長無法律自然而已」は無政府主義ではないか。我中國の新靑年は未だ曾て中國の舊學說を仔細に考究することなくして、この種學說を以て、世界の最新學說なるが如く思惟してゐるが、それは歐洲に於てこそ最新であつても、中國には幾千年前にあつたものなることを知らないからのことだ。從前露國の行ふところも、その實純粹の共產主義ではなく、「マルクス」主義である。「マルクス」主義は眞の共產主義でない。「ブルードン」、「バクーニン」の主張するところこそ眞の共產主義である。共產主義は外國に於ては今尙議論時代であつて、實行時代には入つてゐない。而も中國では旣に洪秀全時代に實行せられた。洪秀全の行つた經濟制度は共產の事實であつて言論でない。歐洲の我中國に凌駕する所以のものは政治哲學ではなくて物質文明である。彼等は近代物質文明の顯著なる發達に依り、人生の日用衣食住行關係の種々なる設備は、非常に便利となり非常に迅速となつた。又陸海軍關係の種々なる武器毒藥も非常に完全となり猛烈となつた。これ等凡ゆる新設備と新武

器は、科學の發達に依て齎らされたものである。この種科學は、十七八世紀「ベーコン」、「ニユートン」等の大學者の主張するところの、觀察と實體とを以て萬事萬物を研究する學問である。斯樣に歐洲の科學の發達及び物質文明の進步に至つては、近々二百餘年來のことに過ぎず、數百年以前に於ては歐洲は未だ中國に及びばなかつたものである。我等が今歐洲に學ばんとする點は、中國に無きものを學ばんとするにあり、中國に無きものは、科學であつて政治哲學ではない政治哲學の眞諦に至つては、歐洲人は猶これを中國に求めなければならぬ。諸君も知つてゐる通り、世界に於て最も學問の發達した國と言へば獨逸であるが、その獨逸の學問を研究する人でも、やはり中國の哲學を研究しなければならぬ、甚しきに至つては印度の佛理を研究し、彼等の科學に基く偏見を補はんとするの狀態である。世界主義は歐洲に於ては近世の所產にかゝるが、中國に於ては二千餘年の夙の昔說かれたものである。歐洲人には我等固有の文明を今尙ほ見出すことが出來ず、彼等は單に政治哲學的世界文明を說くに過ぎない。我等四億人は古來幾多の發明をした。卽ち世界的大道德に就いて言へば、我等四億の民も亦平和を酷愛する。ただ然し我等は民族主義を失つたがために、固有の道德文明もすべて表現する能はず現在では寧ろ退步さへもしつゝある。歐洲人の現に說くところの世界主義に至つては、その實强權あつて公理なきの主義である。英語で

言ふところの能力は即ち彼等の公理である。即ち戰つて勝つものを以て道理ありとする。中國人の心理は從來戰つて勝つことを以て正しとはせず、戰を說くを野蠻とした。この戰を說かざる道德こそ、世界主義の眞の精神であらねばならぬ。我等はこの精神を保守し、この精神を擴充せんがためには、何を以て基礎とならざるべからざるか。民族主義を以て基礎としなければならぬ。露國の一億五千萬人を如きは、歐洲世界主義の基礎であり、中國四億の人民は亞細亞世界主義の基礎である。基礎あつて然る後始めて能く擴充し得る。故に我等にして以後世界主義を說かんとせば、必ず先づ民族主義を說かねばならぬ。所謂天下を平にせんと欲するものは先づその國を治むである。從前に失つたところの民族主義を新しく恢復し、更に之を發揚擴大せねばならぬ。然る後再び世界主義を談ずる、乃ち之が實際的である。

第五講　民族主義恢復策如何

今日は、如何なる方法を以て民族主義を恢復すべきかと言ふ問題に就いて語りたい。前に述べたる如く中國が現在の地位に迄退化したる原因は、民族的精神を失つたからである。故に我民族は他民族のために征服せられて二百餘年間統治されて來た。從前滿洲人の奴隷となり今は各國人

の奴隷となつた。そして各國人の奴隷として受くる苦痛は從前よりも猶更に甚しいのである。この儘で、何等適當な方法を以て民族主義を恢復せずに行つたならば、中國の將來は、國が亡びるのみならず、種族迄も滅びて了ふであらう。故に我等は中國を救はんがため先づ一個の完全なる方法を考へて民族主義を恢復しなければならぬ。

今日話さうとする民族主義恢復の方法に二種ある。第一は四億の人民をして我等の現地位如何を知らしむることである。我等は今生死關頭にある。この生死關頭にあつて、須く禍を避けて福を求め死を避けて生を求むべきである。如何にしてよく禍を避けて福を求め死を避けて生を求めんとするか。須くこの點をはつきり知つて置かねばならぬ。さうすることに依て自然所期の目的を達することが出來るであらう。諸君は「知るは難く行ふは易し」の道理を知らねばならぬ。之は余の學說を參考にすればよく判ることである。中國は從前國の亡びんとするを知らなかつたがために國家が亡びたのであつて、若し豫知することが出來てゐたならば、或は亡びなかつたであらう。古人說ふ「敵國外患なき國は恒に亡ぶ」と又說ふ「難多くして邦を興すことを得」と。この二句は完全に心理作用に基く。例へば前者の所謂敵國外患なしとは、自己の心理上に外患なきを覺えて自ら非常に安全なりと考へることであり、世界中に於ける最强大なる國家が外國は敢

て來り侵さないから國防を講ずる要なしとすることである。故に一度び外患に遇へば卽ち國が亡びるのである。次に難多くして邦を興すことを得と言ふのも亦、自ら國家の多難なるを知つて發奮して雄をなすと言ふことで、これ亦完全に心理作用である。從前四回に亘つて說いたところの狀態に鑑み、我等にして民族主義を恢復せんとしたならば、卽ち現在の中國が多難なる境地にあり不快極まる時代にあることを自覺せねばならぬ。かくてこそ、旣に失はれたる民族主義の恢復を圖ることが出來るであらう。若し心にこれを知らずして、恢復を圖らんとしても、それは永遠に望なかるべく、中國民族は久しからずして滅亡するであらう。前四回に亘つて說きたる情形を統結すれば、我民族は如何なる禍害を受けてゐるか、受くるところの禍害は何處より來りたるか、卽ち列强より來れるものであると言ふことを知り得るであらう。禍害に就いて詳細に言へば、一は政治の壓迫、二は經濟力の壓迫、三は列强人口の壓迫を受けたのである。この三つの外來の大禍は旣に我等の頭上に臨み我民族の現地位は甚しく危險に瀕しつゝある。例へば第一の禍害に就いて言へば、政治力は一朝にして他の國家を滅ぼすことが出來る。今中國は列强の政治力の壓迫を受けたならば何時でも亡びる今日有つて明日の生死を知らない危機にある。

政治力を以て他國を滅ぼすには兩樣の手段がある。一つは兵力で他は外交である。何うして兵

533036

力で一朝にして國を亡ぼすと云ふのであるか。歷史を以て證明すれば、從前宋朝は如何にして亡びたか。崖門の一戰に元朝に亡ぼされたではなかつたか。又明朝は如何にして亡びたか。楊州の一戰に淸朝に滅ぼされたからでなかつたか。之を外國に就いて見るも、「ウオーターロー」の一戰に「ナポレオン」第一世の帝國は亡び、「スダン」の一戰に「ナポレオン」第三世の帝國は亡びたのである。斯くの如く唯の一戰にて國は亡びなければならぬ。中國は何時でも亡ぼすことが出來る。我等の陸海軍と各險要の地には何等國防の準備はないから、外國は隨時衝入し得、隨時中國を亡ぼし得る。最も近距離に在つて我中國を亡ぼし得るものは日本である。彼等の陸軍は常時一百萬、戰時には三百萬迄增加することが出來る。海軍も亦頗る强大にして殆ど英米と雄を爭はんとしてゐる。「ワシントン」會議でその戰鬪艦は三十萬噸に制限せられたが、その他の巡洋艦潛水艇驅逐艦の如き大戰艦も何れも極めて堅固で戰鬪力亦頗る大である。例へば今回白鵝潭に派遣せられた日本の兩驅逐艦の如き、中國には之に抵抗し得べき大なる戰鬪力を有する船はないが、此種驅逐艦の如き日本には百幾十隻もある。日本にして假りにこの軍艦を以て我等と戰ふならば、何時でも我等の國防を破り、我等の死命を制することが出來るであらう。加之沿海の各險要の地には國防を鞏固にし得べき大なる砲臺もないから、東隣の日本は彼等の陸海軍を隨時長驅直入する

ことが出來る。唯日本は時機至らざるため、暫く動かないのであらうが、若し果して動かば、何時でも中國を亡ぼすことが出來るであらう。そして日本の動員の日より中國を擊破するの日迄十日とはかゝらないであらう。故に若し日本と絶交したならば、日本は十日以內に中國を亡ぼすことが出來るのである。再び日本より更に太平洋東岸を望めば、最强の米國がある。從前米國海軍は日本の三倍以上もあつたが、近來華盛頓會議に束縛せられ戰鬪艦は五十萬噸に減少した。その他潛水艇、驅逐艦等種々の新軍艦も皆日本より多い。陸軍に至つては、米國の敎育は非常に發達して居り、小學敎育は强制制度であつて、全國の男女はすべて學校に入つて讀書せねばならぬことになつてゐる。そして國民の多數は中學敎育及び大學敎育を受けてゐるが、彼等は中學大學在學中何れも軍事敎育を受ける。斯樣な譯であるから、米國政府は隨時多數の兵を增加することが出來る。かの歐洲戰爭に參加する際などは一年足らずの間に、二百萬の兵を出征せしむることが出來たのである。故に米國は平時の常備軍は多くはないが、軍隊の潛勢力は非常に大きく、隨時數百萬の兵を出すことが出來る。故に若し假りに中米絶交するやうなことがあれば、米國は動員の日から中國を攻擊する日迄僅か一ヶ月を要するのみ。故に中米絶交すれば一ヶ月の後には中國を亡ぼすことが出來るであらう。再び米國より更に東を望めば、歐洲大陸と大西洋との間に位するも

の、卽ち「イングランド」の三島がある。從前英國は海上の覇王と號稱し、彼等の海軍力は世界最强であつた。これ亦華盛頓會議にその戰鬪艦を五十萬噸に制限せられた。けれどもその他普通巡洋艦驅逐艦潛水艇に至つては米國以上に多數である。英國より中國に至るには四五十日を要するに過ぎず、且つ中國に於て既に根據地を有する。かの香港の如きは經營既に幾十年、地甚だ小なりと雖、商務頗るよく發達し、この地勢は軍事上中國南部數省の咽喉を掌握し、訓練せられた陸軍あり海軍もある。香港の陸海軍を以て來攻しても、我等は一時に亡國するやうなことはないが、之に抵抗すべき力はない。香港の外、最も近きものに印度、濠洲があり、これ等殖民地の陸海軍を以て一齊に攻擊したならば、動員の日より二ヶ月に過ぎずして全部中國に至り得る。故に兩國にして若し假りに國交斷絶するが如きことあらんか、多くとも二ヶ月以內には英國は中國を亡ぼすことが出來るであらう。更に歐洲大陸を望めば、現に最强の佛國がある。彼等は陸軍は世界最强である。目下二三千の飛行機を有つて居るが、戰時には尙增加出來る。彼等も亦中國に最も近き地に安南の根據地を有し、且つ安南から鐵道を數設して雲南省城に通じて居る。假りに中佛にして絶交することあらんか、佛國兵も亦四五十日にして中國を來攻し得るであらう。故に佛國も亦同樣に多くて二ヶ月足らずの間に中國を亡ぼすことが出來るであらう。斯樣に說いて來ると

單に軍事上の壓迫のみに付て云ふも、世界の何れの强國でも中國を亡ぼすことが出來る譯だ。而も何が故に今日迄よく存在することが出來たのか。今日迄中國が存在し得た理由は、中國自身に力があり、抵抗することが出來たからではなく、列强が皆それぞれ中國を亡ぼさんとし、彼此來り窺つて相讓らず、各國の中國に於ける勢力が平衡狀態を保つて居たことにある。これ中國が今後も尙ほ存在し得る所以でもある。中國の愚かなる人々は、列强は中國の利權に對し互に嫉視反目してゐる、然も列國の中國に在る勢力は大體平均してゐて統一することが出來ない、だからこの儘で行けば中國は自分から抵抗等しなくとも國は亡びないであらうと考へて居る。斯の如く專ら他人に依つて自己に依らざるものゝ如きは、豈天を望んで占ひをしても當てにはならない。斯樣な愚かしい考へを持つてゐるやうでは誠に困つたものである。列强が中國を亡ぼさんとする意志には依然變りはない。ただ列强は兵力を以て中國を亡ぼさんとすれば、恐らく中國問題のため、再び第二の歐洲大戰を發生し、その結果列强は共に敗れ俱に傷き自身に何等大なる利益もない。外國の政治家は執れも此間の事情を充分心得てゐるため、兵力を用ひないと言ふだけの話だ。卽ち列强にして兵力を用ひて中國を亡ぼさんとすれば彼此の間に何うしても戰爭を免るゝことが出來ないのだ。其他權利上の平均不平均の一切の問題は

或はよく衝突を免れ得るかも知れぬ。然しそれもその統治せらるゝの時期に至らば、所詮衝突を免るゝことは出來ないであらう。既に衝突免るべからざるものとせば、衝突することは、彼等自身にとつては非常な不利益であらねばならない。列强はこの邊の利害をすつかり見拔いてゐる。だから、現に彼等は戰爭を主張せず、軍備縮少を主張して、日本海軍は戰鬪艦三十萬噸、英米兩國海軍は各五十萬噸と言つた具合に制限したのである。この會議は表面上は軍備縮少問題に在つたが、その實中國問題が主題であり、中國の利權を分割せんがためには如何なる方法に依らば、彼此の衝突を免れ得べきやと言ふことを研究したのであつた。

先程お話した通り、政治力を以て他國を亡ぼすには元來兩樣の手段が有り、一は兵力他は外交である。兵力は銃砲を用ひることである。彼等が銃砲を用ふれば、我等も亦抵抗の必要なることが判かる。けれども外交手段を用ふる場合は、單に一枚の紙一本の筆が有ればよい。この一枚の紙と一本の筆とを以て中國を亡ぼすのであるから、我等には抵抗しやうにもする術も分らない、華盛頓會議には中國からも代表を派遣し、議するところ中國の事に關する限り、表面上はすべて中國の利益を謀るためと說かれたものであつたが、華盛頓會議終了後、間もなく各國新聞に共管說が發表せられた。この事實を何んと見る。この共管說は日一日と步を進め各國の熟慮研究の結

果、必ずや最も完全なる方法を以て中國を亡ぼすに至るであらう。彼等は以後陸軍を動かす必要もなく、海軍を出動せしむる要もない。たゞ一片の紙と一本の筆とを以て互に妥協して中國を亡ぼすこと出來るのである。假令陸軍を動かし軍艦を出動せしむるとするも、尙ほ中國を亡ぼすには十日乃至四五十日を要するのであるが、この妥協方法を以てすれば、たゞ各國外交官が一堂に會し、各々一個の「サイン」さへすれば、中國を亡すことが出來るのである。「サイン」する位は一朝を要するに過ぎない。故に妥協的方法を以てすれば中國を亡ぼすには一朝を要するのみ。一朝にして他國を滅ぼすことが出來るのである。從前かうした先例がないではない。例へば從前の波蘭の如きは露、獨、墺三國に分割せられたものであつたが、その分割當時の情形に就いて見るに、彼此一朝の協商に依り妥協成立と共に卽ち亡びたのであつた。この先例に照せば、若し假りに英、佛、米、日の諸强國が一朝妥協することありとせんか、中國も亦滅亡しなければならないであらう。故に政治力が他國を亡ぼす情態に付て云へは、中國の現地位は甚だ危險なりと云はねばならない。

第二の禍害に就いて云へば、中國の現に受けつゝある經濟壓迫の害毒は、余の前に述べたる如く、年々外國人に依て十二億元の金錢を奪ひ去られつゝあることである。この種奪ひ去らるる

金錢は、尙ほ日一日と增加しつつあり、海關の十年前の輸出入貨物を比較すれば二億元の輸入超過であつたものが、現在では五億元に達し十年毎に二倍半の增加である。この割合で計算すると十年後には我等は年年三十億元の金錢を外國人に奪ひ去らるることゝなるであらう。若しこの三十億元を我等四億人に於て分擔するとせば、毎年一人に付七元五角を負擔せねばならぬ。我等は毎年一人に付て七元五角を負擔し外國人に與へることゝなる。換言すれば、我等は毎年一人に付七元五角宛の人頭稅を外國に納むべきこととなるのだ。況んや四億の中二億は女子であつて、現在の女子の能力狀況から言へば、女子がこの七元五角の人頭稅を負擔することはまづ不可能であることが明白であつて見れば、結局男子に於て一倍だけ餘計に負擔せねばならぬこととなり、毎年男子一人の負擔額は十五元に達するわけである。又男子の中にも三種あつて、一つは老弱のもの一つは幼稚のもので、この二種のものは男子ではあるが、利益を分配して貰ふ方で儲けることは出來ず、從て又この負擔を望むことは出來ない。十五元の人頭稅を負擔すべき男子の中、これ等負擔に堪えざる三分の二のものを除けば、負擔し得るものは完全に中年の働きのある男子のみとなり、この中年の男子は老幼各十五元の負擔額をも同時に負擔するものとせば、一中年の働きある男子は、年年一人宛四十五元の人頭稅を負擔すべきこととなる。考へても見るがいゝ我等の一中年の

働きある男子が、四十五元の人頭税を負擔して外國へ與へなければならぬとは、何んと恐るべきではないか。その上この人頭税は、增加して止まないところのものであつて見れば、猶更ではないか。故に余の見るところでは、中國人が何時迄も覺らずしてこの儘日を送つて行けば、外國の政治家等が毎日睡つて居ても十年も經たない裡に國が亡びるであらう。現在でさへも民窮し財盡きてゐるものを、更に十年も經てば、人民の困窮は想像に餘りあり、その負擔額は現在に比較して二倍半にも增加するであらう。これでも諸君は中國は亡びないと想ふか。

列强は今次の歐洲大戰を經過したから或は再び戰爭を想はず、暴動を想はず、以後は靜を好んで動を惡み、我等も之に依つて軍事的壓迫は免れ得るかも知れない。けれども外交的壓迫は免れることは出來ない。よしんば外交的壓迫をも僥倖にして免れ得べしとするも、斯の如き大なる經濟的壓迫に依り日日侵入せられ日日吸收せられ、然も我等は猶惰眠を貪りつつある。如何にして滅亡を免れ得るであらうか。

更に第三の禍害に就いて言へば、我等中國の人口は既往一百年間餘り增加しなかつた、若し以後一百年も何等人口增加の方法を講じなかつたならば、多きを加へ難きは當然である。地球上を見渡すところ、あの米國は十倍に、露國は四倍に、英日兩國は三倍に、獨國も二倍半に增加し、

最も少ない佛國ですら尙ほ四分の一の增加を示してゐる。若し彼等にして逐日增加し我等が却つて依然舊の如く、甚しきに至つては或は減少するものとせば、我國の歷史を藉りて考察するに、漢族の大を以てしたからこそ先住の土人であつた苗猺獠獞等の民族が滅亡したやうに、我民族も彼等の人口增加に壓迫せられて久しからずして滅亡すべきは、又豫見し得べき顯然たる事實である。故に中國は今や政治的壓迫を受けて朝に夕を測るべからず、經濟的壓迫を受けて十年經つか經たぬかに亡國するであらう。そして又人口增加の問題に就いても中國の將來亦甚だ危險なりと言はねばならぬ。故に中國は外國の政治經濟及び人口の壓迫を受けて居り、この三つつの大禍は既に我等の頭上に臨んでゐるのである。我等は自ら先づ知るを要する。自らこの三大禍が頭上にあるを知つたならば、到る處に之を宣傳し、國人をして亡國の慘禍は、天地の間に逃れ難き中國の持つ運命なるを知らしめねばならぬ。人々がすべて大禍の頭上に臨めるを知るに至らば、將に如何にすべきか。俗話に言ふ、困獸猶ほ鬪ふと。その逃免すべきなきのとき逼るや、當に發奮して敵人と死命を賭して鬪かはねばならぬ。大禍は既に我等の頭上に臨みつつあり。我等よく鬪ひ得るや、否や。必ず鬪ひ得る。然し乍らよく鬪はんがためには先づ自己の死期將に至れるを知らざるべからず。死期將に至らんとするを知つてこそ、よく奮鬪することが出來るのである。故に我等が民

族主義を提唱するには、先づ四億の人々をして皆自己の死期近きを知らしめねばならぬ。死期將に至らんとするを知るや困獸すら尙且つ鬪はんとす。我等死に瀕する民族は鬪ふべきか、鬪を要せざるか。諸君は學生であり軍人であり政治家であつて、すべて先知先覺者であるから率先して、四億の人々をして、我民族の今極めて危險なるを知らしめねばならぬ。若し果して四億の人々が悉く危險を知るならば、我等の民族主義の恢復は決して困難ではないであらう。

外國人は常に中國人は一片の散沙であると云ふ。成る程、中國人は國家觀念に對してはもとも と一片の散沙であり、もともと民族團體もない。けれども民族團體の外に別の團體はないのであらうか。余が從前說けるが如く、中國には非常に堅固な家族及び宗族の團體があつて、中國人の家族及び宗族に對する觀念は眞に深いものである。例へば中國人は路上で遇つて話をするとき、必ず「請問貴姓大名」とやる。そしてお互に同宗なることが判れば、同姓の伯叔兄弟同樣非常に親密になる。この善良なる觀念を推廣すれば、宗族主義から國家主義に擴大することが出來るであらう。我等の失へる民族主義を恢復せんとせば、團體がなければならない、非常に大きい團體がなければならない。我等が若し大團體を結成しやうとするならば、卽ち先づ基礎の小さいものを互に聯合することに依つて容易に成功する。我中國が利用し得る小基礎は、卽ち宗族團體である。この

外尙ほ家鄕の基礎もある。中國人の家鄕觀念も亦非常に深いもので、同省同縣同鄕村の人の如きは一般に特に聯絡し易い。余の見るところでは、若しこの二つの善良なる觀念を以て基礎とするならば、全國人を悉く聯絡することは極めて容易に出來ると思はれる。この目的を達せんが爲めには先づ諸君が之を行はねばならぬ。中國人が斯樣にして民族主義を恢復することは、外國人に比較して遙に容易である。何故ならば、外國人は個人を以て單位とし、彼等の法律は父子、兄弟、姉妹夫婦各個人の權利に對しそれぞれ單獨に之を保護してゐる。そしてその訴訟の際は、家族の情態如何を問はずして、たゞ個人の曲直如何のみを問ふと言ふ有樣で、個人から直接國家であつて、個人と國家との中間に非常に堅固な普遍的な中間社會がない。これ外國の國民と國家との構成關係が中國に如かないと言ふ所以である。中國では、個人の外に家族に重きを置くため、何事があつても、卽ち之を家長に問ふことを要することとなつてゐる。この組織に對する批評は贊否相半するが、余の見るところでは、中國の國民と國家との構成關係は、先づ家族があつて宗族に至り然る後國族と云つたやうに、この組織は一級一級と大きくなり、條道があつて紊れず大小構成關係の內部は實によく出來てゐると思ふ。若し宗族を以て單位とし、その中の組織を改良し、再び聯合して國族を合成するならば、外國が個人を以て單位とせるに比較し、當然遙に容易に聯絡し

得るであらう。之に反し若しも個人を單位とすれば、一國の中少くも幾千萬の單位があり、中國の如きは四億の單位があることとなり、かかる多數の單位を皆聯絡せんとするならば、自然困難であらう。若し宗族を以て單位とすれば、中國人の姓は普通百家姓と云はれてゐるが、何しろ年代が非常に古いので一つの姓の中でも、先祖は或は違つてゐるかも知れない、之に由て出來上つてゐる宗族は或は一百族にも足らず、何んなに多くても精々四百族に過ぎないであらう。各宗族中にはすべて連帶關係があつて、例へば各姓が家譜を修する場合の如き、常に祖宗幾十代より幾百代前に遡り幾千年以前を追求するが、先祖の姓氏は過半は別姓に改められて居るものであるから、最古の姓を考求すれば甚だ少ないものであらう。如斯き宗族中の源を窮め流を極むる舊い習慣は中國に在ること幾千年、牢として破ることが出來ない。外國人が見たならば或は無用なことだと思ふかも知れぬ。けれども、この敬宗收族の觀念は、中國人の腦裡に泌み込んで幾千年にもなる。國が亡びても、彼等は一向お構ひなしであり得る。而して人は誰れでも皇帝たり得ると考へ、誰れが皇帝にならうと同じ樣に納稅する。そう云つた彼等ではあるが、一旦種族が滅亡すると言ふことにでもなれば、彼等は祖宗の祭を斷絶することを恐れ、生命を賭しても奮鬪する。閩粵地方には各姓間の爭鬪が多いが、之は多くは一姓が他姓に對し、名分上又は私人上の少しの凌辱侵占

等のことで、無數の金錢と生命との犧牲を惜まず姓の爲めに氣を吐かんとするに起因する。事は野蠻と雖も、その義は買つてやらねばならぬ。だから若し彼等に、外國の目前の種々なる壓迫が久しからずして民族を亡ぼすに至るべく、民族亡びて家族亦存在しないと云ふこと、例へば、中國先住の土人苗猺等の種族は今日に至つては祖宗の祭も夙に絶えて居るが、若し我等にして眼光を大にして各宗族の力を合して一個の國族となし外國に抵抗するにあらざれば、苗猺等の民族が今日祖宗を祭らざると同樣、我等も亦他日祖宗を祭ることが出來なくなるであらうことを知らしむることが出來たならば、一面各宗族間の爭ひを化して外族に對する爭ひとなし、國內の野蠻なる各姓間を爭鬪を消滅せしめ得ると共に、他面彼等が宗族を滅亡を恐るゝがため結合を容易且つ堅固ならしめ、非常に有力なる國族を造ることが出來るであらう。宗族を以て小基礎とし國族に擴大するの工夫は、例へば、中國現有の四百族は恰も四百人に對する工夫と同樣で、一姓每にその在來の宗族的組織を用ひ、同宗族の名義を以て先づ一鄉一縣の聯絡から始め、擴大して一省一國に至らしむることゝすれば、各姓は一個の非常に大なる團體となり得る。例へば姓陳なる人は、その在來の組織に依て、一鄉一縣一省の中に住する專ら陳姓の人を聯絡したならば、兩三年足らずの中に陳姓の人の非常に大なる團體が出來るであらう。斯くして各姓の大團體が出來たな

れば、關係各姓を相互に聯合せしめ多數の極大團體を造るのである。更に各姓の團體をして大禍の頭上に臨み死期將に至らんとするを知らしむるならば、悉く結合して一つの極大なる中華民國の國族團體とすることが出來るであらう。國族團體さへあれば外患恐るゝに足らず、邦の興る能はざるを恐るゝには及ばない。尙書にも堯時代に關し「克明俊德、以親九族、九族旣睦、平章百姓、百姓昭明、協和萬邦、黎民於變雍」とあり、堯帝の治平の工夫も亦家族より着手し、逐次百姓に擴大し、萬邦協和し、黎民を雍んずると言ふにあつたらしい。之れ實に宗族を團結し國族を造成し、以て邦を興し外敵を禦ぐの好模範ではないか。若し果して四百の宗族團體を基礎とせず、四億人を以て工夫するとせば、知らず一片の散沙を如何にして聯絡せんとするか。從前日本は、藩閥諸侯の關係を以て聯絡して大和民族を造つたが、當時日本が藩閥諸侯の關係を用ひんとした原因は、余が中國民族の聯成に宗族關係を用ひんことを主張するのとその軌を一つにする。

諸君にして、若し自己が披壓迫民族であり、己に忍受すべからざる時代に至れることを知つたならば、各姓の宗族團體を先づ聯合し、更にこの宗族團體を結合して、一つの民族的大團體を造らなければならぬ。我等四億人に民族的大團體があつたならば、外國人に抵抗するにも自ら積極的辨法がある筈である。現在この辨法のない原因は團體がないからのことだ。團體さへあれば、

外國人に抵抗する位のことは左程難しいことではない。例へば印度の如きは英國の壓迫を受け英國人に統治せられてゐるが、印度人は政治的壓迫に對しては辨法がないが、經濟的壓迫に對しては、「ガンジー」の主張する「不合作」の方法がある。「不合作」とは何かと云へば、英國人が需要するものを印度人は供給せず、英國人の供給するところのものは印度人は需要しないと云ふ譯で、恰度英國人が勞働者を需要するとき、印度人は彼等と共に働かず、英國人が印度に許多の洋貨を供給しても、印度人は彼等の洋貨を用ひず專ら自製の土貨を用ひると言つたやうなものだ。「ガンヂー」のこの主義が始めて發表せられた頃は、英國人は余り之を重要視せず、之を取締らうともしなかつたが、永い間に、段々と多數の不合作團體が出現して、英國の經濟方面は非常なる影響を受けた。故に英國政府は「ガンヂー」を捕へ獄に下したものである。印度が斯くもよく不合作の效果を擧げ得た原因を推究するに、全國民がよく之を實行し得たるに因る。印度は國旣に亡びたるにも拘はらず尙ほ且つよく不合作を實行し得たのである。我等中國は今未だ亡びては居ない。だから、普通國民が何か事業を經營すると言ふことは仲々容易ではないが、外國人の仕事をせず、洋奴とならず、外來の洋貨を用ひずして國貨を提唱し外國銀行の紙幣を用ひずして專ら中國政府の金を使ひ、經濟絕交を實行すると言ふことは、誰にでも極めて容易に出來ることであ

る。若しそれ人口增加の問題に至つては、その解決は更に容易である。中國の人口は從來非常に多く物產亦頗る豐富である。然も外國の壓迫を受けざるべからざりし病源は、一般人民が知らずして醉生夢死せしにある。眞に若し國民全體が印度人同樣の不合作を爲し、又宗族團體を基礎とし、一つの大民族團體を聯成することが出來たならば、如何に外國が兵力經濟及び人口を以て壓迫し來るも、何等我等の恐るゝところでない。故に中國の危急存亡を救ふ根本的方法として、先づ團體を造り三四百の宗族團體を以て國家を守つたならば、方法は幾らでもある。そして何國に對しても抵抗することが出來る。外國に抵抗するには次の二方法がある。

一つは積極的で、この方法は卽ち民族精神を振起し民權民生の解決を求め外國に向つて奮鬪することであり、二は消極的方法であつて卽ち不合作である。不合作は消極的の抵制ではあるが、外國の帝國主義の作用を減少せしめ、以て民族的地位を維持し滅亡を免がるゝことが出來る。

第六講　民族地位恢復策如何＝結論

諸君、本日は如何にして我民族地位を恢復すべきかの問題に就いて語りたいと思ふ。我等は我民族地位恢復策を研究するが爲には前數回に亘つて述べたところの、究竟するに我民族は現在如

何なる地位にありや、我民族と國家とは現在の世界に如何なる狀態の下に置かれたるや、を忘れてはならない。一般に思想の豐富なる人、所謂先知先覺者は、中國を以て半殖民地的地位にありとなしたが、余の前數次の研究に依れば、半殖民地どころではない。殖民地の狀態より云へば、例へば安南は佛國の殖民地であるが、既に半殖民地と云ふ以上、中國は完全なる殖民地たる安南などよりもその地位稍高きに似てゐるが如く思はれるが、結局中國の現地位は安南に比較して何うであらうか。余の研究に照せば、現在の中國は完全なる殖民地の地位にも猶ほ及ばない。完全なる殖民地の地位に比較して更に一段低い。だから余は一つの新名詞を創造して中國を呼んで次殖民地として置いたが、これ卽ち中國の現位である。之が種々なる理論は既に以前充分に徹底するやうに說いて置いたから、今日は再說しない。

昔中國は世界で何んな地位にゐたであらうか。中國は從前は强盛を極め非常に發達した文明を有し、世界第一等の强國であつて、現在の英米佛日の如き列强よりも、その處る地位は尙遙かに高かつた。當時中國は世界唯一の强國であつた。我等の祖宗は從前已にその地位に迄達してゐたのである。然も現在に至つては殖民地にも如かないと言ふ、一體何が故に從前そんなに迄高かつた地位が、今になつて一落千丈したのであるか。この最大の原因に就いては、この前已に述べて

置いた通り、我等が民族精神を失つたことに起因する。即ち民族主義を失つたがために、國家は日一日の退歩したのである。我等にして今我民族地位を恢復せんがためには、先づ民族精神を恢復することを要する。我等にして民族精神を恢復せんとするには二個の條件がなければならぬ。第一の條件は、我等が現在極めて危險な地位に屬することを知ることであり、第二の條件は、我等が既に非常に危險な地位にあることを知つた以上、中國固有の團體即ち家族團體宗族團體の如きものを善用し、聯合して一つの大國族團體を作らねばならぬことである。國族團體が結成せられ、四億人の大力量があり、共同して奮鬪したならば、我民族が現に如何なる地位にあらうとも、必ず恢復することが出來るであらう。故によく知ることゝ群を合することは民族主義恢復の方法であると言へる。諸君は先づこの方法を知つたならば、更に推廣して全國四億人に宣傳し、皆に之を知らしめねばならぬ、人々皆之を知つたならば、そこで曾て失はれた我等の民族精神を恢復することが出來るであらう。從前失はれた民族精神は恰度睡つてゐるやうなもので、今この民族精神を恢復せんとするならば、之を喚び醒さなければならない。眠が醒めたならば始めて民族主義を恢復することが出來る。民族主義にして恢復せられたならば、我等は一歩を進めて我民族的地位の恢復策に就いて研究することが出來るのである。

中國が曾て、能く強盛な地位に到達し得たのは、單に一個の原因に由るものではない。凡そ一國のよく強盛たり得る所以は、當初武力に依つて發展し、之に繼ぐに種々なる文化の發揚を以てし然る後成功すると云ふのが普通の階梯である。非常に善良な道德を有する國家にして始めて長治久安たるには、猶ほ道德問題が殘されて居る。けれども民族と國家の地位を長久に維持せんとすり得る。亞細亞大陸に於て古代最も強盛なりし民族は元朝の蒙古人に過ぐるものはない。蒙古人は東邊中國を滅し西邊又歐洲を征服した。之に比し、中國はその最も強盛なりし時代に於ても、國力は裏海の西岸以上に及ばず精々裏海の東邊迄であつた。中國はその最強盛時代に於てすら、一度も歐洲に達することは出來ず、從て殆ど全歐洲を併呑した元朝の時代は中國の最強盛時代よりも尙ほ遙かに強盛であつた譯だ。けれども元朝の地位は永く維持せられず、却て各代の、國力に於て元朝に比すべくもなかつた中國の方が、その國家的地位を各代共に長久たらしむることを得たのであるが、その原因を推究すれば、元朝の道德が、中國その他の各代道德の高尙なりしに及ばなかつたがためである。從前中國民族の道德は、外國民族の道德に比し遙かに高尙であつた。故に宋朝のとき一度は亡國し外來の蒙古人のものとなつたが、その後蒙古人はやはり中國人に同化せられた。明朝のとき再度亡國して滿洲のものとなつたが、後滿洲人も亦中國人に同化

せられた。これ我等中國の道德が高尙であつたがため、國家は亡びても、民族は依然よく存在することが出來、そして自己の民族が存在し得たのみならず、同時にその力を以て外來の民族を同化することが出來たのである。故に本を窮め源を極めて我等が今我民族的地位を恢復せんとするには、人民が聯合して一つの國族團體を造る外に、固有の舊道德を先づ恢復せねばならぬ。固有の道德あつて然る後始めて固有の民族的地位の恢復を圖ることが出來るのである。

中國固有の道德と言へば、中國は今も尙忘るゝ能はざるところのもの、第一に忠孝、次に仁愛、その次は信義、その次は和平である。これ等道德は今も尙常に說かれつゝあるものであるが、現在では外來民族の壓迫を受け新文化浸潤し、これ等新文化の勢力は、今や中國を橫行し、新文化さへあれば舊道德の如きはなくても可なりとなし、我等固有のものが果していゝか惡いか、若し良ければ當然之を保存し、惡いときに始めて之を棄つべきものであると言ふことを一向考へない。將に今中國は新舊潮流相衝突し、一般國民は何れとも、その適從するところがない狀態にある。余は數日前田舍へ行つたが、疲れたので一祠堂に參詣した序に奧まつた一室で休息した。そのとき部室の右側に一つの孝の字があり左側には有るべきところに字がない。余は必ず以前には忠と言ふ字があつたのであらうと考へた次第であつたが、斯うした事實を見たことは一度許りでは

なく、許多の祠堂又は家廟にも皆同樣見受けられた。たゞ數日前に見た孝の字は、特別に大きく左側の取り去られた痕跡が、まだまざまざと新しかつたので特に注意を惹いた迄である。この毀ち去つた行爲を推究するに、田舍の者が自分でしたのか、それとも泊り合せた我等の兵士達がやつた仕事か判らないが、余が從前多數の祠堂廟宇に、兵が駐屯したこともないのに忠の字が悉く毀ち去られてあつたのを見たことがあるから、恐らくこれなども田舍の者のした業であらう。之に由ても現在の一般人民の思想を見ることが出來ると思ふ。卽ち恐らく彼等は民國になつたから忠の字を說かなくてもいゝと考へて居るに違いない。從前の忠と云ふ字は、君主に對する所謂忠君であつて、今民國には君主がないから忠の字は使はなくてもよいと考へて居るに違ひない。だから忠の字を毀して了つたのであらう。然しこの理論は實に誤解である。何故なれば國家には君主は無くてもいゝが、忠の字は要らないと言ふ譯にはゆかないからだ。假りに忠の字が不要でいゝと云ふならば、試に問ふて見たい。我國には國があるか何うかと。我等の忠の字は之を國に用ひてよいものか惡いものかと。我等は現在君に忠と云へば固よりよくないが、民に忠にと言つたらいゝだらうか惡いだらうか。事に忠にと言つたら又何んなものであらう。我等が一事を爲すには始終渝らざれば成功するものがあるが、若し成功しなかつたならば、生命を犧牲にしても亦惜

むところにあらずと云つたやうなのが忠である。故に古人は忠の極點は卽ち死であると云つた。古へ說かれたところの忠は皇帝に忠なることがあつたが、今は皇帝がないからとて、忠の字を忘れて何事でも爲し得ると思つたら、それこそ大間違だ。此頃民國になつて諸道德が悉く破壞したと言ふことは誰しも口にするところであるが、その根本の原因は實に此處にある。我等は民國內に住んで居ると云つてもやはり當然忠を盡すべきだ。君に忠たらずして國に忠たらねばならぬのである。國に忠たらんとせば四億人に忠を效さねばならぬ。四億人のために忠を效すことは一人のために忠を效すよりも自然遙かに高尙なことに違ない。故に忠と言ふ善良なる道德はやはり保存しなければならぬことになる。孝の字に至つては、我中國の特長とするところで、各國よりも遙かに進步して居る。孝經の說くところの孝の字は、殆ど包まざるところなく至らざるところはない。實に現在の最文明の國家に於ても孝の一存を說くこと中國の如く、かくも完全なるものはないのである。故に孝の一字は更に必要であると言はねばならぬ。國民にして民國の內に在つてよく忠孝の二字を說いて極點に至ることを得たならば、國家は自ら强盛たり得るであらう。

仁愛も亦中國の善良なる道德である。古時最も多く愛の一字を說いたもの黑子に過ぐるものはない。黑子說くところの兼愛は、耶蘇の博愛と同じものである。古へ政治方面で說かれてある愛

の道理には所謂「愛民如子」とか「仁民愛物」と云ふのがあつて、何事に對しても總て愛の一字を以て之を包括した。故に古人が仁愛に對し果して何のやうに之を實行したか知ることが出來る。中外交通開始後、一般の人々は中國人の說くところの仁愛を以て外國のそれに及ばないとする。何故なれば、中國人は中國に學校を設立し醫院を開辨して中國人を敎育し救濟すると言つたやうな按配に、すべてが實行のための仁愛であるからだ。成る程、斯樣な實行方面から說いて來れば、仁愛の道德に就いては如何にも中國人は遙かに外國に及ばないかのやうに思はれる。併し乍ら、中國が斯樣に外國に及ばないと言ふ理由は、中國人が仁愛に對し外國人のやうに實行しないと云ふ點に過ぎず、仁愛は何處迄も中國の舊道德であることには變りはない。たゞ我等の外國に學ばんとする點は、彼等の實行方面にあらねばならぬ。仁愛を恢復して更に之を發揚し擴大すれば、卽ちこれ中國固有の精神である。

義と云へば、古時中國は隣國に對しても朋友に對しても、すべて義を說いた。余の見るところでは、信の一方面の道德に就いては、中國人は實際外國人よりも遙かに勝れて居るやうに思はれる。何の點からそれが見出されるかと云へば、商業取引上から見ることが出來る。中國人の取引には何んの契約書もない。たゞ互に口頭の一言を以て非常に信用する。例へば外國人から品物を

買ふ場合、互に契約書を取交す迄もなく、單に帳簿に記入しただけで事足れりとする。然し乍ら、中國人が外國人から買ふ場合には、お互に非常に詳細な契約書を取交はさねばならぬ。若し辯護士もなく外交官も居ないところでは外國人も亦中國人を眞似て同じ樣に帳簿に記入するだけで事足れりとする。が之は極めて稀な例に過ぎず、普通はすべて契約書を作ることになつて居る。契約書が作つてないとき、互の契約濟貨物の引渡しに當り、若し貨物の價格が非常に廉くなる場合、その貨物を引取らんがためには自然損をしなくてはならぬ。例へば或る貨物の値段が契約當時一萬元であつたとし、それが貨物引渡の時になつて價値が五千元しかしなくなつたとすると、若しその貨物を受取れば、みすみす五千元の損失と云ふことになる。この場合、當初貨物の賣買契約をしたとき契約書を作らなかつたのであるから、中國人は本來ならば、註文した貨物を要らないと斷つてもいゝ譯であるが、中國人は之を履行してその貨物を買ふ。信用が第一で五千元位の損失のために註文を辭わるやうなことはない。だから外國人で、中國の內地に永く商賣をやつてゐるものは常に中國人を讃美して、中國人は一言で外國人が契約書を取交した以上に信用を守ると言ふ。けれども外國人で日本で商賣するものが日本人と貨物の賣買契約をするとき、假令契約書を作つても日本人はやはり何日も履行しない。例へば、貨物を註文した際契約價格が一萬元であつ

たものが貨物引渡の時になつて五千元に値下りしたとすると、もともと契約書があつても。日本人はやはりその貨物を引取らず契約を履行しない。だから外國人は日本人と訴訟沙汰ばかり起してゐる。東亞に非常に永く住んで居る外國人で、中國人とも日本人とも商賣したことのある人は皆中國人を讃めて日本人を讃めない。

（十九行削除）

中國には、更に一種の平和を愛すると言ふ至極結構な道德がある。現在世界の國家及び民族の中で、平和を說くものは中國だけで、外國は皆戰爭を說く。帝國主義を主張して他國を滅ぼす。けれども近年數多の大戰を經過して澤山の人間を殺したので、やつと戰爭を忌避の主張するやうになつて幾度か平和會議は開かれた。卽ち從前の海牙會議の如き、歐洲戰後の「ベルサイユ」會議、「ゼネバ」會議、華盛頓會議及び最近の「ローザンヌ」會議の如き之である。けれども之等の會議で

は各國人が平和を說くのは、戰爭を恐れるため已むを得ずして說くのであつて、一般國民の天性から出づるものではない。中國人は幾千年來平和を酷愛し、すべて天性より出てゐる。個人の謙讓を重んじ、政治では「不嗜殺人者能一之」と說いて居るが如きは、外國とは大いにその趣を異にする。故に中國從前の忠孝仁愛信義等種々の舊道德が外人を浚駕してゐるのは勿論のこと、平和の道德も亦外國人を浚駕して居るのである。この種特別の良道德こそは我等の民族精神であらねばならない。今後我等は、この精神を保存するの必要ある許りではなく、更に之を發揚擴大しなければならない。然る後始めて我等の民族的地位を恢復することが出來るであらう。

我等舊有の道德を恢復せねばならないのは勿論であるが、その他固有の智能も亦まさに恢復しなければならない。我等が滿淸に征服せられて後は、四億のものはすつかり眠つて了つた。道德が睡つて了つた許りではなく、智識も亦眠つて了つた。今日民族精神を恢復せんとする我等は固有の道德を喚び醒ます許りではなく、固有の智識も亦喚び醒まさなければならぬ。中國には如何なる固有の智識があつたであらうか、卽ち人生國家觀念に對しては古時非常に優れた政治哲學が有つたものだ。我等は近時に於ける歐米國家の非常なる發達は認める。けれども彼等の新文化に至つては、まだ我等の政治哲學の完全なるには如かない。中國には外國の大政治家達もまだ未見

のものであり、又斯くも整然と說かれたことのない、最も系統立ちたる一つの政治哲學がある。卽ち大學の「格物致知誠意正心修身齊家治國平天下」の所說である。之は一個の內より發揚せられ外部に至り一個の內部より起つて推して平天下に至つて止むの謂である。斯の如く精微に開展する理論は、外國の如何なる政治哲學家達にとつても、未見のものであり、また未見のものであつて、これ卽ち我等の政治哲學の智識中、我等のまさに保存しなくてはならぬ獨特の寶物である。

元來これ等正心誠意修身齊家の道理は道德の範圍に屬するものであるが、今日これ等を智識の範圍內に置いて語ることが適當であらう。從前我等の祖宗はこれ等道德上の工夫をしたものであるが、民族精神を喪失してからは、この智識的精神も亦當然失はれねばならなかつた。故に一般の讀書には、その一句は口頭禪として常用されてはゐたが、多くは習つて察せず、その解釋を求めず、その妙を明かにすることが出來なかつたのである。正心誠意の學問は、これ內治の工夫であつて口で話すことは仲々容易ではないが、從前宋の儒者はこれ等の工夫を最も講究したもので、彼等の著書に依れば、大體彼等が至り得た地步を知ることが出來る。然し乍ら、修身齊家治國等の外面的修養の工夫に至つては、恐らく我等は今日尙ほ一つとして出來てゐないであらう。專ら外に表

はれたるものに就いて云へば、所謂修身齊家治國は、最近數百年來一つとして爲し得たものはなく、本國も自治することが出來ず、外國人は中國人の國を治め得ざるを見て共同管理を試みんとした程である。

我等は何が故に中國を治むることが出來ないのであらうか。外國人は何處から斯うした觀察を下したものであるか。余の個人的觀察に依れば、外國人は齊家の一方面からは、或は中國の家庭の樣子をはつきり見ることが出來ないかも知れないが、修身の一方面から見れば、我中國人にはその工夫が非常に缺乏しその一擧一動はすべて注意を欠いて居るので、中國人との一度の往き來ではつきり判つて了ふ。外國人の中國に對する印象は、中國に二三十年も住んで居るものか、さもなくば極めて大なる眼光を以て一度び中國に來れば忽ち中國の文化が遙かに歐米のそれに超越せるを發見し中國を讃美し得る。例へば「ラッセル」か又はそれと同樣な極めて偉大なる哲學者でもない限り、普通の外國人は、中國人には教化がない非常に野蠻であると言ふ。この原因を推究すれば、皆が修身の努力が甚しく缺乏して居るが爲に他ならぬ。大きいことは勿論、一擧一動の極めて尋常の努力迄も、すべてに考へが足りないからだ。

例へば中國人が最初米國に行つたとき、米國人は本來平等に待遇して何等中米人の區別も附け

なかつたものであるが、その後米國の大「ホテル」では中國人の宿泊を許さず、大きい「レストラント」等も中國人のお客を斷はるやうになつた。これ卽ち中國人に自修の工夫のないために他ならない。余は曾て船で一米國船長と話をしたことがある。彼の云ふには、曾て中國の一公使が恰度この船に乘つたことがあるが、その公使は船中處構はず手涕をかみ痰を吐き、この貴重の絨氈の上さへも痰を吐いて實に厭やな感じがしたと語つたので、余は彼に、あなたはそのとき何んな方法を執つたかと問ねたところ、彼が言ふには、別にいい方法も考へつかなかつたが、ただ彼の面前で自分の「ハンカチ」で絨氈の痰をきれいに拭いた、ところがそうして自分が痰を拭いてゐるのに彼は一向平氣で少しも意に介する樣子も見へなかつたが、あの公使でさへも、あの貴重な絨氈の上へ痰を吐き散すのであるから、普通の中國人は誰でも大抵あの通りであらうとのことであつた。この一事から見ても、如何に中國人の擧動に自修の工夫が缺乏してゐるかがよく判ると思ふ。孔子は曾て「席正しからざれば坐せず」と說かれた。之によつても彼が如何に平常身を修める上には一坐立の微も非常によく講究してゐるものであるかを知ることが出來やう。何が故に外國の大「レストラント」が中國の客を斷はるのであらうか、之に就いて或る人が說ふところに依れば、曾てある時、一外國の大「レストラント」で食事時間にきれいに着飾つた紳士淑女

が一堂に聚つて音樂を樂んでゐた際、突然一中國人が屁をひつたため同席の外國人は急に解散して了つた。で、その店の主人はその中國人を店外へ逐ひ出したが、その後外國の大「レストラント」では中國人の客を斷はるやうになつたのであると。又こんな話もある。ある時上海の一大實業家が外國人を招待して宴會をしたことがあるが、彼はその席上突然屁をひつたので滿座の外國人はすつかり赤面して終つたが、彼はそれを氣にかけないのみか、却つて起ち上つてバッバッと着物をはたき臭いのを追ひ出しながら、外國人に向つて「エキス、キューズ、ミー」とやつたものであると。この種の擧動は全く野蠻陋劣極まるものであつて、中國の文人學子の中にも亦常にこの鄙陋な行爲があるが、實に解し難い行爲であると言はねばならない。或は「ガス」が溜れば必ず出る、出れば音がする、衞生的だなどと言ふものがあるかも知れないが、ここに至つては更に惡劣な謬見である。國人の切に之を戒めて以て修身の功夫の第一歩たらしめんことを望む。この外中國人は常に指の爪を長くしたがり長いものは一寸以上もあつて、ちつともこれを剪らないで甚だ文雅のものと考へてゐる。この爪を長くして置く習慣は佛國人にもあるが、佛國人のは長くても精々一二分に過ぎず、彼等はこれを以て自分が荒仕事をしてゐるものではないことを表示することが出來ると言ふにあるらしいが、中國人の爪を長くするにも亦斯した考へが多分にある

やうだ。若し果して人々皆荒仕事をしたがらなくなつたならば、我等國民黨の勞工尊重の原理とは喰ひ違つて了ふ。その外中國人の齒は何時も非常に黄く黑くなつてゐて、きれいに磨いてないが、是れ亦目修上の一大缺點である。

痰を吐いたり屁をひつたり爪を長くしたり齒を磨かないのは、すべて修身上尋常の工夫を皆が注意しないからである。故に我等に如何に修身齊家治國平天下の大智識があつても、外國人は一見して非常に野蠻だと思ひ込み詳細に我等の智識を考察しやうとしないのである。外國人にして中國の文明を知り得るものは、「ラッセル」か之と同樣の大哲學者の如く一見にて觀察し得るものを除いては、中國に何十年も住んだ人でもない限り中國幾千年の舊文化を知ることは出來ない。假りに若し諸君が、修身の工夫を爲すに條理あらしめ、內に誠にして外に形はれ、如何に微細な擧動迄もよく注意し、外國人に遇つても鄙陋なる行爲を以て他の自由を犯するが如きことがなかつたならば、必ず外國人は非常に尊重するやうになるであらう。本日修身のことを說いた所以は各位靑年が外國人の新文化を學ばねばならぬは當然であるが、ただその前に身を修むることが必要であり、身修つて後、齊家治國を說くべきであると言はんがために外ならない。現在各國の政治は何れも進歩し唯中國のみ退歩して居る。何故に中國は退歩したか。卽ちそれは外國の政治經

濟の壓迫にも依るが、その根本の原因を推究すれば、やはり中國人が身を修めず、中國從前の修身を講ずるを知らざりしに歸する。正心誠意格物致知に至つては極めて精密なる智識、一貫せる道理である。然も斯の如き極めて精密なる智識と一貫せる道理とは共に中國固有のものである。我等にして今、家を齊へ國を治め外國の壓迫を受けざらんとせば先づ身を修めて中國固有の智識と一貫せる道理とを恢復することが絶對的に必要である。然る後、我等の民族精神も民族地位も初めて恢復することが出來るであらう。

我等は智識の外に尙固有な能力を持つて居る。現に中國人は外國の發達せる機械、昌明なる科學を見て、中國人の現在の能力は當然外國人には及ばないであらうと考へてゐる。然し乍ら幾千年前中國人の能力は何んなであつたらうか。從前中國人の能力は外國人に比して遙かに大なるものがあつた。現在外國で最も重要なものは悉くこれ曾て中國で發明せられたものである。例へば指南鍼（磁石）の如き、今日の如く航海業の發達した世界に於ては殆んど一時一刻も無くてならないものであるが、この指南鍼の起源を尋ぬれば、やはり中國人が幾千年前に發明したものである。若し果して從前の中國人に能力がなかつたならば、磁石を發明することは出來なかつた筈である。然るに中國人は夙に磁石を發明し外國人は今尙之を使用してゐる。中國人固有の能力が外國

人より高かりしを見るべきである。次に人類の文明中最も重要なるは印刷術であるが、現在外國に於て改良せられ一時間に幾萬枚の新聞を印刷し得る印刷機も、その起源を尋ぬれば、やはり中國の發明にかかる。又次に人類の日用品たる磁器も亦中國に於て發明せられたもので、この磁器は中國の特產で、今日迄外國人は隨分模倣に力めたが、中國の精美なるには猶ほ遠く及ばない。近來世界の戰爭に用ひらるる無煙火藥も、その源を推究すれば有煙黑藥の改良せられたもので、その有煙黑藥も亦中國で發明せられたものである。中國で發明された指南鍼、印刷術及火藥等これ等重要なるものは、今日外國の利用するところとなり、故に彼等はよく今日の强盛を致したのである。若し夫れ人類享くるところの衣食住行の種々なる設備に至つては、これ亦從前我等の發明せしところ、例へば飲料に就て云へば、中國人は茶葉を發明して今では世界の一大需要品となつて文明諸國も皆爭つて之を用ひ茶を以て酒に代へてゐる。而して之に依て酒の害毒を免がるるを得、その人類に稗益する決して少なくない。次に衣服であるが外國人が、最も珍重するは絹織物で、現世界では絹織物を用ふる人は日一日と多くなつてゐる。蠶の吐くところを以て人の衣服となす、之を推究すれば又中國で幾千年前に發明せられたものである。その次に住に就いて云へば、現在外國人の建造する家屋は頗る完全なものであるが、その建造の原理及家屋の重要部

分に至つては、すべて中國人の發明に係り、例へば拱門の如きは中國が最も早く發明したものである。最後に行に就いて云へば、現在外國人の用ふる吊橋は、極く最新式の工事で非常な技術でもあるやうに考へられてゐるが、外國人が中國內地に來て川邊西藏に行けば、中國人が大山を過り大河を横切つて多くの吊橋を用ひてゐるのを見るであらう。彼等は、從前中國の吊橋を見ない間は、外國の方が先に發明したやうに考へて居たが、中國の吊橋を見るに及んで、この發明の功を中國に歸するのである。斯樣に昔から中國人には能力が無かつた譯ではない。その後この能力を失つたがために、我等の民族地位も亦漸次退化したのである。今固有の地位を恢復せんとすれは、先づ我等固有の能力をも一齊に恢復しなければならぬ。

然し乍ら、我等が固有の道德智識及能力を恢復すればとて、今日の世では、猶中國を世界一等の地位に迄進ませることは出來ないのである。若し我等が我等の祖宗の當時の如く世界獨强の國家たらんとするならば、我一切の國粹を恢復した後、尙歐米の長所を學ばねばならぬ。斯くて始めて歐米と肩を併べて競爭することが出來るであらう。若し外國の長所を學ばずんば、我等は依然退步を續けなければならぬであらう。畢竟するに、外國を學ぶことは困難であるか、困難でないか。中國人は從來外國の機械は非常に難かしいもので學ぶことは容易でないと考へてゐた。外

國で最も難しいものは、空中を飛ぶことであると考へられてゐたが、最近飛行機は發明せられ、そして今我等は毎日大沙頭の上空に飛行機の飛ぶのを見ることが出來る。そしてその操縱者は中國人でないのか。

中國人は天上を飛ぶことを學んで到り得たのである。その他に學んで到り得ないやうな難事があるであらうか。何故ならば、數千年來中國人は非常に立派な根底と文化とを有する。故に外國人に學んだならば、如何なることでも悉く學んで到り得ないことはないのである。我等の本來の能力を以てすれば、外國人の長所を學ぶこと位は至極易々たることでなければならぬ。外國人の長所は科學である。それは二三百年の工夫を以て研究し發明せられたもので、長足の進步を遂げたのは最近五十年來のことに過ぎない。この種の科學が進步したが爲に、人力を以て天工を巧奪するやうになり、天然の凡ゆる物力も人工でこれを造り得るやうになつた。最新に發明せられた物力は電力の使用である。從前物力を得るには石炭を用ひて居た。石炭に依て蒸氣力を發動せしめたものである。現在では進步して電力を使用する。故に外國の科學は既に第一步より第二步に進んだと言はなければならぬ。現に米國に於ては全國の機械工場所有の電力、卽ち馬力を統一せんとする大計畫がある。彼等全國の幾萬の機械工場には、各一個の發動機があり、すべて石炭を

燃料として動力を起してゐる。だから各工場で、一日に使用する石炭とそれに使用する人間は夥しい數に上り且つ各工場の石炭の使用が莫大なるため、全國幾十萬哩の鐵道は唯一の石炭運送の用にも足らず、農産物運送の工夫がつかなくなつて了ひ、之が爲め各地の農産物を運び出して賣捌くことが出來なくなつて了つた。石炭の使用には斯うした二つの不利益が伴ふため、米國では現に一中央發電所を設けて全國幾萬の工場の電力を統一せんことを計畫しつつある。この計畫が將來果して成功したならば、これ等幾萬の工場の發動機はすべて一個の總發動機に統一せられ、從て各工場は石炭と澤山の石炭たきの勞働者とを必要としなくなり、ただ一條の銅線がよく動力を傳導し各工場の作業を爲さしめ得るであらう。この方法の利益は、恰度現在講堂にゐる幾百人が一人一人單獨に鍋で飯を煮て食ふことは非常に面倒であり非常な浪費であるけれども、皆一緒になつて、一つの大鍋　煮て食へば非常に便利でもあるし多大の浪費を省くことも出來るのと同樣である。斯樣に現在米國では電力を以て全國の工場の統一計畫を考へて居るが、若しも中國が外國の長所を學ばんとするならば、眞先きに石炭を使用せずして電力を用ひ、一大原動力を以て全國に供給しなければならぬ。斯の如き學び方は恰も軍事家が敵の頭を迎へて截擊すると同樣である。若し果してよく彼等のなすところを直にとつて之を學んで行つたならば、十年の後には假

令外國を超越することは出來ない迄も、必ずや彼等と比肩することが出來るであらう。

我等が外國を學ばんとするには、彼等の爲すところを直に取つて一歩づつ先きへ進むやうに心懸け、彼等に追隨してはならぬ。例へば、科學を學ぶにも彼等のなすところを直にとつて之を爲せば二百年の光陰を節約することが出來るであらう。若し果して我等が今日の地位に至つても、尙惰眠を貪つて奮鬪しなかつたならば、國家の地位は恢復せられず、今後は亡國滅種の外ないであらう。我等は今、世界の潮流に隨つて外國の長所を學べば、必ず外國より以上に更に好きことを學ぶことの出來ることを知つた。所謂「後の雁が先になる」である。從前數百年も後れて居たものが、今では數年ならずして之を追ひ越すことが出來るのである。日本はその一つのいゝ手本ではないか。日本は從前の文化は中國より學んだもので中國に比較して低かつた。けれども近來日本は專心歐米の文化を學んで幾十年ならずして世界列强の一つとなつたのである。余の見るところでは、中國人の聰明才力共に日本人に劣らない。我等が今後歐米を學ぶことは、日本よりも更に容易な筈である。故にこの十年間、卽ち我等の生死鬪頭に在つて、我等が覺醒して日本人の如く協心協力臥薪嘗膽して民族地位を恢復したならば、十年以內に外國の政治經濟及人口の種々なる壓迫と禍害とを一齊に消滅せしむることが出來るであらう。日本は歐米を學んで幾十年な

らずして世界列强の一となつた。けれども中國は人口に於て日本に十倍し富源は更に莫大である。だから、若しも中國にして學んで日本に至り得るとすれば、卽ち變じて十の列强となるであらう。現在世界には英米佛日伊の五大强國あるのみで、その後恢復せる獨露を數へても六七個の强國があるに過ぎない。若し中國がよく學んで日本同樣になることが出來たならば、一國は變じて十個の强國となり、そのときに至らば、中國は第一等の地位を恢復することが出來るであらう。

けれども中國が第一等の地位になつたときは、如何なる態度政策を執るべきであらうか。古時中國は常に弱きを濟ひ傾くを扶けて來た。此の正しい政策があつたがため中國は機千年の强盛を傲り得、安南緬甸朝鮮暹羅の諸小國もよく獨立を保持し得たのである。今は歐風東漸し、安南は佛國に緬甸は英國に滅ぼされて了つた。故に中國にして若し果して强盛となることが出來たならば、我等は民族地位の恢復のみならず尙ほ世界に對して一大責任を負はねばならぬ。若し果して中國にしてこの責任を負擔し得なかつたならば、中國の强盛は徒らに世界に大害を與へるのみで、何等利するところはないであらう。中國は世界に對し、究竟するに如何なる責任を負はねばならないのか、現在世界列强が步ける路は他國を滅すところのものである。若し中國が强盛と

なつて他國を滅ぼさんとするならば、又列國の帝國主義を學ばんとするならば、步むは同じき路であり、彼等の覆轍を踏むものでなくして何であらう。故に我等は先づ豫め一種の政策を決定して置かねばならぬ。弱きを濟ひ傾けるを扶くる、之こそ我民族の天職のすべてである。我等は弱小民族に對しては之を扶持し、世界の列强に對しては之に抵抗しなければならぬ。若し果して全國人民の總てが志をこゝに立てたならば中國民族は始めて發達することが出來るであらう。若し然らずして志をこゝに立てなかつたならば、中國民族には前途何等の希望もないであらう。我等は發達せざる今日に於て、先づ傾けるを扶け弱きを濟ふの志願を立て、將來强盛となつたとき、今日我等の身に受くる列强の政治經濟的壓迫の苦痛を將來の弱小民族も亦之を受けなければならないのであらうことに想到したならば、我等は之等帝國主義を消滅しなければならぬ。それでこそ始めて治國平天下である。

我等は將來よく國を治めて天下を平にせんとするならば、先づ民族主義と民族地位とを恢復し、固有の道德を以て平和の基礎と爲し、世界を統一して一個の大國の治を成さねばならぬ。これ卽ち我等四億人の大責任である。諸君は皆四億人の中の一人である。すべてこの責任を負擔しなければならぬ。これ我等が民族の眞精神であらねばならぬ。

第二章　民權主義

第一講　總論

諸君、本日は民權主義の講義を開始したいと思ふ。民權主義とは如何なるものであらうか。順序として今民權と云ふ字の解釋を定めてかからねばならぬ。それには先づ民とは如何なるものであるかを知らねばならない。凡そ團體があれば之を組織する衆人がある。團體を組織する衆人即ち之を民と呼ぶ。次に權とは如何なるものであるか。權は即ち力であり威勢である。その力が國家同樣の大きさになつたとき呼んで權と言ふのである。力の最も大なる諸國家を、中國語では列强と云ひ、外國語では列權(The Powers)と言ふ。又機械の力を中國語では馬力と言ひ、外國語では馬權(Horse Power)と言ふ。故に權と力とは實際は同じものだ。命令を行使する力、群倫を制服する力を權と呼ぶ。民と權とを合せて言へば民權即ち人民の政治力である。何うして政治力と言ふのであらうか。我等にしてこの道理を明白ならしめんがためには、先づ政治の何たるかを明白にしなければならぬ。一般に政治と云ふものは、非常に奥妙にして艱深なもので普通のもの

には仲々難解なものと考へて居るものが多い。だから中國の軍人達は常に言ふ、我等は軍人である、政治は判からないと。何故彼等には政治が判らないのであらうか。即ち彼等が政治と言ふものを非常に奥妙にして難解なものと考へ、政治の非常に淺顯にして明瞭なることを知らないがためである。それも若し、軍人が政治に干渉しないと言ふのなれば話は判かるが、政治が判らないでは一向お話にならない。何故ならば、軍人は政治の原動力であつて、軍人たるものは當然政治が解らなければならず、政治の何たるか位は明白に知つて居なければならない筈だからだ。政治と云ふこの二字の意味は、淺言すれば政は即ち衆人の事、治は即ち管理である。衆人のことを管理すること、即ち政治である。衆人の事を管理する力が即ち政權である。人民を以て事を管理すること即ち民權と云ふ。

今民權の意義は既に明白になつた。そこで民權とは如何なる作用を爲すものかを研究しなければならぬ。偏く近世を觀、往古に遡つて權の作用を簡單に說明すれば、權は即ち人類の生存を維持する作用である。人類が生存せんがためには、最大の二大事が具はらねばならぬ。第一は保であり第二は養である。保と養との二大事は、人類が日々爲さねばならぬところのものである。保は即ち自衛である。その個人たると或は團體たると或は國家たるとを論ぜず、自衛の能力なくし

ては生存することは出來ない。養は卽ち食を覓むることである。この自衞と食を覓むることとは人類の生存を維持すべき二大事である。併し乍ら、人類が生存を維持せねばならぬと同樣他の動物も亦その生存を維持しなければならぬ。人類が自衞を必要とすれば、他の動物も亦自衞を必要とする。人類が食を覓めなければならぬと同樣他の動物も亦食を覓めなければならぬ。故に人類の保養は動物の保養と衝突し、ここに競爭を發生する。人類がこの競爭の中にあつて、生存を求めんがためには、奮鬪しなければならぬ。故に奮鬪のこの一事は人類あつてこの方、一日として息まざるところのものである。之に依ても、權は、人類の奮鬪そのものであることが分かると思ふ。實に人類は、初生以來現在に至る迄日日これ奮鬪の中にある。

人類の奮鬪を數個の時期に分つことが出來る。第一期は大古洪荒歷史あらざる以前の時期である。その時期の長短は、現在でもよく分つて居ないが、近來地質學者が地殼に就て研究し人類の遺跡ある地殼を基礎として研究調査した結果に依れば、二百萬年に過ぎず、二百萬年以前の地殼には人類の遺跡は存在せずと云ふことになつて居る。普通人には幾百萬年も以前のことを言へば、甚だ渺茫として見當もつき兼る程であるが、近來地質學が非常に發達した結果、地質學者は地殼を幾多の層に分ち、一つの層が出來上る迄には何れ丈の年數がかかつて居るとか、何の層は最古の

地殼であるとか、何の層は近代の地殼とか云ふやうに地殼を區別して居る。我等が如何にも遠いことのやうに考へて居る二百萬年前のことも、地質學者に依れば、一短時期に過ぎず、二百萬年以前にも尙幾多の地殼があり、更に二百萬年以上より地殼構成前に至れば、別に調べる由もないが、普通には地殼の構成前は一種の流動體にしてその以前は一種の氣體であつたと云ふやうに說かれて居る。故に進化哲學の道理に照して云へば、地球は元來氣體であつて太陽ともと一體であつた。始め太陽と氣體とは共に空中に在て一團の星雲を成して居たが、太陽が收縮するときになつて、幾多の氣體が分れ久しく時間の經過する間に凝結して液體となり、更に液體から固つて地殼を形成したのである。最古の地殼が出來てから幾千萬年になるか、現在地質學者が信ずべき地殼に就いて研究した結果に依れば、二千有餘年とされて居る。故に彼等は地球が當初氣體から液體に變ずる迄に幾千萬年を要し、液體から地殼を構成する迄にも亦幾千萬年を要し、最古の地殼から今日に至る迄少くとも二千萬年を經過せるものと推察して居る。二千萬年前には文學の歷史がなかつたがために、我等は之を非常に久遠のことのやうに考へて居るが、地質學者にとつてはそんなに古いことでもない。

余が語りつつある之等地質學と我等の今日の演題とは如何なる關係があつたのか。地球の來源

を說けば、之に依り我等は人類の來源を推究することが出來ると思つたからである。地質學者は研究の結果、人類の初生は二百萬年以內であるとした。その後今を距る二十萬年前始めて文化が生れたのである。當時人は禽獸と何等大した區別はなかつたものである。故に哲學者等は、人は動物より進化したもので偶然出來たものではないと云ふて居る。かくて二十萬年來、人類萬物は漸次進化し、始めて今日の世界を形成するに至つた。然らば現在の世界とは如何なる世界であらうか。卽ち民權の世界である。

民權は二千年前希臘羅馬時代に萠芽した。がその確立して搖がざるに至れるは、僅に一百五十年來のことに屬する。それ以前は君權時代で、君權以前は神權時代であつた。而して神權の前は卽ち洪荒時代であつて人獸鬪爭の時代であつた。當時に於ては、人類も生存を圖らねばならず、獸類も亦生存を圖らねばならなかつた。人類が生存を保全する方法の一は、食を覓むることであり他は自衞である。大古時代に於ては、人間は獸を食ひ獸も亦人間を食つて互に相競爭して居たものである。到る處すべて毒蛇猛獸、人類の周圍はすべて禍害であつた。故に人類にして生存を圖らんとせば何うしても奮鬪せねばならなかつた。去り乍ら當時の奮鬪は人獸到る處に混亂するの奮鬪であつて、大團體を結合するに至らず、所謂各々自らの爲めに戰つたのである。人類の發生地

方に就いて見るに、數個地方に過ぎないと云ふものがある。けれども又地質學者のやうに、人類發生以來世界で人の住んで居なかつたところはない、何故ならば、何處を堀つても人類の遺跡を發見するからであると說くものもある。人獸の競爭に至つては今尙完全に消滅して居ない。若しも南洋未開の地に至らんか、人獸の鬪は今猶發見することが出來るであらう。又我等にして荒寥たる山野の外、人煙絕えたる土地に至らんか、太古時代に於ける人獸の狀態が如何樣であつたかが判るであらう。斯の如く我等が古代のことを推測し得る所以は、古代の痕跡が遺存して居るからのことで、若しも古跡にして潰存せずんば、我等は古代の事を知る術もないであらう。

普通古代のことを研究するには書を讀み歷史を看る。ところが歷史は文字を用ひて記載せられたるものなるが故に、人類の文化は、文學發生後でなければ歷史に就いて尋ねることが出來ない。文學の歷史は中國に於ても今に至る迄僅に五六千年に過ぎず、埃及でさへ一萬餘年に過ぎない。凡そ世界に於ける萬事萬物を攻究する方法としては、中國では專ら讀書に依て居るが、外國人は單に讀書のみによらず、彼等は小中學の間だけは讀書に依り大學に進めば讀書の外實地に就いて攻察する。專ら書物上の歷史のみを見ずして、地殼を見、禽獸を見、又各地方の野蠻人の狀態を見やうとする。卽ち彼等は斯くしてこそ祖先が如何なる社會狀態に在りしやを推知することが

出來るのであつて、例へば「アフリカ」大陸及南洋群島の野蠻人を觀察すれば、未開化の人間の生活狀態が如何なるものかが判ると云つだやうなものだ。故に近來の大科學者は萬事萬物を攻察するには書物のみに依らない。彼等の著書の如きは彼等の研究して會得したところに依り人類の記錄に貢獻せんとするものに過ぎない。彼等の攻察の方法に二種ある、一は觀察を用ふるもの卽ち科學である。他は判斷を用ふるもの卽ち哲學である。人類進化の道理はすべてこの二つの學問から得られたのである。從前人と獸とが鬪ふにはただ個人の體力を以てしたが、その頃でも同類相助けると云ふことはあつた。例へば、此處に幾十人の人間と幾十の猛獸とが鬪つて居るとする、又別な處でも亦幾十の人間と幾十の猛獸とが鬪つて居るとする。この場合、兩地の人類は互に同類であつて猛獸と異なるを見るや、互に同類相集合して同類ならざるものと鬪爭したものである。そして決して同類ならざる動物と一緒になつて、人間を食ひ同類を害するやうなことはなかつたものである。當時同類の集合するや、約せずして同じ毒蛇猛獸と戰つたものである。この種の集合は天然であつて人爲ではない。毒蛇猛獸を完全にやつつけて了へばもと通りばらばらになつて了つたものであつた。當時はまだ民權が發生して居なかつたので、人類は毒蛇猛獸と戰ふには各人各その氣力を用ひたのであつて、その權力を用ひた譯ではなかつた故にその時代は人と獸と爭

ふには氣力を用ひた時代である。

その後毒蛇猛獸は殆んど人類に完全に征服せられ、人類の環境も稍よくなり、住むところの土地も人類の生存に好適となり、人群は一ヶ所に集り住むやうになり禽獸を飼養して人類の使用に供することとなつた。故に人類が毒蛇猛獸を殺して仕つてからは牧畜時代となる。これ亦人類文化の初生時代でもある。當時の人類は現在尙牧畜時代にある蒙古又亞細亞大陸西南の「アラビア」人爭と殆ど同樣の生活をしてゐたものである。この時代になつて人類の生活狀態に一大變動が起つた。卽ち人獸の鬪爭が終熄したが故に、文化が始めて生れたのである。この時代を太古時代と言ふことが出來やう。この時代に至り、人類は何物に向つて奮鬪したか。人類は天然の物力と鬪つたのである。簡言すれば、世界の進化は第一期はと人獸と爭ひその用ふるところは氣力であつて人々が同心協力して毒蛇猛獸を完全に征服した時期であり、第二期は人と天と爭つた時代である。人獸鬪爭の時代には何時毒蛇猛獸が來犯するやも測られざりしため、人類は時々刻々の生死さへも測られなかつた。當時人類の自衞力と云へば、兩手兩足がその全部であつた。唯その頃でも人類は獸に比べて幾分聰明であつたがため、獸と鬪ふには兩手兩足のみを以てせず、棍棒や石などを用ふることを知つて居たので、最後の結果は人類の勝利に歸し、獸類を殺滅し盡し、始めて人類の

生命は一日一日と計算することが出來るやうになつた。かの人獸鬪爭の時期には人類の安全は、殆ど一時一刻と雖も保つことが出來なかつたものである。

人類の禍害が失くなつてから人類は逐次蕃盛し始め、人類の棲息に好適な土地には人口が充滿した。當時如何なる地方が人類棲息の好適地であつたか。風雨を避け得る地方が好適地と言はれたもので、卽ち風雨到らざる地方とは埃及の「ニール」河の兩岸及び亞細亞大陸の「メソポタミア」地方の如き地方であつて、土地極めて肥沃に四時殆ど降雨がなかつた。「ニール」の河水は年一度宛氾濫し、その減水後は河水の齎せる肥泥が兩岸一帶の土地に撒布せられ、植物の生長を容易ならしめ、多量の米穀を產したものである。斯樣な好適の地はただ「ニール」河及び「メソポタミア」地方のみに限られて居た。普通「ニール」河及び「メソポタミア」を世界文化の發祥地であると云ふ。この兩岸は土地肥沃にして常年風雨なく、耕作播種に適し又牧畜も行はれ、河中に棲息する水族動物も亦頗る豐富なりしを以て、人類の生活は極めて容易にして、心力を勞せずして優遊日を送るを得、子子孫孫の蕃盛も容易であつた。人類は蕃殖が盛んになつてからは、それ等地方だけでは住み切れなくなり、卽ち「ニール」河「メソポタミア」以外の土地で多少不適な地方も亦移り住まねばならなくなつた。不適な地方には風雨と云ふ天災があつて、恰度黃河流域にも比すべき

ところである。

黃河流域は中國古代文化の發源地ではあるが、一面風雨の天災あり、又他面氣候寒冷にして、元來文化等の發生しさうにもない所である。然るに中國の古代文化は、何うして黃河流域に發生したものであるか。黃河兩岸の人類は何れも他地方から移住して來たもので、彼等に依つて中國古代文化は發生したのである。例へば「メソポタミア」の文化は中國より早きこと一萬餘年であるが、中國の三皇五帝以前黃河流域に移住し中國の文明を發生せるものの如き之れである。彼等はこの地方に在て、毒蛇猛獸を完全に驅逐してからも、天災があり、風雨の禍患を受けねばならなかつた。人類が天災に遇ふとき、その災害を免がれんが爲には天と爭はねばならなかつた。風雨を避けんが爲には家屋を造らねばならなかつた。寒冷を禦がんが爲には衣服を作らねばならなかつた。かくて人類は家屋を建て衣服を作ることが出來るやうになつた。卽ち進化して著しく文明となつたのである。然し乍ら天災は豫測し難く、之が防備も仲々容易なことではない。時あつては一陣の大風は家屋を推倒し、大水は家屋を掩沒し、大火は家屋を燒滅し、大雷は家屋を打壞する。この四種の水火風雷の災害に對しては古人は全然その妙を明かにせず、且つ古人の家屋は何れも草木を以て造られ、到底水火風雷の天災に對し抵抗し得べくもなく、從て古人はこの四天災に

對しては之を豫防すべき方法もなかつたものである。人獸鬪爭時代に於ては人類は尙ほ氣力を以て鬪ふことが出來たが、人天鬪爭時代に至つては專ら鬪のみを以てしては之に打克つことは出來なかつたので、當時の人類は非常な困難を覺えたものであつた。その後聰明な人が現はれて人民に代つて幸福を謀つた。大禹の治水の如き、人民に代つて水患を除去し、巢氏は民に樹上に居室を造營することを敎へ人民に代つて風雨の災害を避けんことを謀つたのである。之より以後、文化は漸く發達し人民も亦逐次團結するに至つた。

又當時は地廣く人稀少なりしため食を覓むることは非常に容易であつた。そして當時唯一の彼等の問題と云へば天災であつた。故に彼等は天と爭はねばならなかつたのである。けれども天と爭ふには獸と爭ふに汽力を以てするの比ではない、ここに於てか神權は發生した。極めて聰明なる人は神道を提唱し人民を敎育し祈禱の方法に依つて禍を避け福を求めしめんとした。彼の祈禱の工夫は當時有效であつたかは無效であつたか判らない。けれども既に天と爭ふ以上、萬策盡きたときには神權を用ひざるを得なかつた。一個の非常に聰明なる人を、恰も「アフリカ」に於ける野蠻人の酋長の如く、これを推戴して首領としなければならなかつたのである。彼の職務は專ら祈禱することであつた。又中國の蒙古及び西藏の如きも何れも活佛を奏じて皇帝となし神を以

て、人民を治めて居る。故に古人は國の大事は祀と戎にありと云ひ、又國家の第一は祈禱第二は戰爭であると云つたのである。

中華民國成立後十三年になる。皇帝を傾覆したので現在では君權はない。日本は現に尙君權的國家にして今尙神を拜して居る、故に日本皇帝を彼等は天皇と稱する。我等も亦從前中國皇帝を天子と稱したものである。この時代に於ては、發達後既に年久しい君權ではあるが、尙神權から脫離することは出來なかつた。日本の皇帝は幾百年前一時政權を武人に委ねられたが、六十年前明治維新に依り德川を打倒し王政復古を見た。故に日本では今尙君權と神權とを併用して居る。從前の羅馬皇帝も亦一國の敎主であつた。羅馬滅亡後皇帝の地位は傾覆せられ政權も亦奪去せられたが、敎權のみは依然保存せられ、救主として今尙各國人民の尊奉するところである。これは恰も中國の春秋時代に列國が周を尊奉したのと同樣な譯だ。斯の如く人類は、人獸鬪爭時代を經過した後も天災があり、天と爭はねばならず、そこで神權の發生を見るに至つたものである。

、有史以來現在に至り神權時代を經過した後は君權は發生した。そこで有力な武人及大政治家は敎主皇帝の權力を奪ひ、或は自立して敎主となり、或は自稱して皇帝となつた。此處に於て人天鬪爭時代は變じて人と人との爭となつたのである。人と人と相爭ふに至つては、單に宗敎的信仰

の力のみに依ては、人類社會を維持する能はず、人と競爭するに足らず、政治を修明し武力を强盛にするに非ずんば他人と競爭し得ざることを覺つたのである。有史以來世界は、すべて之れ人と人との爭である。從前人と人との爭には一半は神權を用ひ一半は君權を用ひたものであるが、その後神權漸次減少し、殊に羅馬分裂後は、神權漸く衰へ君權漸く隆盛に赴き、法王「ルイ」十四世に至つて極盛時代に達した。彼は皇帝と國家とは別なものではない、我は皇帝である、故に國家であると說いた。彼は國家の凡ゆる權を悉く自己の手中に收め、その專制は恰も秦の始皇同樣、その極點に達したのであつた。君主の專制が日一日と激しくなるに連れ、人民は之を忍受することが出來なくなつた。この時代に至り科學も亦日一日と發達し、人類の智識も日一日と進步した。ここに於て人民は覺醒せざるを得ない。彼等は君主と言ふものは大權を總攬し國家と人民とを彼一個人の私有物とし彼一人の快樂の用に供し、人民の受くる苦痛には一向無關心なることを知つた。人民が忍從し能はざるに至れるとき、彼等が日一日と覺醒し、君主の專制は無道である、人民は之に反抗せねばならぬ、反抗は卽ち革命であると覺つたのは蓋し當然でなければならない。故に百餘年來革命的思潮は著しく發達し民權的革命が發生したのである。民權革命とは抑も誰が誰と爭ふのであるか。それはとりもなほさず人民が皇帝と相爭ふのである。

我等は民權の來源を推究して、之を幾つかの時代に分かつことが出來ると思ふ。卽ち再び概括的に言へば、第一期は人と獸と爭ひ權を用ひず氣力を用ひた時期である。第二期は人と天と爭ひ神權を用ひた時期である。第三期は人と人と爭ひ、國と國とが爭ひ、民族と民族とが爭ひ、君權を用ひた時機である。その後現在に至る迄が第四期で、國內相爭ひ人民と君主と相爭ふの時期である。これは又、善人と惡人と爭ひ公理と强權と爭ふ時代と言ふことも出來やう。この時代になつて民權は漸次發達した。故に之を民權時代と呼ぶ。この時代は餘り古いことではない。この極めて新しい時代に到つて舊時代の君權を推倒した。

君權の推倒は果して是か非か。從前人類の智識未だ開けざるの時代に於ては、聖君賢相に依て指導せられ、君權は非常に有用なものであつた。君權發生前は、聖人が神道を以て人民を敎化し社會を維持した。當時に於ては神權も亦非常に有用なものであつたに違ひない。現在では神權君權共に過去の遺物である。民權時代に至つて、君權に反對し必ず民權に依らざるべからずとは、果して如何なる道理に因るものであるか。それは、近來文明の進步著しく、人類の智識亦顯著となり、新に自己意識に眼覺めたからであつて、恰も我等が幼年時代には父母に手を提いて貰はねばならぬのが、成人して一人前の生計を立てるときになれば、何時迄でも父母に賴つて居る譯には

行かず必ず自ら獨立しなくてはならないのと同樣な譯である。尤も現に尙多數の學者は君權を擁護し民權を排斥せんとし、日本等には殊にこの種の學者が多く、歐米にも亦この種學者がある。中國の多くの舊學者も亦同樣で、從て一般の老官僚は今猶復辟を主張し帝國を恢復せんとして居るのだ。全國の學者の中には、君權を主張するものであり、民權を主張するものもあつて、今尙ほ政體を決定することが出來ないと言ふのが中國の現狀である。我等は民權政治を主張するものである。この主張を貫徹せんが爲には、世界各國の民權の情形を明かに考察することが必要である。

二十萬年前から一萬數千年前に至る迄神權が用ひられ、よくその時代の潮流に適應して來た。例へば若し現在の西藏に突然君主を立てやうとしたならば何うであらう。人民は必ず反對するであらう。何故なれば、彼等は敎主を崇信し活佛を擁戴し活佛の權威を尊仰して活佛の命令に服從するを無上の光榮として居るからだ。歐洲幾千百年前の情形も亦その通りであつた。中國文化は遙かに歐洲に先んじ、歐洲の神權時代既に中國に於ては君權時代であつた。故に中國は餘程古くから君權時代であり、民權と言ふ名の傳つたのは未だ近代のことに屬する。諸君は今余の革命に贊成する以上、民權を主張するのは當然である。一般の老官僚は復辟して皇帝を擁立せんとする

ものであるから民權に反對して君權を主張するのも蓋し當然である。然らば君權と民權とは果して何れが現在の中國に適應するのであるか。この問題は頗る研究に値する。根本から論じて來れば、君權と言ひ民權と言ふも、共に之れ政治を管理し衆人の爲めに事を辨ぜんとするものに他ならず、ただその間各時代の政治的環境を異にするため用ひらるる方法も亦各異なるものありしと言ふに過ぎない。

故に結局の處問題は、中國の現在に民權を用ふることが果して適當であるや否やの點にある。中國人民の程度は非常に低く民權には適しないと言ふものがある。米國の如きは元來民權國であつたが、袁世凱の皇帝たらんとするとき「グッドノウ」なる一大學敎授は中國に來つて君權を主張して、中國人民の思想未だ發達せず文化亦歐米に及ばない、故に民權を用ふるは不適當であると說いた。袁世凱は彼のこの種言論を利用して民國を打倒し自ら皇帝と稱したのである。今我等は民權を主張せんとする。之が爲め是非とも民權と言ふものを充分に理解して置かねばならぬ。有史以來中國は民權を實行したことはなく、民國十三年來亦之を實行したこともない。我等四千年來の歷史はその間治もあり亂もあつたが、一樣に君權を用ひて來たものである。然らば結局、君權は中國に對して有利であつたか或は有害であつたであらうか。中國の受けた君權の影響は利害

相半ばしたと云ふことが出來やう。けれども中國人の聰明才智に基いて考ふるならば、若しも民權を應用して居たならば、更に一段と適切なものがあつたであらうと思はれる。故に二千餘年前孔子孟子は民權を主張したのである。孔子曰く「大道之行也天下爲公」と。卽ち民權的大同世界を主張したのだ。又彼は口を開けば必ず堯舜を稱へた。卽ち堯舜は家天下にあらず、名は君權たりしも、その實民權政治を行つたがため、孔子は常に彼等を崇仰して已まなかつたのである。孟子曰く「民爲貴、社稷次之、君爲輕」と。又曰く「天視自我民視、天聽自我民聽」と。又曰く「聞誅一夫紂矣、未聞弑吾也」と。彼は當時既に君必ずしも必要ならず、君主の必ず長久たり得ざることを知つて居たのである。故に彼は民の爲めに福を造るもの、卽ち聖君なりと稱し、それ等暴虐無道のものを一夫となし人民の之に反抗するも亦怪むに足らずとしたのである。斯の如く中國人の民權に對する見解は二千餘年前早くも定められて居たのであつて、當時に於ては尙ほ實現し難きものと思惟せられて居たのに過ぎないのである。恰も外國人の所謂「ユートピア」が理想上の天國であつて卽時に實現出來ないものであると同樣に。

外國人の中國人に對する印象は、「アフリカ」南洋等の野蠻人に對すると同樣である。從て中國人が外國人と語り、談民權のことに及べば、彼等は極力反對する。そして中國はまだまだ歐米と

共に民權を語るに足らずとして居る。之等誤れる見解は、すべて外國の學者が中國の歷史及國情を考察せず、事實民權が中國に適するか何うかに就いて充分知らないのに基因する。又中國の歐米留學生も、外國人と共に中國に民權の適せざるを說いて居るが、この種見解は錯誤も甚しと言はなければならぬ。余の所見に依れば、中國の進化は歐米のそれに優り、民權論の如きも既に幾千年の昔行はれたるものにして、ただ當時之を言論に見、事實として現はれなかつただけのことである。今歐米諸國は既に民國を建設した。そして民權を實現してここに二百五十年になる。中國の古人にも亦この種思想はあつたのである。故に我等にして國家の長治久安と人民の安樂とを希望するならば、世界の潮流に順應して民權を用ふるに非ずんば不可である。去り乍ら民權はその發生後日猶淺く世界の各國は今も君權を用ひて居るものが多い。又民權を實行して中途挫折した國もある。失敗した國も多い。中國に民權論が發生して既に二千餘年になる。ところが歐米は民權を恢復したのは僅々一百五十年前のことに過ぎず、現在に至つて一時に流行するに至つたのである。

近代事實上の民權が、始めて發生したのは英國である。英國に民權革命の發生した時期は、正に中國の明末淸朝に相當する。當時革命黨の首領は「クロムウエル」で、英國皇帝「チャールス」一世を殺したものである。本革命の發生は、一般歐米人に異常の驚動を與へ、有史以來未曾有の

出來事とし謀反叛逆同樣に取扱はれたものであつた。勿論それ迄も暗闇裡に君主を弑することは敢て珍しくもなかつたが、「クロムウエル」が「チャールス」一世を殺したのは暗殺ではなかつた。即ち彼を法廷に引出して公開裁判を爲し、彼の國家及び人民に不忠なる所以の罪狀を宣布し、然る後之を理由として殺したのであつた。斯樣な狀態であつたが爲當時歐洲に於ては英國人は當然民權に贊成すべきものとなし、之より民權も發達の途に就くべしと考へられて居た。ところが焉んぞ知らん、英國人民は依然君權を歡迎して民權を歡迎せず、「チャールス」一世は死んだが、人民は猶も君主を思慕して居たものである。果して十年ならずして英國には復辟起り、「チャールス」二世を迎へて皇帝としたのであつた。その頃は恰度、滿清入關すれど明朝未だ滅びずと言つたときで、今を距る二百餘年に過ぎない。故に二百餘年以前英國に發生した第一次民權政治は、久しからずして消滅し、君權は依然隆盛を極めた。爾後一百年米國に革命起り、英國から脫離し、獨立して米國聯邦政府を建設し、現在に至る迄凡そ一百五十年である。これ世界に於ける最初の民權實行の國家である。米國の共和建立後十年ならずして佛蘭西革命を惹き起した。佛國革命勃發前の情形を見るに、當時「ルイ」十四世政權を總攬し專制を極め人民の苦痛堪え難きものあり、次で彼の子孫の皇位を繼承するや、更に暴虐無道を極めたがため、人民は遂に忍ばんとするも忍ぶ能はざる

に至つた。ここに於て革命は發生し、「ルイ」十六世は殺された。佛國人の「ルイ」十六世を殺したのも、英國人が「チャールス」一世を殺したときと同樣、彼を法廷に引出し審判を公開し彼が國家及び人民に不忠なる罪狀を宣布したものであつた。佛國皇帝が殺された後、歐洲各國は彼のために復仇せんとし、大戰十餘年に亙つた。從て當時の革命は先づ失敗と言はねばならぬ。そして帝制は再び恢復せられたのである。併し乍ら、佛國人民の民權思想は、之より更に發達を極めたものである。

民權史を繙いたものは誰しも知つてゐる通り、佛國に「ルッソー」と云ふ一學者がある。「ルッソー」は歐洲に於て極端なる民權を主張した人で、彼の民權思想に基いて佛蘭西革命は發生したのである。「ルッソー」の一生に於ける民權思想に關する最も緊要なる著書は民約論であらう。民約論の立論の根據は、人民の權利は生れながらにして自由平等である、人にはすべて天賦の權利がある、ただ人民が從來その天賦の權利を放棄した迄のことであると言ふにある。故にこの言論に依れば、民權は天が生み出したものなりと云ふことが出來る譯だ。併し乍ら歷史上の進化の道理に就いて言へば、民權は天の生み出したものではなく、時勢と潮流とに依て造成せられたものだ。從て進化の歷史には、「ルッソー」所說の如き民權の事實は全然なく、即ち「ルッソー」の言論に

は根據がないと言へる。であるから民權反對の人々は、「ルッソー」を以て無根據な話の種にする。去り乍ら、我等が民權の主張は、必ずしも先づ言論を以て主張するを要しない。何故なれば、宇宙間の道理はすべて先づ事實在つて然る後言論を發生し、決して言論あつて後初めて事實が發生する譯ではないからだ。

例へば陸軍の戰術學にしたところで、現在では既に系統ある學問となつては居るが、この學問の成立ちを研究するに、果して最初から學理があつたものであるか、それとも先づ事實が存在して居たものであるか。現在の軍人は、皆學校に入つて戰術學を研究し成業の曉國家の爲めに戰鬪するのだと云ふ。この種の考へ方から行けば、當然言論あつて然る後事實ありと云はねばならぬ。けれども世界の進化の情況から云へば、最初人と獸と鬪ふこと百幾萬年、然る後これ等毒蛇猛獸は纔に消滅したのであるが、その頃人と獸と鬪ふに當り、果して戰術はなかつたものであらうか。當時或は戰術があつたかも知れぬ、たゞ文字にて記載せられなかつたため取調べる方法がないだけのことではなからうか。その後人と人とが相爭ひ國と國とが相爭ふに至つて二萬餘年になる。その間又多少の戰爭を經過しなかつたであらうか。歷史に記載せられざる爲、これ亦後世に於ては知る由もない。中國の歷史に就いて考究するに、二千餘年前の兵書十三篇がある。十三篇の兵書は

卽ち當時の戰術を解釋したものに他ならぬ。その十三篇の兵書から中國の軍事哲學は成立した。故に、その十三篇の兵書に照せば、先づ戰鬪的事實があつて然る後始めてその兵書が出來たものであると云はずばなるまい。卽ち今日の戰術も亦古人の戰鬪の事實に基き漸次進步して來たものであらねばならぬ。最近無煙銃の發明後我等の戰術に非常な大變化を齎した。從前の戰術に於ては、兵士は敵影を認めても、尙且つ隊伍を組んで堂々前進したものである。ところが近來の戰術では敵を見れば卽座に伏せをして鐵砲を打つ。つまり之は無煙銃のあるがために我等は伏せをするのではあるまいか。これ卽ち先づ事實があつて然る後始めて書物ありと言ふものではなからうか。それとも猶書物あつて然る後始めて事實ありと言ふのであらうか。從前外國にこの戰術が始めて行はれたのは、南「アフリカ」の英「ボ」戰爭である。當時英國兵は「ボーア」人と戰ふにも亦隊伍堂々と應戰したものであつたが、「ボーア」人は地に伏せて戰つたため英國兵は莫大な損失を蒙むつた。卽ち伏地戰術は「ボーア」人から起つたものである。「ボーア」人はもと和蘭から「アフリカ」大陸へ移住したもので、當時の人口は僅か三十萬に過ぎず、何時も土着の土人と戰つて來たものである。最初「ボーア」人が「アフリカ」大陸に到着したとき土人と戰つたが、土人は何れも伏せをして戰つたため、「ボーア」人は少なからざる損害を受けた。卽ち彼等は土人から伏地戰術を習

つたことになる。後それを覺えて了つてから英人と戰つた。英人の損害の少からざりしは蓋し當然であらう。故に英人は「ボーア」人から伏地戰術を習つたことになる。その後英國兵は本國に歸還して之を全國に轉敎し、更に英國は之を全世界に傳へた。故に現在各國に於ける戰術學にはすべて之を採用してゐる。これに依ても先づ事實あつて然る後始めて言論が發生するのであつて、言論あつて後事實が發生するものではないことが判かるであらう。

「ルッソー」の民約論所說の、民權は天賦なりとの主張は、本來歷史上の進化の道理と相衝突する。故に民權反對の人々は、彼のこの種根據なき言論を捉へ來つて口實とし、「ルッソー」の所謂民權天賦說は元來不合理であると云ふ。併しながら彼に反對する人々が、彼のあの根據なき一句の言論を以て、直に民權に反對するそのことも亦不合理である。我等は宇宙間の道理を研究せんとすれば、須く先づ事實に據らなければならぬ。專ら學者の言論のみに據るは不可である。「ルッソー」の言論は既に根據がない。然も何うして當時の各國が尙それを歡迎せんとしたのであらうか。又何が故に「ルッソー」はあの樣な言論を發表することが出來たのであるか。彼は當時既に民權の潮流が湧き上りつつあるを看取した。故に彼は民權を主張したのである。彼の民權の主張は恰度當時の人民の心理にピタリと適合したので、人民は彼を歡迎したのだ。彼の言論は歷

史進化の道理と衝突しては居たが、當時の政治狀態には既に彼の所說を歡迎するやうな事實があつたのである。その種事實があつたが爲に、引證の誤つた彼の言論も尙一般の歡迎するところとなつたのである。「ルッソー」の提唱した民權の始意に至つては更に政治上千古に傳ふべき大功勞たるを失はぬ。

世界有史以來政治上に用ひられた權は、各代時勢の潮流を夫々異にして居たため、各その間の區別を然るべく明かにして置かねばならぬ。例へば神權時代に於ては、神權を用ふるに非ずんば不可であり、君權時代に於ては、君權を用ふるに非ずんば不可であつたと云ふやうに。中國の君權は秦の始皇帝のときに至つて殆どその發達の極點に達した。然し乍らその後の君主も尙も彼を學ばんとした。卽ち當時の人民は君權の大小に論なく君權でさへあれば依然衷心之を歡迎したものであつた。現在世界の潮流は民權時代に到達した。我等は將に速に之を研究しなければならぬ。そして前人の發表せる民權に關する言論は、例へば「ルッソー」の民約論の如く稍不合理な點があるからと云つて、民權のいいところ迄も反對してはいけない。又英國が「クロムウエル」の革命後復辟があり、佛蘭西革命が延長したからとて民權の實行は不能であると考へることも亦宜しくない。佛蘭西革命は八十年を經過して漸く成功し、米國革命は僅か八年ならずして大成功し

たではないか。ただ英國の革命は二百餘年を經過した今日尙依然として皇帝を戴いてゐるが之は例外だ。斯うした例外はあるが、種々の方面から觀察すれば、世界は大體に於て日一日と進歩して居る。我等は現在の潮流が既に民權時代に達して居り、將來如何やうに挫折し如何に失敗することがあつても、民權は世界に永く維持し得るものなることを信ずる。

故に三十年前、我等革命黨同志は、この決心を固め、中國を强盛ならしめ革命を實行せんとせば、卽ち民權を提唱するに非ずんば不可なりと提唱したのである。併し乍ら、當時この主張を露表するや、多數中國人の反對のみならず、外國人の非常な反對を受けたものである。中國革命勃發當時、世界には猶ほ勢力の强大なる專制君主が存在し、君權敎權を一身に統べて居たもので、露國皇帝の如き之であり、次に非常に强力なる陸海軍を一身に統轄して居たものに獨國墺國の皇帝があつた。當時世人は、歐洲に斯くも盛大なる君權の存在する今日、何うして亞細亞に民權を實行するなどと云ふ事が出來やうかと考へて居たものである。袁世凱の皇帝、張勳の復辟等が容易に行はれた所以も此處にある。然し乍ら、當時最も有力なりし露獨兩國の皇帝は今や覆滅せられて在らず、露獨兩國共に共和國と變つて了つた。之を以ても世界の潮流が事實上民權時代に入つて居ることが判かるであらう。從前中國人は、民權に反對し、常に我等革命黨には果して如何

なる力があつて滿淸皇帝を倒覆することが出來るであらうか等と問ねて居たものであつた。ところが辛亥の年の一擊で忽ち滿淸皇帝は轉覆して終つた。これ世界の潮流の效果でなくて何んであらう。實に世界の潮流の趨勢は、恰も長江黃河の水流にも比すべく、水流の向ふところ、或は許多の曲折があり、北に向つて流るるときあり或は南に向つて流るるときもあるが、流れて最後に至れば必ず東に向ふが如く、如何樣にも之を阻止することが出來ないのである。故に世界の潮流は神權より流れて君權に到り君權より流れて民權に到ると云ふやうに、流れ流れて現在の民權に至つたのであつて、之に反抗すべき方法はなかつたのである。若しもこの潮流に反抗したならば、假令袁世凱の如く絕大な力を持ち、又張勳の如く野蠻にして慓悍極まる軍隊を有し居たとしても、誰も彼も軈ては失敗しなければならない。現在の北方武人の專制は世界の潮流に反抗するものであり、我等南方の主張する民權は卽ち世界の潮流に順應するものなるが故に、假令南方政府は力量薄弱、軍隊の訓練及び兵糧彈藥の補充等に於て、すべて北方に及ばないとは云へ、潮流に順應する我等は、よしんば一時失敗することがあつても、將來必ずや成功するであらう。そして同時にその成功を永遠ならしむることが出來るであらう。之に反し世界の潮流に反抗し、すべて物事を逆に逆にと行つて行く北方は、今如何にその力が大であり、假令一時の僥倖に依り成功する樣

なことがあつても、將來必ずや失敗に終るであらう。その上再び永遠に恢復を企圖し難きは想像に難くない。現に神權を供奉する蒙古でさへも、既に革命が起つて活佛を打倒し神權の失敗せる今日である。西藏の神權の如きも將來人民のために打倒せらるべきは必定である。蒙古西藏の活佛は卽ち神權の最後のものであるが、時期一度到來せんか、如何やうに之を維持しやうとしても、久しくこれを保守することは出來ないであらう。現在歐洲の君權も漸次減少しつつある。例へば英國の如きは政黨に依て治められ皇帝自ら治めてゐる譯ではなく、從て皇帝を有する共和國と云ふことが出來やう。斯の如く世界の潮流は今や神權の存在を否定しつつあるのみか、君權も亦永遠の存在性を失ひつつあるのである。現在の民權時代は希臘羅馬の民權思想にその源を發して居るが、民權が復興してから今日迄僅かに一百五十年に過ぎない。然し乍ら將來の時期は長遠であり、必ず日一日と發達して已まないところのものであらう。故に我等は一面世界の潮流に順應せんがため、他面國內の戰爭を短縮せんとして、中國革命に民權制度の採用を決定したのである。

古來大志あるものは多くは皇帝たらんことを想ふ。劉邦の如き秦皇の出御を見て曰く「大丈夫正に斯の如くなるべし」と。又項羽曰く「彼取つて代るべき也」と。斯樣な野心家は代々絕えな

いのである。余が革命提唱の當初その來り贊成するものの中、十中殆んど六七人迄は、一種の皇帝思想を持つて居たものである。けれども我等の革命主義は單に滿淸を覆滅するものに非ず、同時に共和を建設せんとするにありと宣傳した結果、それ等十中六七人のものも漸次感化せられ、その皇帝思想は段々除去せられて行つた。が、やはりその中一人二人のものは、民國十三年になつても、尙皇帝たらんとする舊思想を棄てることが出來なかつたものだ。我等革命黨のものが相互に殘殺し合つたのも之がために他ならない。我等革命黨は宣傳の當初に於て民權主義を標榜し共和國を建設せんとした。そして共和國さへ建設すれば、皇帝を爭ふがための戰爭を免れ得るものと考へて居た。ところが惜しいことには、依然頑迷未開化の人があつて、之亦實際如何ともすることが出來なかつたのである。

從前の太平天國は卽ち前車の鑑である。洪秀全は當初廣西に事を起し、湖南、湖北、江西、安徽を席捲して南京に建都し、滿淸の天下は大半彼の所有に歸した。けれども太平天國は何が故に失敗に歸したか。その原因は幾つもある。その最大の原因を、或るものは外交に無理解なりしに歸すると言ふ。卽ち當時英國は大使波丁渣(Pottinger)を南京に派遣して洪秀全と條約を締結し太平天國を承認し大淸皇帝を承認せざらんとしたが、波丁渣の南京到着後、東王の楊秀淸には會ふこ

とが出來たが、天王たる肝心の洪秀全に會ふことが出來なかつた。何故なれば、洪秀全に會はんが爲には叩頭の禮を執らねばならなかつたので、波丁渣は到頭會ふことを承知しなかつたのである。そこで彼は北京に赴き滿清政府と條約を締結した。その後彼は「ゴルドン」を派して兵を率ひて蘇州を攻擊した。そして洪秀全は之がために失敗した。故に人は彼の失敗は外交の無理解に基くものと云ふ。成程或は之も彼の失敗の一原因であつたかも知れない。又或るものは、洪秀全失敗の原因は彼が南京を得た後、勢に乘じて長驅直進して北京を衝かなかつたからであるとも云ふ。成程洪秀全の北伐をしなかつたことも亦彼の失敗の一原因であるには違ひない。けれども余の觀察に依れば、この二原因なるものは何れも非常に小さいものであつて、最大の原因は彼等一味のものが南京入城後互に皇帝を爭ひ城を閉して自ら相殘殺し合つたことにあると思ふ。即ち第一は楊秀清と洪秀全との權力爭奪である。洪秀全が既に皇帝たりしに拘らず楊秀清も亦皇帝とならうとしたのである。當初楊秀清は南京の基本軍隊たる六七萬の精兵を率ひて居たが、皇位爭奪の內亂が發生したため韋昌輝は楊秀清を殺し彼の軍隊を討滅して了つた。ところが韋昌輝も亦洪秀清を殺してからは急に專橫となり又復洪秀全と權力爭ひをするやうになつたので、後皆が寄つてたかつて韋昌輝を滅して了つた。當時石達開は南京に內亂の發生したるを聽き、江西より急

ぎ南京に至り、之が調停を試みんとしたが、後迚も物になりそうにもないのを見、又その上、人から自分が如何にも皇帝を狙つてでも居るやうに猜疑せられたので、到頭南京を逃げ出し軍隊を率ひて四川に入つたが、間もなく又清兵のために滅ぼされて了つた。斯樣に當時洪秀全と楊秀清との皇帝爭奪が原因となつて、太平天國の洪秀全、楊秀清、韋昌輝及び石達開の四の基本軍隊は完全に消滅し、太平天國の勢力も之より大いに衰へたのである。太平天國の勢力衰弱の原因を推究して見れば、その根本は楊秀清が皇帝たらんとした一念にある。洪秀全は革命當時まだ民權主義のあることなんかは知らなかつたので、彼は起義の際五王を封じたのであつた。南京入城後楊秀清、韋昌輝の內亂に懲り懲りして二度と王を作るまいと考へたが、何分にもその後李秀成、陳玉成が屢々大功を樹てたこととて、勢ひ王に封じない譯に行かなくなり、而も洪秀全としては、彼等を王に封じて見たところで恐らくは餘り賴りにもなるまいと考へてゐたので、いつそやるならと云つたやうな譯で同時に又三四十の王を封じ、彼等の位號を相等しからしめ互に牽制せしめんとした。ところが却てその後は李秀成、陳玉成等と云ふ連中が各王を自由に引廻すことが出來ず、さつぱり押が利かなくなつて統一がとれず、結局洪秀全は之がために失敗したのである。故にこの失敗の原因は完全に皆が皇帝とならうとした點にあると言はねばならぬ。

陳炯明は一昨年廣州に於て叛旗を翻したが彼は何故かかる擧に出でたのであるか。一般に彼は兩廣に割據せんがためと言つたやうに考へられて居るが、その實仲々さうではない。陳炯明の謀叛前余は北伐を主張して彼に對し北伐の利害を剴切に說明したことがあるが、彼は頭から之に反對したものだ。後になつて余は彼が爭はんとするのは兩廣である、或は余の北伐に依て彼の地盤を妨礙せらるることでも心配して居るのかも知れぬと考へたので、最後の一日余は物柔かではあつたが遠慮會釋なく露骨に彼に向つて、我等の北伐が若し成功したならば將來政府は武漢ではなく南京に移轉して必ず歸つて來ない積りだ、從て兩廣の地盤は貴公に付託する考へでゐる、斯樣な譯であるから何うか折角我等を後援して貰ひたい、若し不幸にして北伐が失敗しても、我等には二度とおめおめ歸つて來る顏がないのだ、その時になつたならば貴公が何のやうな外交手段に依らうと、隨意に北方政府と妥協して兩廣の地盤を保存することも出來やうと言ふものだ、卽ち貴公が北方に投降しやうと我等の關するところでもなく、又貴公の責任でもないのだと言つたものだ。そのとき彼には何か胸に言ひ難い一物があつたやうに見受けられたが、由之觀之彼の志は單に兩廣の地盤だけではなかつたらしい。その後北伐軍が贛州に進んだとき彼は叛旗を翻したのであつた。彼は如何なる原因で、その時分になつて謀叛を起したのであらうか、それは他でも

ない、彼が皇帝たらんがためには、先づ極端に皇帝と相容れない革命軍を滅ぼさねばならなかつたからである。革命軍を滅してこそ、彼は何等かの方法を講じてその基礎を造り皇帝となることが出來るからである。この外陳炯明が皇帝思想の持主であつたことを證明するに足る一事實がある。辛亥革命後彼は常に人に向つて、幼時彼は常に片手に太陽を抱き片手に月を抱く夢を見たものであると語つてゐたもので、彼の詩の中にも「日月抱持負少年」と言ふ一句があつて、自ら之に註して、この段は夢に見た故事を誌し遍く人に示すとあり、又彼の名もこの夢から考へ付いたものである。諸君、彼の部下を見るがいい。葉擧、洪兆麟、楊坤如、陳炯光等の如き一人として革命黨であるものはなく、唯一の革命黨員であつた鄧鏗は夙の昔に彼のために殺されて了つたではないか。之を要するに陳炯明は皇帝にならんがために革命に附和したもので、從て皇帝にならうとする野心は今に至る迄失くならないのである。この外尙從前の皇帝志願者は數人は居た。民國になつて十三年彼等の心理は果して何んなであらうか。我等には今それを研究する時間がない。

余は今民權主義を說かんとしてゐる。だから諸君は民權とは究竟するに何う言ふ意味を持つて居るかを明白にしなければならぬ。若し果してこの意味を明白にすることが出來なかつたならば、

皇帝志願の心理は永遠に消滅することは出來ないであらう。諸君にして若し、皇帝たらんとするが如き心理があつたならば、一には同志が同志と戰はねばならず、二には本國人が更に本國人と戰はねばならぬ結果となり、全國は何時迄も相爭ひ相戰つて人民の禍害はその止まるところがないであらう。余は從前この種禍害を免れんとするの見地から、革命を發起するに當つて民權を主張し共和國を建設すべく決心したのである。共和國家が成立したならば誰が皇帝となるのであるか。人民が皇帝となるのである。四億人全體を以て皇帝とするのである。斯樣な方法を以てすれば皇帝志願者達の相爭ふのを避けることが出來、從て中國の戰禍を減少することが出來るであらう。中國の歷史に就いて見るに、朝を代ふる每に何れも戰爭があつた。例へば專制なる秦の始皇帝は人民の悉く反對するところであつたが、その後陣涉、吳廣の義を起すや、各省皆之に響應した。これ本來民權の風潮である。劉邦、項羽が出現するに至つて、楚漢の爭ひが發生した。劉邦と項羽とは何を爭つたであらうか。彼等は皇帝を爭つたのである。漢唐以來一朝と雖も皇帝を爭はなかつたものとてはなかつた。中國の歷史は常に一治一亂の歷史である。その亂るるに當つては、すべて皇帝を爭ふ以外何物もなかつたのである。外國では嘗て、宗敎のために戰ひ自由のために戰つたが、中國では幾千年來戰ふところはすべて皇帝と言ふ一個の問題であつた。我等革

命黨は將來戰爭を免れんとするの見地より、革命を起すに當り共和を主張して皇帝を不要とした。そして今共和は既に成立してゐる。然も尙ほ皇帝志願者は絕えない。卽ち南方の陳烱明の如き、北方の曹錕の如き、何れも皇帝志願者である。又廣西の陸榮廷の如きも皇帝の志願者ではあるまいか。この外皇帝志願者は何れ程あるかも知れないのである。中國歷代政朝の姓を換ふるのとき兵權の大なるものは卽ち皇帝を爭ひ兵權の小なるものは王を爭ひ侯を爭つた。然も現在の一般軍人は敢て大なるものも王たらず小なるものも侯たらんと志すものはなくなつたが、これ等は歷史上競爭の一進步かも知れない。

第二講　民權と自由

民權と言ふこの名詞は、外國の學者は常に自由なる名詞と並稱する。故に外國の多くの書物又は言論の中では、一般に民權と自由とを並列してある。歐米で、この二三百年來、その人民が奮鬪するところ競爭するところのものは、何物でもない、卽ち自由の爲であつた。故に民權は之に依て發達した。佛蘭西革命の際、彼等革命の口號は自由平等博愛の三つであつた。恰も中國革命に民族民權民生の三主義を用ひてゐると同樣に。之に依ても自由平等博愛は民權に根據するもので

あり、民權は又この三つに依つて初めて發達したものであると言ふことが出來ると思ふ。我等にして民權を說かんとするならば先づ自由平等博愛の三つに就いて語らなければならぬ。

近來革命思潮の東漸に伴ひ、この自由なる名詞も亦傳來した。新思潮を提唱する幾多の學者志士は非常に之を重要視し、自由を說くこと極めて詳細である。この種思潮は歐洲に於ては、二三百年前極めて重要なる地位を占めて居た。歐洲二三百年來の戰爭は、殆どすべてが自由を爭つたものであるが故に、歐米の學者は自由を極めて重要視し一般民衆も亦立派に自由の意義を理解して居たものである。然し乍ら中國では、近來この名詞が傳はつたものの、ただ一般の學者が曾て工夫し研究した結果、やつとのことで自由の如何なるものかが判つた位のもので、一般民衆に至つては、假令我等がそれ等の人々に對して自由を說いたところで、きつと判からないであらう。從て中國人は自由のこの二字に對しては實際全然理解がないと云つても多した間違ひはあるまい。この名詞が中國に傳つてから日尙ほ淺く、現在一般の新青年と留學生或は歐米の政治時務に關心しつつあるものが日頃から耳に聽き書物の上で見たりしてゐるので多少判かる位のところで、之とても如何なるものが自由であるかと言ふその自由の妙に至つては、彼等は未だ充分明かにするところ迄行つてゐない。故に外國人は中國人を批評して、中國人の文明の程度は眞に低

い、思想も甚だ幼稚である、自由の智識が全然なく自由の名詞さえもないと云ふ。然し乍ら外國人は一面中國人を批評して自由の智識がないと云ふかと思へば、又一面に中國人は一片の散沙であると批評する。

外國人のこの二つの批評を見るに、一面中國人は一片の散沙であつて團體がないと云ひ、又他面に於て自由が判らないと言ふのであつて、この二つの批評は如何にも矛盾して居るかのやうに思はれる。何うして矛盾して居るのか。例へば外國人は中國人は、一片の散沙であると云ふが、つまり一片の散沙と云ふ意味は何のやうな意味であらうか。卽ち個々に自由があり、人々に自由ある場合に、人々は自己の自由を極端に迄擴充することが出來る。だから一片の散沙を形成するのである。然らば一片の散沙とは何ぞや。假りに我等が一握りの砂を手に取つて見るとき、その多少の論なく、砂の一粒一粒は夫々常に活動して何等束縛せらるるところがない。これ卽ち一片の散沙である。若しこの散沙に「セメント」を加ふれば石を結成する。一つの堅固な團體に變つて石となる。この團體は非常に堅固であつて散沙は自由を失ふ。であるから散沙と石とを比較すれば、本來石は散沙の結合して出來たものであることが直に分かる。けれども散沙は石の堅固な團體の中に在つては活動することが出來ず卽ち自由を失ふのである。自由の解釋は簡言すれば、一個

の團體の中に在つてよく活動し來往意の如くなり得るもの卽ち自由である。中國にはこの名詞がなかつたがため、皆その妙を明かにしなかつた。けれども我等にはこの自由に彷彿たる一個の國有名詞がある。卽ち放蕩不羈と言ふ言葉である。既に放蕩不羈である以上、卽ち散沙と同樣で各個が非常に大きい自由を持つてゐる譯である。從て外國人が、中國人を批評して、一面に於て結合能力がないと言ふが、既に結合能力のない以上當然散沙であり非常に自由でなけらねばならぬ。然るに中國人に結合能力がないと言ふ彼等は、又他面に於て中國人は自由が判らないと言ふ、卽ち彼等は我等中國人が皆自由を有つて居ればこそ一片の散沙であるが、若し之が一個の堅固な團體を結成して居れば、一片の散沙と看破することが出來ないと言ふ點には一向お氣付きがないのだ。故に外國人が斯樣に我等を批評する點は卽ち自ら矛盾に陷つてゐるものに他ならぬ。

最近二三百年來、外國では極力自由を爭つたものであつた。だが結局、自由とはいいものであるか何うか。そして自由とはつまり如何なるものであるか。余の見るところに依れば、我中國の一般人には、ここ二三百年來の外國人の所謂自由の爲めの戰ひなるものの妙は、大體に於て判つて居ないのではないかと思はれる。彼等外國人は、自由を爭ふときに當り自由主義を鼓吹し、自由主義を以て神聖なるものと稱し、甚しきに至つては「自由を與へよ然らざれば死を與へよ」等と云ふ言葉

が、自由を爭ふときの口號となつて居たものである。中國の學者も外國人の學說を翻譯し、この言葉その儘を中國に持つて來て、且つ自由を擁護し非常なる決心を以て奮鬪したもので、その當初の勇氣は殆ど從前の外國人のそれにも劣らなかつた。けれども、中國の一般民衆は、依然自由の何ものたるかを了解することが出來なかつたのである。諸君は自由と民權とは同時に發達したものなることを知らねばならぬ。故に今日民權を說くに當つては自由に就いて說かねばならないのだ。我等は歐米に於て自由を爭ふが爲に、何れだけの血が流されたか、何れだけの多くの生命が犧牲にせられたかを知らねばならぬ。余が前回に說いて置いた通り、現在世界は民權時代である。歐米に民權が發生してから既に一百餘年になる。民權は自由を爭つて後始めて獲得せられたものである。最初歐米の人民が生命を犧牲にしたのは、本來自由を爭ふが爲めであつた。そして自由を爭得した結果始めて民權を獲得することが出來たのである。當時歐米の學者が自由を提唱して戰つたのは、恰度我等が民族民權民生の三主義を提唱するのと同じ理窟である。之に由ても歐米の人民の最初の戰は自由のためであり、自由を爭得した後、學者が始めてこの結果を民權所謂「デモクラシー」と稱したものであることが判かるであらう。この「デモクラシー」と言ふ言葉は希臘の古い名詞であつて、然も歐米の民衆も亦現在ではこの名詞に對して左迄關心せず、政治上の

一術語として取扱はれて居るに過ぎず、之を自由の二字が、命懸けに取扱はれて居るのに比ぶれば雲泥の差である。民權は希臘、羅馬時代已にその端を發してゐる。當時の政體は貴族共和政體であつて、既にこの名詞は存在して居たのであるが、その後希臘羅馬の滅亡と共にこの名詞も自然忘れられて了つた。最近二百年來自由の爲戰爭が行はるるに連れ、民權と言ふこの名詞も復活せられ、殊に最近數十年來民權を說くもの益々增加し、中國に迄も流行して、又民權を說くものが非常に澤山出來て來た。尤も歐洲一二百年來の戰爭は民權を爭ふとは言はず自由を爭ふと言つたものだ。自由の二字を言へば、歐洲人は誰でも容易に解かり、當時の歐洲國民が自由の名を聞いて容易に合點のついた有樣は、恰度中國人が發財(金モウケ)と言ふ言葉を聽くと同樣、一般の人々の心には非常に貴重なものと考へられて居たものである。今若し中國人に對し自由を爭へと言つても彼等には何のことか頓と解からないであらう。從て附和することも願はないであらう。けれども若し、彼等に對し發財と言へば、それこそ大勢のものが隨いて來ようとするだらう。

當時歐洲に於ける戰爭には、「自由を爭ふ」といふ文句が標題にされて居た。そして彼等はこの名詞をよく了解して居たために、人民は自由のために奮鬪し、自由のために犧牲を惜しまなかつたのだ。實際彼等は非常に自由を崇拜して居たのである。何が故に歐洲人民は、かくも自由を

歡迎したのであるか。現在の中國人民は、自由には無理解であり乍ら、發財と聞けば、何うしてそんなに歡迎するのであらうか。その間の幾多の道理は、之を詳細なる研究に俟つて、始めて明かにすることが出來るであらう。中國人が發財と言ふことを聽けば、直に非常な歡迎振りを示す理由は、中國が現在民窮財盡の時代にあるがため人民の受くる苦痛は貧窮であり、而も發財と言ふことは貧窮を救ふ唯一無二の良法があるからである。發財には何んないいところがあるか。即ち發財すれば貧窮を救ふことが出來、貧窮さへ救はるれば苦痛は受けなくても濟む。所謂救苦救難の特效がある。人民が貧窮の苦痛を受けつつあるときに、誰かが、彼等に對して發財して彼等の痛苦を解除するのだと言ひさへすれば、自然に彼等は隨いて來るであらうし、又當然生命懸けの奮鬪もするに違ひない。

「アメリカ」は一二百年前自由のために戰つたが、當時「アメリカ」人民の自由を聽くことは、恰も現在の中國人が發財を聽くのと同樣であつた。彼等は何が故に斯くも自由を歡迎せねばならなかつたか。當時歐洲に於ては君主專制が極度に發達してゐたからだ。當時歐洲文明は中國周末の列國同樣であつた。中國の周末の頃は歐洲に於ける羅馬と同時代である。羅馬が歐洲を統一したのは恰度中國の周秦漢の時代である。羅馬は初時共和を建立したが後帝制に變じた。羅馬滅亡後

歐洲列國相對峙するに至れることは、中國の周朝亡びてより東周の列國となつたことと同樣である。だから一般學者は、周朝滅亡後七雄長を爭つたのを、羅馬の滅亡後列國に變成した情形と並べ論じて居る。羅馬が列國に分裂して封建制度は樹立せられた。當時大なるものは王、小なるものは侯と言ひ、最小なるものには伯子男迄あつて何れも專制を極めたものだ。その種封建政體は中國周朝の封建制度に比較して專制振りは更に激しかつたもので、歐洲人民が、その專制下に受けた苦痛は、今日我等の到底想像も及ばざるところ、之を中國歷朝の人民が受けたところの專制の苦痛に比べて、更に悲慘なものであつたに違ひない。この原因は、中國に於ては秦朝の時代直接人民に對するや、誹謗するものは罪一族に及び偶語するものは殺して屍を市中に曝らすと云つたやうな專制を極めたものであるが、遂に之がためその滅亡を促すこととなり、以後の歷朝の政治は、大體に於て人民に對しては寛大な態度を執り、人民は納稅の外は殆ど官吏とは無關係であつたのに反し、歐洲に於ては、何事にも一々直接人民を拘束すると云つた專制振りであり、又その時間も長くその方法も年と共に嚴密なるものがあつて、實際その專制の進步は中國に比べて餘程激しかつた。故に歐洲では二百年前、その樣な極めて殘酷なる專制の苦痛を、恰度現に中國人が貧窮の苦痛を受けつつあると同樣、受けたものである、人民は斯樣な殘酷な專制を久しく受

けて深く不自由の苦痛を味つた。從つて彼等の生きるがための唯一の方法は、卽ち奮鬪して自由を爭ひ、その苦痛を除去するにあつたのである。故に一度び人の自由を說くを聽くや、之を非常に歡迎したのも無理からぬ次第である。

中國古代の封建制度が破壞せられてからは、封建の淫威は一般人民に迄及ばなかつた。秦以後歷代皇帝の專制の目的は、第一は、彼等自らの皇位を保守し、永遠に家天下たらしめ、彼等子子孫孫をして萬世迄も安享ならしめんとするにあつた。故に人民の行動に對しては、これがため皇位を脅かさるるときに及んで始めてその絕大の力を用ひて之を懲治した。故にこの場合或る一人のものが謀叛したときにはその九族までも誅戮せられたのである。斯樣な嚴重な刑罰を以て人民の謀叛を禁止したその用意の存するところは、卽ち專制皇帝が永遠に皇位を保守せんとするにあつた。之を逆に言へば、人民は皇位さへ侵犯しなければ、彼等が何んなことをしようとも何等皇帝の構ふところではなかつたのである。故に中國に於ては秦以後歷代皇帝は、ただただ皇位に許り氣を取られ、人民のことは一向お構ひなしで、人民の幸福なんて云ふことはてんで問題にせられなかつたものである。現在民國になつて十三年になるが、政體の混亂に禍せられ今以て建設の工夫がなく、人民と國家との關係も今以て理解せられてゐない。

我等は民國以前清朝の皇帝の專制が何んなであつたか、十三年以前人民と皇帝とは何んな關係にあつたかを回想して見やう。清朝時代には一省毎に上に督撫あり中間に府道あり下に州縣があつて、皇帝を輔佐して居たもので、人民と皇帝との關係は至つて少なかつた。唯一つの人民對皇帝の關係と言へば、納税であつた。田賦を納める以外政府とは全然無關係であつた。之が爲め、中國人民の政治思想は非常に薄弱であり人民は誰が來て皇帝にならうと無關心で、ただ田賦を納めさへすれば人民の責任は、これ終れりとしたものだ、又政府も政府で人民が租税を納めさへすれば彼等のことには一向お構ひなしと云つた按配であつた。ただ其間、人民は間接の苦痛を受けねばならなかつた。と云ふのは國家の衰弱のため、外國の政治經濟の壓迫を受けても之に抵抗する力がなく、結局民力財力とも兩つ乍ら窮り盡きて、人民は貧窮の苦痛を受げねばならなかつたからだ。この種苦痛は間接の苦痛であつて、直接のものではない、從て當時の人民の皇帝に對する怨恨はまだ少なかつた。

併し乍ら、歐洲の專制は、中國のそれとその趣を異にして居る。歐洲は羅馬滅亡後、二三百年以前に至り、君主の專制は非常に進歩した。故に人民の受くる苦痛も亦非常に大きく人民は迚も耐え切れなくなつた。當時人民は斯樣な苦痛を受けて色々と不自由なことが多かつたが、就中最

大のものは、思想の不自由言論の不自由及び行動の不自由であつた。この三種の不自由は現在では已に過去の遺物となつて、その詳細の情形がどのやうであつたか、我等之を見る由もないが、行動の不自由に就いては、その幾分を窺ひ知ることが出來ると思ふ。例へば現在我華僑が、南洋の和蘭又は佛蘭西領に在つて、その幾分を窺ひ知ることが出來ると思ふ。例へば現在我華僑が、南洋知られると思ふ。即ち爪哇の如きは、本來中國の屬國で曾ては中國に進貢して居たもので、その後和蘭に歸屬した土地であるが、和蘭政府の管理に歸してからは、中國の商人にしろ學生にしろ又は勞働者にしろ爪哇地方へ行くものは、誰でも上陸前、和蘭の巡査がやつて來て査問し、それから中國人を小さい一室に入れて衣服を脱がせて醫者に頭の先から足の先きまで檢査せしめ、その上指紋を取り體重を計つてやつとのことで出して呉れ、それから彼等の上陸を許す。上陸後は住所も明かに申告しなければならぬ。そして住所移轉の際は通行證を貰はねばならず、晩は九時以後は通行證があつても通行は許されず、別に夜間通行證を貰はなければならず且つ手提「ランプ」を携へねばならぬと云ふのが爪哇に居住する華僑が和蘭政府から受ける待遇であつて、即ち行動の不自由である。斯樣な不自由な待遇は、必ずや從前の歐洲皇帝が人民に對して用ひたところのものが、今日迄殘存してゐて、和蘭人が中國人を待遇する際使用するのであらう。我等は

我華僑が現に受けつつあるこの種待遇から、從前歐洲の專制がどのやうであつたかを類推することが出來ると思ふ。この外尙ほ人民の營業工作及び信仰等種々皆不自由なものがあつた。例へば信仰の不自由に就いて云へば、人民は何處に住んで居らうと人民が願はうが願うまいが一律に一宗教を信仰すべきやう强迫せられたものである。これに依る苦痛も人民も仲々に忍受し難きところであつた。斯樣に當時歐洲人民の受けた種々なる不自由の苦痛は眞に水深火熱とも云ふべき甚しいものであつた。であるから彼等が一度人の自由を爭へと提唱するものあるを聽くや、極力之を歡迎し之に附和したのも蓋し當然である。これ卽ち歐洲に於ける革命思潮の起源である。

歐洲の革命は自由を爭はんとするにあつた。人民は自由を爭はんがために、無數の碧血を流し無數の生命家庭をも犧牲にしたのである。だから一度び爭つて之を獲得した後は、人々が之を奉じて神聖なものとし、卽ち今日に至つても亦依然之を非常に崇拜して居るのも無理からぬところだ。この種自由の學說は、從來中國に傳はり一般學者も亦頗る熱心に提唱したため、多數人民も亦中國に於ても自由を爭はねばならないといふことを知つた。今日我等は民權を講じつつあるが、民權の學說は歐米より傳來したものである。諸君は是非とも民權とは一體如何なるものであるかを明かにせねばならぬ。そして同時に又民權と同類項の間柄なる自由とは如何なることかを

明かにしなければならぬ。從前歐洲人民の受けた不自由の苦痛は忍ばんとしても忍ぶ可からざるものであつた。ここに於て萬衆は心を一にして自由を爭つた。自由の目的に到達して後、民權は卽ち之に隨つて發生した。從て我等にして民權を說かんとせば、先づ自由を爭つた歷史から明かにしてかからねばならない。近年歐米の革命風潮中國に傳來するや、中國の新學生及び許多の志士は、何れも起つて自由を提唱した。彼等は以爲らく、歐洲の革命は、從前の佛蘭西のそれの如くすべて自由を爭ふにあつた、我等現在の革命も亦正に歐洲人を學んで自由を爭はねばならぬと。けれどもこの言論は、人の云つたことを亦云ふ所謂口眞似とも言ふべきもので、民權と自由とに對して心力を盡して研究したこともなければ、徹底的に了解して居ないものの云ふことである。我等革命黨は從來三民主義に依る革命を主張し、革命を以て自由を爭はんと主張したことはないが、之には深い意味がある。從前佛蘭西革命の口號は自由であり米國革命の口號は獨立であつた。そして我等革命の口號は卽ち三民主義である。三民主義は、多大の時間を費し工夫に工夫を重ねて始めて出來たもので、人の口眞似ではないのだ。何が故に一般の新靑年が自由を提唱することが間違であると言ふのか。そして何が故に當時歐洲で自由が說かれたことは正しいと云ふのか。この道理は旣にお話した筈である。一個の目標を提示して民衆を奮鬪せしめんがために

は必ず人民に膚を切る程の切實なる苦痛があらねばならぬ。斯樣な苦痛があつて後始めて人民は熱心に附和して來るものである。歐洲の人民は、從前深酷なる專制の苦痛を受けて來たもので、從て一度び自由の提唱せらるるや、萬衆は心を一にして贊成したのである。假りに若し、中國に自由を提唱したとすれば何うであらう。從來この種苦痛を受けたことのない人民から、何等の理解が得られないのは必定であらう。之に反し若しも中國に發財を提唱せんか、必ず人民は之を衷心歡迎するであらう。我等の三民主義は、卽ち發材主義のやうなものだ。この道理を明かにするには、繰返し解釋しなければならぬ。繰返し解釋することに依つてその道理も理解出來るであらう。それならば何故我等は直接に發財を說かないのであるか。卽ち發財だけでは三民主義を包括し得ないからだ。三民主義に依つてこそ、發財をも包括することが出來るのである。露西亞革命の當初共產を實行したのは發財と似たもので、卽ち直接にして單簡な富を獲得する主張であつた。我等革命黨の主張し目指すところは、一事に止まらない。故に單簡に發財の二字を以て包括する譯には行かないのだ。自由の名詞など使へば猶ほ更である。

近來歐洲の學者が中國を觀察して何時も、中國は文明の程度が極めて低い、政治思想は甚だ薄弱である、自由でさへもてんで分らない、我等歐洲人は一二百年前自由のために戰つた、自由の

爲めに犧牲を敢てした、そしてどの位驚天動地の大事をしたかも知れない、それに中國人に今尙ほ自由が何ものであるかさへ分らない、之に依つても我等歐洲人の政治思想は中國人よりも遙かに優れてゐることが判からう、中國人は自由を說かないから政治思想が薄弱であると云はねばならぬと云ふ。この種の議論は、余の見るところでは、通用しないと思ふ。歐洲人が既に自由を尊重するからには、何故又中國人は一片の散沙であるなどと言ふのであらうか。從前歐洲人が自由を爭はんとしたとき、彼等の自由の觀念は頗る濃厚であつたに違ひない。ところが自由を獲得し目的已に達せられてからは、恐らく彼等の自由の觀念は漸次薄らいで行つたのではあるまいか。若し假りに現在再び自由を提唱して見ても從前のやうには歡迎せられないであらうと余は考へる。而も且つ歐洲の自由を爭つた革命は二三百年前の舊式な方法であつて、現在では迚も實行出來るやうなものではない。一片の散沙に就いて論ずれば、それは如何に精采であることか。精采なることは、卽ち充分な自由のあることである。若し不自由であるとすれば一片の散沙たり得ないではないか。從前歐洲は民權萌芽時代には自由を爭はんことを主張し、目的の己に達せらるるや、各人は皆自己の自由を更に擴大せんとした。かうなると自由は兎角度を過しやすく、果して幾多の流弊は發生した。故に英國の「ミル」なる一學者は、一個人の自由は他人の自由を侵犯せ

ざるを以て範圍とする、斯くてこそ眞の自由である、他人の範圍を侵犯するが如きは決して自由ではない、と說いた。歐米人の自由を說くや、從前その範圍なく、英國の「ミル」氏に至つて始めて自由の範圍が定められた。而してそこで自然自由は非常に減少せらるることとなつた。斯樣に彼等の中の學者は、己に自由は一個の神聖にして侵すべからざるものではなく、從て或る範圍を定めてそれを制限しなければならぬことを漸次覺つて來て居たのである。若し外國人が中國人を批評して、一面中國人は自由が判らないと云ひ、又他面中國人は一片の散沙であると云ふのならば、この種の批評は實際に於て相互に矛盾して居るもので、中國人が既に一片の散沙である以上、本來充分自由である筈だ。然し若し一片の散沙であることが惡いと云ふのならば、我等は早きに及んで水と「セメント」とを加へ、散沙と「セメント」とを結合して石となし堅固なる團體を造らなければならぬ。だがそのときになれば散沙は活動することが出來ず、卽ち自由を失ふことになる。故に中國人の受けつつある病氣は自由を欠いて居るが爲めではない。若し果して一片の散沙が中國人の本質であるとすれば、中國人の自由はとくの昔充分でなければならなかつた筈で、ただ在來中國人には自由と言ふ名詞がなく從つてこの思想がなかつたと言ふことだけに過ぎない。尤も、中國人にこの思想がないと言ふことは、政治と何んな關係があるか。結局中國人に

は自由があるか無いか。

我等は一片の散沙の事實を以て研究すれば、卽ち中國人には自由が極めて豐富であつたことが分かる。自由が餘りに多過ぎたがために、皆が不注意になり、氣にも留めず、この名詞さへも無關心であつたのだ。之は一體何うした譯からであらうか。これ恰も、我等が日常生活に於て最も重要なものは衣食であり、一日二回の飯、年二着の衣服は何うしても必要であるが、實は尙もそれよりも更に重要な一事であるのであるが、一般の人々は皆飯を食はねば死ぬ、故に飯を食ふことは最も重大なことと考へて居て、飯を食ふことよりも一萬倍以上も重要であるその一事に氣が付かずに居り、從つて之を重大視しないのと同樣な譯である。この一事とは何であるか。卽ち空氣を食ふことである。空氣を食ふことは卽ち呼吸である。何が故に空氣を食ふことが飯を食べることよりも、その重要性に於て一萬倍以上だと言ふのであるか。飯を食ふのは、一日二度又は一度でも生を養ふことが出來るが、我等は空氣を食べて生を養ふがためには、一分間に少くとも十六回呼吸しなければならぬ。それで始めて氣持よく生きられる。若しそうでなければ、迚も辛棒出來るものではない。誰でも本當に思へないものは、實地に試驗して見るがいい、鼻孔を一分間塞いで十六回の呼吸を止めて見ると、余が今試驗したやうに一分もたたない裡に、とても辛棒し切れな

くなるであらう。一日を二十四時間に、一時間を六十分に分ち毎分十五回呼吸するとせば、一時間は九百六十回、一日には二萬三千〇四十回呼吸しなければならぬ。故に空氣を食ふことは、飯を食ふことよりも一萬倍の重要性があると言つても實際間違はないであらう。斯樣に大切なものであるにも拘らず、我等が之を感覺しない原因は、卽ち空氣は到る處に存在し、之を取るも盡きず之を用ゆれど竭きず、一日中朝から晩迄吸ふのに、何等の工夫も要らないからであつて、飯を食べるのに人手でつぎかへたりするのとは比べものにならない。從つて我等は食に有付くことは非常に困難であるが、空氣を探して食ふことは至つて容易である。餘りに容易過ぎるため、つい人が注意をしなくなるのである。鼻孔を閉し空氣を吸ふことを停めて、空氣を吸ふことの重要さを試驗することは、小試驗に過ぎない。若し大々的に試驗して見ようとするならば、この講堂の四方の窓を全部閉め切つて終へば、我等の吸ふ空氣は段々減少して數分ならずして、現在この數百の人は辛棒し切れなくなるであらう。又一人を小さい部室に一日中閉込んで置いたならば、室外へ出されたときには非常な快さを覺るであらうが、これ等も亦同じ理窟である。中國人は自由が充分過ぎたために、之を知らずに居たので、恰度室內の空氣が豐富な間は我等はその重要さを覺えないが、窓を締めて空氣が入らないやうにすると、始めて空氣の重要さも判かるのと同じ理

窟なのだ。歐洲人は、二三百年前專制の苦痛を受けて、全然自由と言ふものがなかつたからこそ、彼等は自由の貴ぶべきを知り生命を棄ててでも之を爭はんとしたのだ。自由を爭はなかつた以前は、恰度小部室に閉込られてゐると同樣、又爭つて自由を獲得した後は、恰も小部室から急に外へ出されて新鮮な空氣に遇つたのと同樣であつた。故に彼等は、自由の如何に貴重なものなるかを覺つたのである。故に彼等は常に「自由を與へよ、然らずんば死を與へよ」との一句を口にしたのである。

けれども中國の情形は之と趣を異にして居る。中國人は自由を知らず、ただ發財を知つて居るのみだ。中國人に對して自由を說くは、恰かも廣西の深山に住む猺人に發財を說くと同樣である。卽ち猺人は常に深く山中に住し、熊膽鹿角を携へ人里に出て來り物々交換をする。初めの頃、里の人が彼等に錢を以て交換せんとしても、彼等は之を受取らず、ただ食鹽又は反物と交換することを樂しみとして居たものである。我等の觀念から言へば、發財と言ふことは最もいいことになつてゐるが、猺人の觀念では、ただ役に立つ品物でさへあれば滿足して居たのである。彼等には發財と言ふことは判からず、從て錢を得ることを喜ばなかつたのである。中國の一般の新學者が、中國の民衆に對して自由を提唱するのは、恰も猺人に向つて發財を說くと同樣である。中國

人には自由なんか必要ないのに、學者達は尙も自由を宣傳しやうとする。眞に時務を識らざるものと謂ふべきである。歐米人は百五十年以前に在ては自由を得ることが因難であつたが故に、彼等は生命を棄てて爭つたのである。彼等が爭つて目的を達した後、例へば佛國、米國の如きは、我等が常に民權實行の先進國家と稱するところではあるが、果してこの二國家の人民達は、皆自由を持つことが出來たであらうか何うか。卽ち學生軍人官吏及二十歲以下の未成年者の如きは何れも自由はないのである。故に歐洲二三百年前の戰爭は二十歲以上の人及び軍人官吏學生たらざる人が自由を爭つたのに過ぎず、自由を獲得してからも、その自由は彼等この數階級の人以外のもののみに限られ、これ等數階級の人々には、今尙ほ自由は存在しないのである。中國の學生は自由思想を抱懷するに至つてからも、別に之を用ふるところもないので學校へ持つて行つて用ひたものだ。ここに於て學潮は生れた。自由を爭ふと言へば、その名は美しいが、而も元來歐米人の說くところの自由には極めて嚴格な限界があり、人々皆自由ありと言ふことは出來ないのであるが、中國の新學生の說く自由は、凡ての限界を打破して了つたものである。この種學說が社會で歡迎せられやう筈もなく、遣り場に困つて到頭學校內へ持込んで使用した。斯うした譯から、學校騷動の風潮が絕間なく發生することとなつたが、之は全く自由の用法を履違へた爲に外ならな

い。中國の歷史を識らず、中國人民が古來充分の自由を持つて居たことを知らない外國人なれば別に不思議もないが、中國の學生迄が、竟に「月出而作、日入而息、鑿共而飲、耕田而食、帝力於我何有哉」と云ふ、この先民の自由歌を忘却して了つたのは、これこそ却つて非常な奇怪事ではないか。この自由歌に依つても、中國には古來自由の名こそなけれ、確かに自由の實があり且極めて之が充分であつて、それ以上を求むる必要のなかつたことが分るではないか。

我等が民權を說かんとするには、民權は自由から發生したものなるが故に、歐洲人民が當時自由を爭つた情形を明かにしなければならぬ。若しも之を明白にしなかつたならば、自由の如何に貴ぶべきものかと言ふことが判らないであらう。當時歐洲人の自由を爭つたのは、一時の熱狂に過ぎず、其後熱が冷め漸次冷靜を取り戻すと共に、自由にいい點もあり惡い點もあつて、決して神聖なものではないと言ふことが分つて來たのである。從つて外國人の所謂中國人は一片の散沙であると言ふ、この點我等は之を承認する。けれども中國人には自由が分からない、政治思想が薄弱であると云ふ點に就ては、我等は之を承認することが出來ない。何故に中國人は一片の散沙であるか。如何なるものに由つて一片の散沙は形成せられて居るのであるか。卽ち各人の自由が餘りに多く、中國人の自由が餘りに多過ぎるがために他ならぬ。だから中國には革命が必要なの